THE CENTRAL REVIEW

贈呈

中央公論

LIBRARY
OF THE
UNIVERSITY
OF
CALIFORNIA

第廿五年 第七號

第二百五十六號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

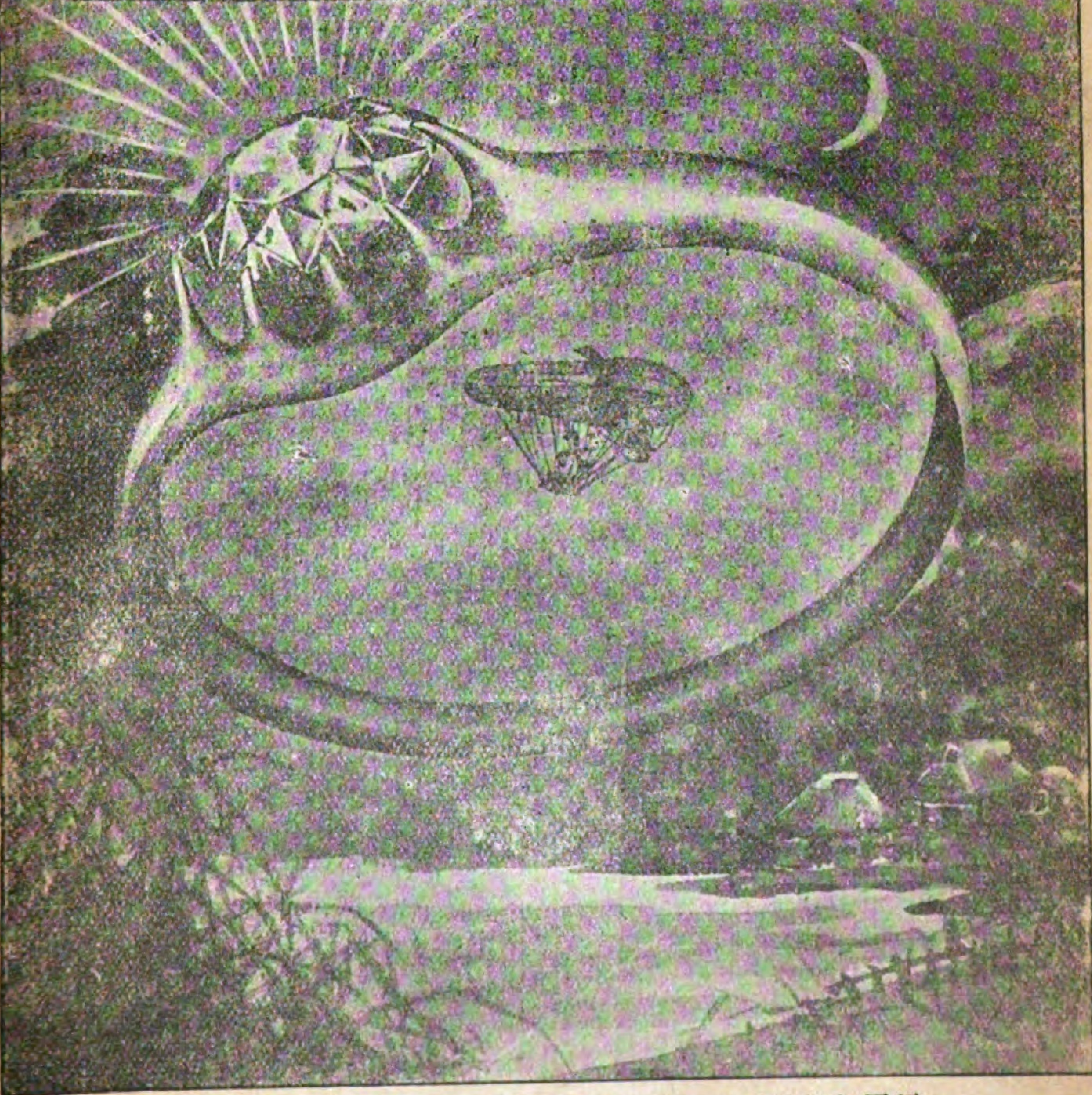
此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

歐米に於ける最近流行の
空中飛行機は
日本に於ける紳士貴婦人
の愛用せるダイヤモン
ド入人身装飾の如く流
行せり

今般新荷着ダイヤモンド
は純白色にして無疵な
り

價格(壹個に付)
金百八拾圓より
金壹千五百圓まで
外に金參拾圓以上各種

東京市京橋區八官町
DK
小林時計店
電話新橋一〇〇三



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

好個の清涼新劑

文藝倶樂部

七月一日發行　第九號　正價廿五錢　郵税二錢五厘

- 脚本　母　佐藤紅緑
- 小說　孤兒　泉斜汀
- 小說　森の火　勝間舟人譯
- 小說　叔母さん　福田吟月

◎活社會！　◎演藝界！　◎長廣舌！
◎忙中閑！　◎懸賞俳句！　◎句相撲！

◎情歌！　◎端唄！　◎小品文！
◎一口噺！　◎滑稽問答！　◎雜題！

東京本町　博文館

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中村春雨新著

歐米印象記

特價提供！（但五千部限り）

特價 **貳圓**　小包料 十二錢

藤島武二氏意匠三色版

口繪其他六葉 挿入

貼付 寫眞版

壹百個箱入

前後四年の歐米生活の收穫！

世間一般の飛脚的旅行の報告書と同視する勿れ

我が沈睡停滯せる文壇には自ら其の齎し歸れる大陸の新思想の血精注射を試みて、近時騷壇に噴々の名を露せる著者は、今や其の前後四年に亘りての歐米生活中に於ける腦裡の印象を細叙して本書を成せり。自ら是れ坊間の飛脚的旅行記と選を異にせる所以。殊に著者が激しき近代思潮の動搖に伴ひて、羈旅より羈旅に移りたる情味の粹を傳へて剩さず、プリンストンの學窓、紐育の熱閙裡を初め、大西洋に渡りて倫敦、伯林の長知生活、さては巴里、瑞西、露都漫遊の印象を止め、其如何に紳士な見、淑女に接し、民族を察し、習慣に處し、或は無賴のぐうたら女を見たるか、渠の眼に映じたる人面玲瓏のブライトサイドと、百鬼夜行の暗黑面と、悉く一枚のレンズに收められて反映したるもの、正に本書獨擅の妙處也。

總クロース綴　菊版高雅美裝　定價金二圓三十錢

水野葉舟新著

愛の書簡

手紙は人生に最も緊密なる文學にして詩にして且つ實用的の文字也——本書は小說以上の興味を有す

萬朝報批評——此著決して戀愛書簡集に非ず、親子兄弟夫婦朋友間の情愛を中心とし、如何にして其情愛の流露する書簡を認むべきかを說ける者、上編には手紙に關する雜觀を叙して手紙の効力性質趣味を說き、花束花環の作例、花言葉をも附し、中編には著者獨特の作例を掲げ、下編には鷗外、蘆花、藤村、花袋、獨歩、子規等の作物、私信等の模範とすべきものを蒐集したり、實務の書簡文範は完全なるもの多きも此著の類の如きは稀也、而して此著は稀なる者の最上なり

宮崎與平 **裝**　四六版頗美裝

定價 六十錢

送料 八錢

發兌　東京神田表神保町四　東京京橋中橋廣小路　（振替貯金口座東京二〇七八九番）　**春秋社書店**

發賣　東京京橋中橋廣小路（振替東京四一〇九）　**前川文榮閣**　其他 **各地** 書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

青年を熱狂せしめたる『學生』第三號出づ！

學生

▲文と武　大町桂月
▲地圖に無き王國　江見水蔭
▲招かずして來る人格の人　乃木陸軍大將
▲地方の大黑柱　齋藤海相
▲優劣の差は何より生ずるか　澤柳政太郎
▲空に消え行く煙り草哉　中村工學博士
▲無線電送寫眞
▲五十三次　芳賀博士
▲無軌道式の電車
▲水陸兩用の飛行機
▲米國の綠茶王も亦日本人
▲アイドルボーイ日記

主筆　大町桂月

第三號　七月一日發行

定價　一册郵稅共十七錢五厘　三册同金五拾壹錢　六册金九拾九錢　十二册同壹圓九拾三錢

▲飛行機と鳥　丘理學博士
▲英文學生　七月の片山教授
▲パントグラフ　中村理學博士
▲西遊鎖談　横山博士
▲動物の運動　石川博士
▲富士山名所記　小島烏水
▲英雄角力 秀吉と那翁　桂月
▲ウオーターポーロ　筒井有
▲研究問題 夏期休業利用法　元良博士　三土忠造　鎌田榮吉（其他記事澤山）

第壹號五版發行――第貳號三版六月十日出來せり！

發行所　東京神田　富山房　電話本局一〇三六　振替貯金五〇一番

信用なき店舗皮卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

綠陰消夏の好讀物

雄辯

七月號

定價一冊貳十錢郵税一錢五厘
六冊前金税共壹圓十錢十貳冊貳圓十錢

毎月一日發行

雄辯文學　新人月旦

- 日本海大海戰の教訓　海軍大佐　小笠原長生
- 外交界の彗星　林　毅陸
- 予が東京觀　山上萬次郎
- 片面を認められたる御伽話　巖谷小波
- 禪學管見　理學博士　近重眞澄
- 人の性善なるか惡なりか　文學博士　村上專精
- 功過　大内青巒
- 根本は何れにありや　久留島武彦
- 吾輩の氣焔　代議士　松田源治
- 吾々書生時代　市島謙吉
- 先輩を敵とせよ　押川春浪
- 露國現代の雄辯家　宮川船夫
- 當世名士の演說振り　法學士　失名氏
- 言論禁壓時代の實歴史　伊藤痴遊
- 盆栽たらずして大木たれ　代議士　竹越三叉
- 青年と辯舌　安部磯雄
- 都鄙の青年　留岡幸助
- 怪傑星亭　河岡潮風

縱論橫議　名士の逸話

發行所　東京銀座壹丁目　大日本圖書株式會社（振替東京一二九番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

小島烏水新著

日本アルプス

論文

自然描寫の藝術
第一、題目としての山岳、第二、文學に於ける山岳、第三、繪畫に於ける山岳圖入

自然と作家

ラスキンの山岳論 付ラスキン研究書目
溪流に立てるラスキン先生、ミレース原畫

溪谷の水 圖版入

日本南アルプス概論
白峯山脈の記寫眞版木版十數個入

創作

燕（小室妙法寺）—松桔梗●蹄●青芒（七面山より西山峠）—鶯（峠の茶屋と森林）—洛泉記（湯島溫泉）—峽谷の白百合（早川を溯る記）—山毛欅●白樺（榛の河原）—寒苦鳥（白剝山を踰ゆる記）—大井川の谷（最も感興を惹きし山水）—川陽（大井川の水源東股谷）—白花石楠花と高根薔薇（白峰山の一角）—鼠色の印象（暴風雨前の富士山及白峰山脈）—石●苔●偃松（白河内岳）—汽船●電燈（農鳥山）—山の肌（間の岳の雪田）—羚羊●長之助草（北岳の絶巓に登る記）—信濃金梅●木賊（大樺谷に下る記）

附錄……………索引

裝釘及び挿繪

表紙 木版三度刷 織田一磨裝畫
見返 石版二度刷 鈴木錠吉圖案
扉紙 石版三度刷 丸山晩霞作
三色版挿繪 大下藤次郎作

木版挿畫 小杉未醒
寫眞版挿畫 茨木猪之吉
三度刷地圖 高頭式作
コロタイプ版寫眞版 數十業
高頭式 高野鷹藏

菊判四百頁
天金付函入
美術的裝釘
定價金貳圓
郵稅拾八錢

日本アルプスは高山深谷白雪森林等の大自然に富み最も複雜なる構造と高調の色彩を有すれ共古來人跡殆ど全く到らず從來の地理文學繪畫より削除せられたる境域也

本篇は著者が數年來この地を旅行して齎らし來りたる紀行文及び研究錄にして論文及び創作の二篇に別ち日本アルプスの空氣を描き岩石を描き溪流を描き雲霧を描けり十萬分一地圖及數十葉の寫眞木版スケッチ等は著者と同行したる日本山岳會の諸氏が特に本書のために製作し今回始めて世に公にせられたるものなり

東京京橋中橋廣小路六 文榮閣 振替東京四一〇九 ‖ 東京日本橋[illegible]町 服部書店

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

夢二畫集



春の卷（六版）定價五十錢 送料八錢

夏の卷（五版）定價五十錢 送料八錢

花の卷（三版）定價四十錢 郵税四錢

旅の卷 秋の卷 冬の卷 近刊

『夢二式の女』を知らざる青年ありや？『夢二式の眼』を見ざりし小女ありや？よしさらば、諸君は夢二畫集を繙け。そこゝ君は、南洋の花の如く、芳烈なる少女と、小鳥の歌の如く可憐なる詩を見出さむ。あゝ、小女と詩歌！

彼等は青年の爲に撰ばれたり。客衣のポケットに或は紅絹裏の袖に忍ばせて、海へ、山へ、或は故郷へ、共に携へて樂しき夏の日を聲高く讃美せばや。いざさらば、うら若き人々!!

發行所 東京麴町二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 洛陽堂 賣捌 全國各書林

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

學界の二大名著

伯爵土方久元題字
文學博士田中義成先生序
清水橘村先生著

家庭訓話 今日の歴史 月の巻

空前の大歡迎

洋裝菊判上製
紙數五百頁頗る美本全壹册函入
正價金壹圓五拾錢
送料金拾貳錢

◎偉人研究は最近の思想界に於て最も盛んなる風潮なり「今月の歴史」は此好研究書也。

◎◎偉人の研究に本書を有せざるは日常の生活に食物無く衣服なきに等し。

◎◎偉人は偉人を研究して偉人となれり、少くも其人格を高めんとする者は『今日の歴史』を見ざる可らず。

花の巻（第三版發賣）

菊判形全一册頗る美裝函入
正價金壹圓五拾錢送料金十二錢

文學博士 原秀四郎先生著

新編國民地圖

洋裝菊判上製
全壹册
正價金壹圓
送料金十錢

發行所 東京市神田區猿樂町貳番 振替口座壹貳壹壹壹番 弘道館

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

精神修養必備の一大名著出でたり

公爵 山縣有朋閣下
侯爵 松方正義閣下
侯爵 桂太郎閣下
男爵 加藤弘之閣下
題字（製本成る）

實業之日本記者
藤原楚水先生編纂

先哲遺訓 座右銘全集

▲中版上製金文字入
▲紙數五百六十四頁
▲正價 金壹圓
▲郵税金八錢
▲臺樺清韓拾貳錢

◎見よ!! 萬人必備の名著!!!

▲本書は編者多年の苦心を以て本邦先哲の遺書を渉獵し其修養に資すべきもの數百篇を蒐集編次せるもの。
▲彼等先哲が自ら修養せんが爲め座右の銘として服膺せる金言自警等大多數を占め其他家訓遺訓壁書規箴等網羅
▲而して其人物の多數と訓誨の最も多くを網羅せるは本書の一大特色にして各人皆小傳を附し以て彼等が座右銘を制定せる理由を明かにす。

◎本書の在る處 人に光榮あり 家庭に清福あらん

電話新橋八七四 〒 振替口座三二六
東京京橋南紺屋町
實業之日本社

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

BUMMEI-DO & CO.

ENGLISH, JAPANESE BOOKS & STATIONERY.

1750 Sutter Street, S. F., Calif., U. S. A.

最近發行の哲學神學文學農學小說と雜書類

Howe, F. C. ....Privileges and Democarcy.....by mail, $1.65.
London, J...............Lost Face.................................. $1.65.
London, J...............Revolution .... $1.65.
Fairbain, A. M.........Studies in Religion and Theology...... $1.65.
Bostwick, A. E..........The American Public Library........... $1.68.
Badwen, H. H. ....The Principles of Pragmatism........... $1.64.
Enock, C. R.............The Great Pacific Coast.................. $1.50.
Tucker, W. J............Personal Power .... $1.65.
Mortimer, A. G.........The Welfare of the Soal.................. $1.30.
Brett, J...................The Garden of God........................ $1.30.
Thompson, R. J. ......Proofs of Life after Death............... $1.62.
Flammarion, C.........Mysterious Psychic Forces.............. $2.70.
McConnell, R. M.......The Duty of Altruism..... .... $1.65.
Seminoff, W.............The Price of Blood......................... $1.65.
Brown, E. E.............Government by Influence................. $1.50.
Savage, H. E............The Gospel of Kingdom.................. $3.85.
Mathews, S..............The Gospel and Mordern Man.......... $1.65.
Spears, J. R...... .....The American Merchant Marine........ $1.61.
Lyon, C. S...............How to Keep Bees for Profit............ $1.61.
Valentine, C. S.........How to Keep Hens for Profit............ $1.61.
Bailey, L. H.............Manual of Gardening...................... $2.14.
Munsterberg, H........American Problems .... $1.72.
Mrs. Ward, H...........Lady Merton, Colouist.................... $1.65.

米　國　桑　港

書　肆　文　明　堂

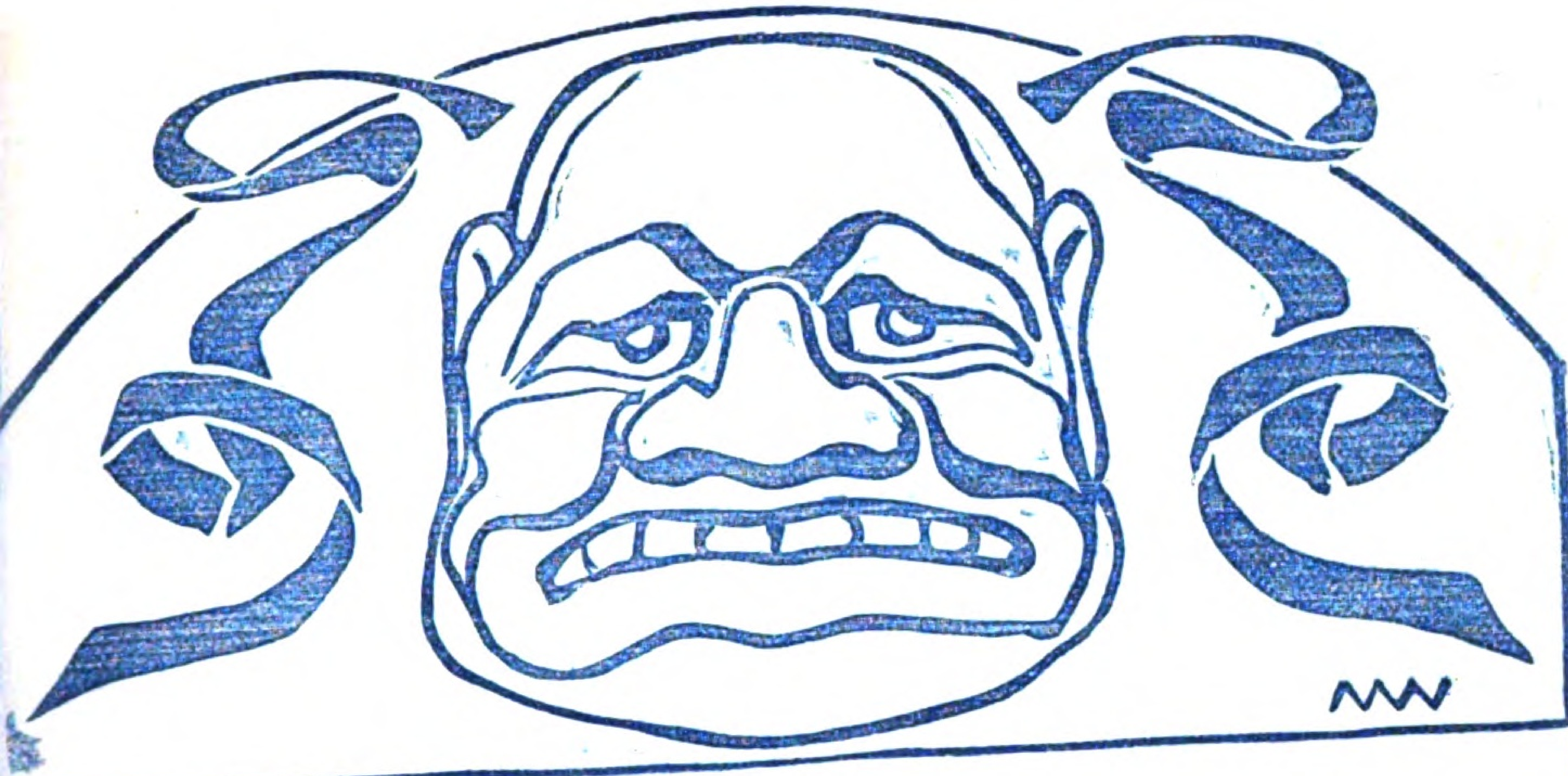
日本取次店新設

郁　文　堂

東京本鄉區森川町帝國大學門前

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す



中央公論第廿五年第七號目次

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊 ポケット講談 豫告

松林伯知講演
お妻八郎兵衛

細川風谷講演
由井正雪

伊藤痴遊講演
安政疑獄 月照薩摩落

各冊讀切 定價金卅五錢 郵稅四錢

◎松林伯知講演▲長原止水先生裝幀
徳川榮華物語

定價六圓五十錢 郵稅三十錢
特價四圓五十錢

頒美本

前篇（松の巻 竹の巻 梅の巻）
後篇（櫻の巻 藤の巻 菊の巻）
續篇（椿の巻 萩の巻 楓の巻 桐の巻）
合本全三冊

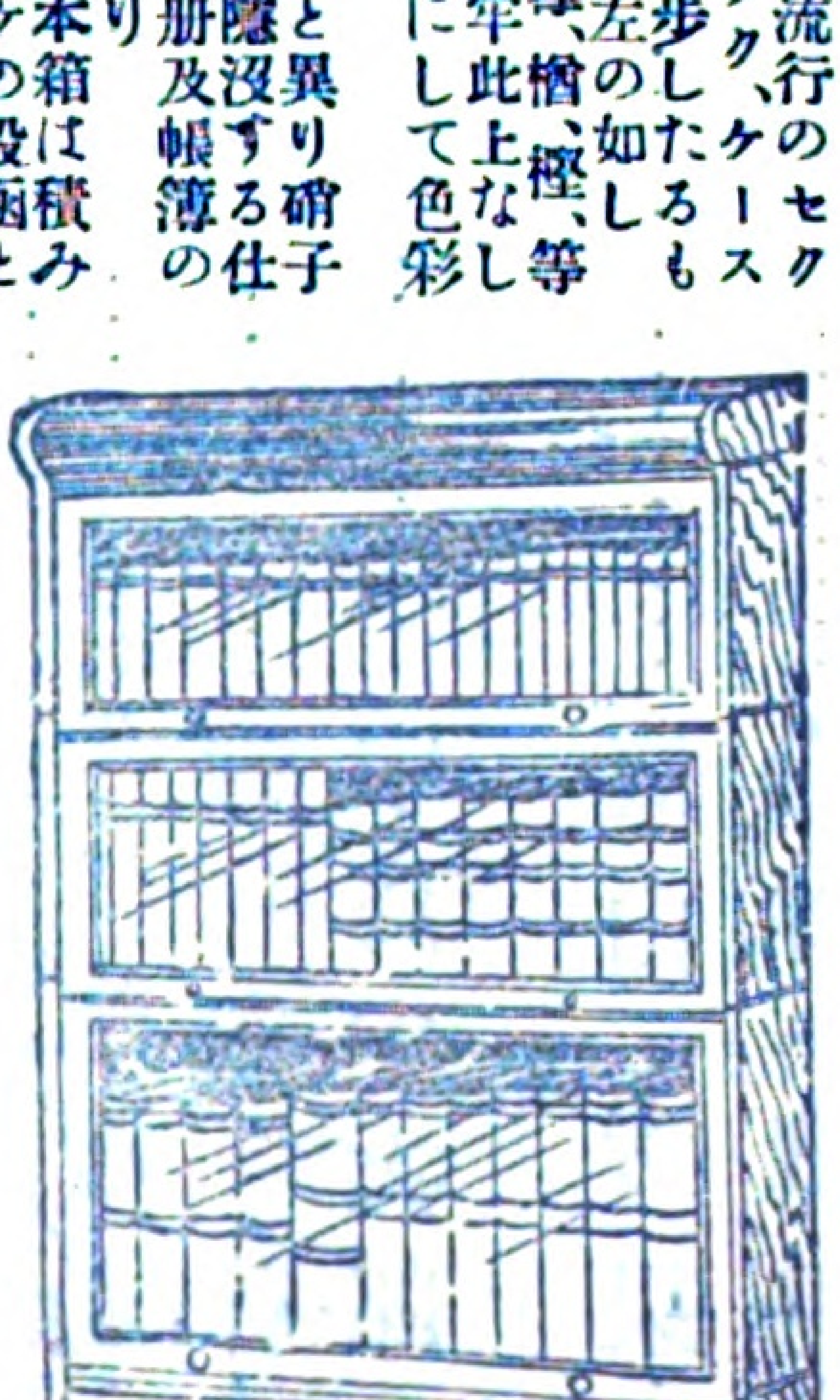
狩野謙吾先生著
四版
神經衰弱自療法

定價金六十錢 郵稅六錢

本書は神經衰弱の專門醫として有名なる狩野病院長が斯病救濟の目的を以て各種神經衰弱の治療法を最も通俗的に詳細記述せられたるものにして中にも生殖器神經衰弱症の自療法は餘蘊なく之を說明せるを以て斯病に難める諸君は必ず一本を座右に供へて禍を未前に防ぐの智を學べよ

組合セ本箱
（最新式特製）

歐米諸國に大流行のセクショナル、ブック、ケースよりも數等進歩したるものにして特徴左の如し
◎材料は松、欅、檜、樫、等を精選し堅牢此上なし
◎形狀は優美にして色彩美麗
◎在來の本箱と異り硝子戸は上部へ隱沒する仕掛なれば書册及帳簿の出入に便なり
◎一組の組合本箱は積み重れたる三ケの段函とトップ(屋根)ベース(脚底)の組合せより成る
◎藏書の增加に從ひ段函の數を增加しこれを上部に積み重れ四段五段の本箱と爲すことを得
一組（總高さ三尺九寸五分、奧行九寸四分、間口三尺、櫻製金參拾圓、欅製金貳拾八圓、檜樫製金貳拾六圓、(荷造費各金壹圓、地方運賃御自辨)）

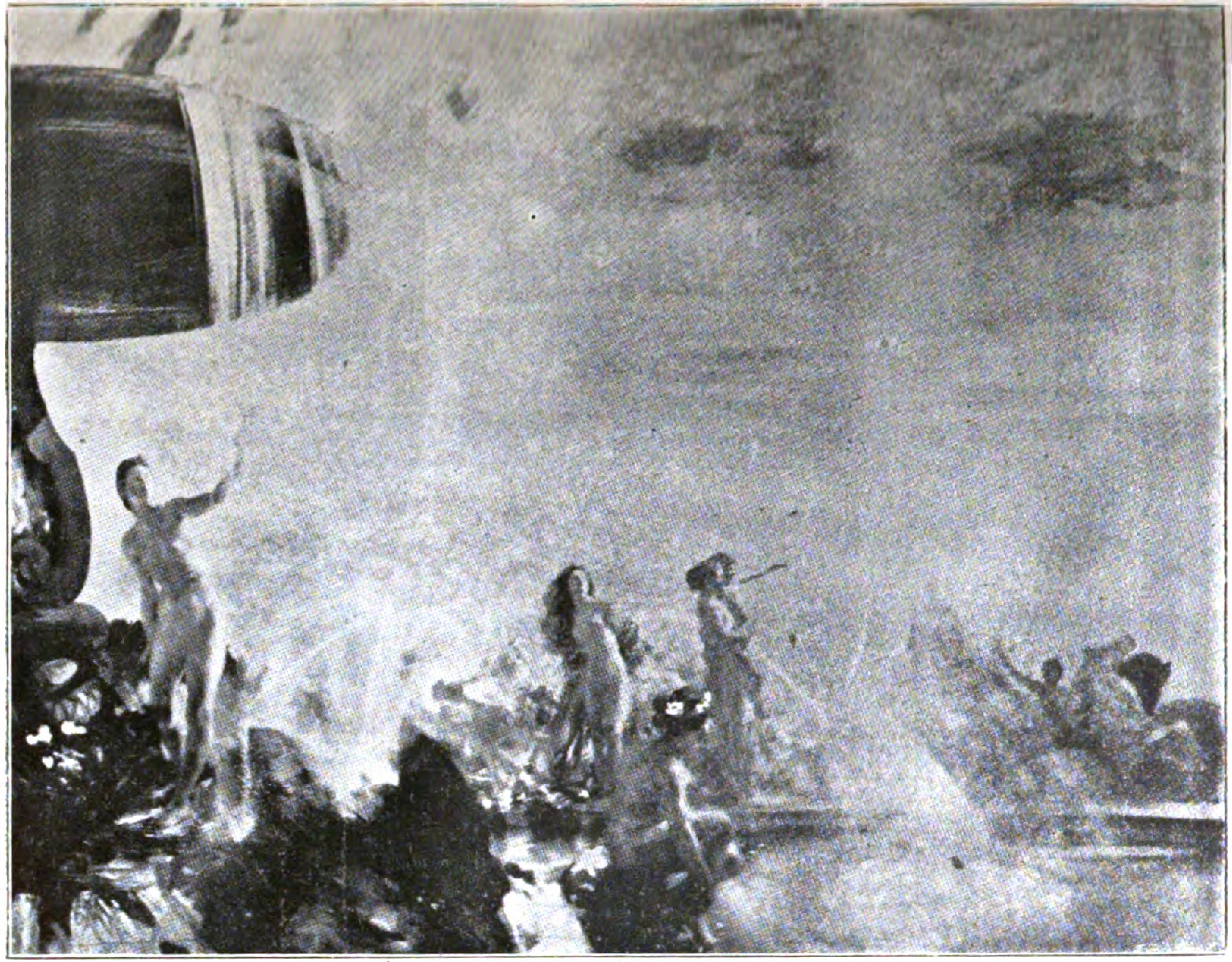


發賣元 東京銀座大通り新橋際
（電話新橋三六七七 振替貯金口座二〇〇）
新橋堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

The Fountain



By Charles Sims, A. R. A.

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

中央公論



第二十五年 第七號
第二百五十六號

東京音樂學校
東 98331

大臣の兼任是乎非乎

（一）

大臣にして近時他の職を兼ぬるもの少からず、大藏大臣を兼ぬる桂總理大臣は尚ほ拓殖局總裁を兼ね、而して陸軍大臣たる寺内子は韓國統監の重職を兼ね、又鐵道院總裁を兼ぬる後藤遞信大臣は、更に拓殖局副總裁を兼ね、大臣にして兼職の多き恐らくは今日の如きは稀なるべく、其の肩書の長々しき、法性寺入道も應さに三舍を避く

之を難ずるものは、兼職多くして其の事に專なる能はざるを虞れ、殊に陸軍大臣の東京に居て而して韓國に統監たるを無責任とし、鐵道院總裁を兼て其の重きに苦むも餘裕あらざるべき遞信大臣が、更に

韓國臺灣樺太等の拓殖務を管掌すべき副總裁たるを攻撃す、また一理ある説なるに似たり

(二)

國務大臣は一省の行政長官たると共に、又閣臣として天皇輔弼の重任を有し、國家の機務を決定すべき内閣の班に列す、國家の機務を決定すべき閣議に列するとは、一省の行政長官たるよりも遙かに重要なる任務にして、國務大臣は今や寧ろ主として重きを茲に措かるゝが如し、語を換へていへば、國務大臣は主として閣議に參列するを重しと爲し、一省の行政長官たるとは寧ろ之を第二位に置くの傾向なきに非ず、而して閣議の決定が漸く重要となり、國家中外の樞機多くは國務大臣の合議なる閣議に由て決定せらるゝと、近時著明なる趨勢なるに於て、此の傾向は强がち非難するにも及ばずとす、蓋し閣議は國家の機務を統一し、一定の方針大綱總て之より出て、一省の行政長官の如き、畢竟此の方針大綱の項目を奉行するに過ぎず、隨つて之を次官以下局長等の官僚に一任するも、必らずしも多くの不都合を看ざる也

一省の行政長官として、省務に特能あるものを擧ぐるは素より適材を適處に配する所以なるに於て、何人も其の當然なるを認むべし、桂侯の大藏省に長官たる(假令兼任といふと雖も)又小村伯の外務大臣たる、寺内子の陸軍に、齋藤男の海軍に大臣たる、共に適處を得たりとすべし、而して其の省關係事務の成案を爲すに於て、事務の要に通せる大臣を可とするや勿論ならん、然れども此の侯伯子男等は一省の長官たると共に、又國務大臣として天皇輔弼の重任を帶び、國家の樞機を決定する内閣の班に列する

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とを忘る可らず、假令遞信事業、產業又は教育に通ぜざるも、國務大臣として國家中外の機務に參決すべき資格ある以上、國務大臣たるに妨げあらず、大臣は素より單に一省の行政長官たるに止まらざれば也、否、閣議に列すると却つて極めて重要なれば也、武辨の山縣、西郷の諸元老が曾て軍務以外の省に大臣として、而して多く妨げ無かりしは此の例證ならずや

此の點よりいはゞ、大臣にして他の職を兼ぬる、未だ必らずしも一併に批難すべからず、要は其の大臣が國務大臣として重任を盡すと共に、其の兼ぬる所の管掌の大體を綜覽するに足るや否やに在るのみ

（三）

交通不便なりし時代に在て、駐外使臣は折衝の事多く其の方寸に出づるを以て、機才、決斷を要したりき、今や必らずしも然らず、大事は多く本國政府の訓電に出るを以て、使臣は唯だ敏捷なる探偵となり、傳令使となり、巧妙なる交際家たれば足る、而して本國政府の訓電なるもの素より外務大臣より出づると雖も、單に外務大臣の方寸のみより出づるにはあらずして、多くは閣議の決定より出づ

之と齊しく各省の命令施行と雖も、少しく重要なるものは總て閣議の決定に出づ、即ち總理大臣を主とする閣臣の合議に決する也

去れば閣臣としての國務大臣の任や重且つ大なりと雖も、一省の行政長官たる任は左程に重視す可らず、平たくいへば、次官以下の官僚之に當るも必らずしも多くの不都合不便を看ざるべき也

此の故に、十省あるも必らずしも十大臣を要とせず、或は七八大臣にても足らん、甚だしきは四五の

大臣にても足らん、或は十以上十四五乃至十六七の大臣を置くも亦便ならん、行政廳の數と國務大臣（內閣に列する）の數と一致せざる英國は即ち其の一例ならずや

此の理よりいはゞ、國務大臣にして他の職を兼ぬるも可也、兼ねざるも可也、兼ると兼ねざるとは、未だ甚だ重きを措くに足らざるのみ

（四）

少しく事實よりいへば、伊藤公の內閣は最も能く公を中心として、樞機大抵は公の方寸より出て、多くの大臣は幾んど唯だ成を仰げるのみなりしといへり、然れども豫算案の議に於て閣僚の意見纏まらざるや、公は再度まで其の內閣を投げ出したりき、殊に公に在ては幾んど小兒視すべく想像されし渡邊子の頑張れるが爲めにも、公は其の內閣を投げ出さゞるを得ざりき、以て閣臣の位地の重要なるを察すべき乎

今の桂內閣に在ては、桂侯素より中心の大黑柱たるべし、各省の要求を擊退するは、其の要求の基礎たる、寧ろ要求する事業の根本生命たる財政の局に當るもの丶任なりと言はる、即ち威望ある大藏大臣は、能く以て各省の要求を鹽梅し、各大臣をして放恣に流れしめず、巧みに制御し調節す、即ち桂侯は此の點に於て無比の好大藏大臣と稱せらる、然れども多くの樞機總て閣議に於て決定せられ、各省要求の事業亦必らず閣議に決を俟つとせば、大藏大臣の威望あると否とは、未だ必らずしも重きを措くに足らざるのみ、吾人思ふに桂侯は外交の事主として小村伯と計り、兼て寺內子の說を參考すべく、軍事は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

專ら寺内子に聽き、而して政黨の事は主として平田男大浦男に聽くなるべし、寺内子が最も多く桂侯の議に與かるがため、事實副首相と稱せらるゝ、實に之に據るに非ざらんや、若し無遠慮に桂侯の胸臆を索棄扱かば、侯や少くも某々大臣を閣班より除くを便とすべし、即ち伴食大臣なるものが、事實に於て閣臣たるに不適當なる一證也、此等には何の職務をも兼ねしむ可らざるのみ

（五）

比較的に最も多く非難せらるゝは、寺内陸軍大臣が韓國統監を兼ぬる事也、伊藤公にして專任統監として韓京に在りしすら、兎角の評判ありしに、未だ公に及ばざる、公よりいへば遙かに若輩なる寺内子風情が、東京に居て、然かも陸軍といふ煩雜なる軍勢を視るの片手間に、統監の如き重任を兼ぬると、實に以ての外なるべし、然れども韓國の事多く閣議によりて決定せられ、就中小村、寺内兩相の謀議と時としては後藤遞相等の助言に聽くとある桂首相の方寸より出る以上、即ち伊藤公時代と著るしく異なりて、專ら近世的傾向を帶び來れる今日に在ては、寺内子の兼任何ぞ多く咎むるに足んや、事實多くの不便不都合を見ざらんとは、吾人の敢て斷言せんと欲する所也、大臣の兼任必らずしも非ならず、苟くも憲法の正條に對して著るしき杆格なき以上、之を大目に視て可なるべし、時代の新傾向正しく然れば也、識者深く之を看取するを要す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我が殖民政策の成績

（一）

我が帝國の臺灣統治の成績は、頗ぶる注目すべき功勳にして、世界の擧げて嘆賞する所たり

世界は曾て帝國の立憲政治の成否を疑ひ、憲法の或は東洋人種に不適當なるかを問題と做し、明治二十二年以來頗ぶる帝國の政局に注目する所ありき、幸ひにして我が憲法政治は着々發達し、其の成果の優良なる、殆んど歐米先進國をして瞠目せしむるに足るものあり、即ち此の試驗には、我れ優等を以て及第したると何人も之を爭はず

日清戰役の後、我が帝國の臺灣を領有するや、世界は更に帝國が其の殖民政治に成功するや否やを疑問としたりき、彼等の多くは以爲らく、日本人の特色太だ佛國人に肖たり、個人として溫良なるも群集としては激越に過ぎ、動もすれば奇變を好むの癖あり、潔癖にして理に趨り、爭鬪に勇にして身を顧みざる、愛國心の熱烈なると共に墳墓の地に執着するの强き、兩者酷だ相似たり、去れば佛國が殖民地の統治に曾て成功したりしこと無きが如く、日本の臺灣に於けるも亦然るべしと、有體にいへば、吾人も亦我が政事家が事功を急ぎて、實よりも華を尙び、且つ總て畫一主義を好むより推想して、臺灣統治の或は失敗に歸せんことを掛念したる一人なりき

幸ひにして此の掛念が竟に杞憂に止まりて、我か帝國の殖民政治の伎能の優秀なることを證據立て、第

二の試驗にも亦合格して、歐米人の嘖賞を博するに至りしは、吾人が皇天に感謝するを禁ぜざる所とす

(二)

臺灣に在留する支那族(歸化人及び未歸化人を含む)は、往々にして法令雨下の煩を愁訴すると莫きにしも非ずと雖も、大體に於て我が新政を歡迎し、皇德を謳歌すると蔽ふべからず、然る所以の眼目は他なし、彼等の舊慣古習を尊重し、强ひて日本化せしめざれば也、彼等の生命財產の安固を保障するがためには、素より新主義の律法を施行したりき、彼等を敎育し陶冶するがためには、素より公學校なるものを設けて日本語を習得せしむるに努めたりき、然れども彼等をして好む所に隨て廣東語も福建語も用ゐしめ、最も彼等に旦夕密邇すると多き警察と雖も、尙ほ彼等の語言を以て相通せしむるのみならず、彼等の辮髮を始め、衣服飮食家居總て從來の俗を用しめて侵さず、且つ彼等の古來慣れ來りし保甲制度を繼續して以て自治自安の道を保たしめ、唯だ力めて彼等の活動を便にし、彼等をして富裕に、安全に、愉快ならしむべく之を啓發誘導するに努めたりき、凡そ殖民政治の要は、漢來れば漢を現じ、胡來れば胡を現ずるも、然かも綱紐を捉へて離さず、彼等をして不知不識の間に治化に浴せしむるに在り、法政敎育を始め、衣服飮食習俗の末に至るまで、總て本國と同化せしめんとするが如きは、即ち畫一主義にして、汎く異人種を包含して以て新領土を統治する所以に非ず、抑も又王道の蕩々たるものに非ざる也、英國の常に殖民政治に成功して、而して佛國の之に失敗する實に之に由らずや

我が帝國幸ひにして佛國に則らずして英國と同一手法に出づ、當局其の人を得たるに由ると雖も、抑

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もまた一般國民、殊に議會が能く殖民政策の根本要義に通じたる結果ならざらんや

（三）

臺灣統治の優秀なる成績を得たる第一の原因は、素より民衆穰々として而して土地肥沃、山に金鑛あり、良材あり、其の樟腦は以て世界の市場を動かすに足るのみならず、米作は年々二回以上に及び、甘蔗また漸く開發せられて、地の利殆んど無限なる、到底韓國滿州等の貧寒なると同一に語る可らざるに在るや言を俟たず、然れども此の天與の利源を開發するがために、之を整理し保護し誘導する、一に政治に俟たざる可らず、此の點に於て帝國統治の功績即ち存す

臺灣には始め土匪なる者あり、良民と雜居して久しく煩累を爲したりき、劉銘傳も實に之に苦みたりき、現に良民は其の租税を官廳に納むる外また土匪の頭目にも之を納めざるを得ず、納めざる時は土匪等凶威を逞ふして良民の稼穡を傷害し、財物を脅掠すれば也、即ち良民は官廳と土匪とに二重に租税を納めて、以て官吏の外多くの土匪をも養はざる可らざる義務を有す、良民の疾苦實にいふ可らざる也、何ぞ況んや官廳の屢々土匪を征伐し、而して征伐毎に戈亂有りて、家を燒き財を失ひ命を殞すの慘害絶えざるをや、去れば劉銘傳の如きは、土匪の頭目に大なる賄賂を贈り、以て一時の小康を保つに至りしが、此の小康の間、官廳は幸ひに平和なるを得るも、良民は依然として二重の租税を負擔するがため、其の疾苦は寸毫も減ずるとあらず

帝國が臺灣を領有せる當初は、良民尚ほ親附せず、土匪と相混じて所在叛亂を絶たざりき、去れば軍

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政を以て之に臨むの外なく、隨つて叛するものあれば隨て伐ち、殆んど寧處に遑なく、乃木將軍の總督と爲るや、山地の險要には軍隊を配し、平地の市區には警察を用ひ、其の中間には軍隊警察の協力を以て事に當らしめしも、依然土匪を服するを得ざりき、蓋し我が精鋭なる軍隊も、區々たる敵に當るに强きも、夕に現はれて朝に沒し、隱現端倪す可らざる匪賊に對しては、恰かも暖簾に腕押の姿あるを免かれず、且つ土匪搜索の任に當るもの一に通譯にして、此の通譯の徒私意を挾み、其の好まざる所のものは良民と雖も土匪として誣ゆるを以て、我が威力往々無辜の良民に加はるあり、爲めに良民の怨みを招き、良民を驅て土匪に混ぜしめ、或は土匪を庇護して相扶くるに至らしめたりき、兒玉將軍の總督たるに及び、土匪と良民との區別を探明するを急務とし、保甲制度を立てゝ良民の力を自治警察に致さしめ、病院を建て學校を設けて人民招徠の仁意を示し、清朝の學位を有せる古老を敬重して禮を行ひ、又耆宿父老を表彰して饗應し、又民政局に命じて直接に土匪の頭目と交渉して、以て通譯私威を挾むの弊を絕てり、茲に於て良民漸く我が誠意に感孚し、而して土匪等恐れて宜蘭臺北に在るもの先づ歸服し、次て雲林、嘉義、鹽水、鳳山、阿緱の土匪も相率ひて降り、全島土匪の所在と名稱と共に分明するに至れるが、彼等の不靈なる、尙ほ全く心より歸順せず、動もすれば新政を疑ひ、且つ從前の如く良民より租税を納めしめんと欲し、往々我が政府の命を奉ぜざるものあり、茲に於て土匪の大頭目林火旺、簡大獅等を逮捕し誅戮して北部を澄淸し、次て嘉義以南の土匪大搜索を行ひ、林少猫の一類を殲すに及びて、土匪全滅せられ、良民始めて枕を高くして平和を樂み、洋々として我が德澤を謳歌するに至れり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蓋し土匪の殲滅に由りて、良民は租税を二重に納むるの要なく、稼穡を傷害せられ、財物を掠奪し燒失せらるゝの虞なきのみならず、帝國政府の官吏等鋭意して産業開發の策を研究したるを以て也

（四）

臺灣の良民は、土匪の殲滅を見て實に驚嘆を禁ぜざりき、彼等は土匪を以て臺灣に絶つ可らざる禍根と做し、全島を焦土とするの外、之を滅するの道なしと信じ居たれば也、然るに我が總督府未だ五年ならざるに之を根絶す、彼等の驚異素より怪むに足らざるのみ、彼等は此の驚異と共に、我が當局の神威と警察力の強大なるとに信頼し、始めて心を傾むけて親服するに至れる也

臺灣の産業開發には、大抵最も進歩したる科學を應用したりしが如し、試みに其の植物試驗場を視るに然り、其の地方に適する、若くば適すべしと信ぜらるゝ植物果樹を學術的に栽培して以て繁殖を奬勵せんとし、甘蔗を殖ゑしむるにも亦舊來の方法を一擲して、汎く瓜哇、布哇、獨逸其の他の甘蔗又は甜菜の栽培及び精製法を調査して之を參考としたる、紅茶の製法に從來の手法を廢して機械製を用ゆる等、其の方法の新規なる、遙かに我が母國に優さるものあり、甘蔗の如き其の苗種最良ならず、耕耘の法また集約的ならずして聊か放慢に失せるが如きも、地勢に於て始めは然かせざるを得ざるものあるのみ、多く有爲の新人材を用ひ、科學を應用せる新法を施すの一事に至ては、母國をして慚色あらしむ

整理の新方法としては、土地及び戸口調査を推さゞる可らず、土地調査は明治三十一年土匪尚ほ横行せる時より着手して鋭意事業を進め、三十七年の末に至て全く竣る、此がため大租權を消滅せしめ、其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の權利者に與ふるに約八百萬圓の公債を以てして以て土地の所有權を明確ならしむるとをも得、生民を登すると少からず、翌三十八年には又戸口調査を完成して、治化の及ぶ所に於て、住居數四十八萬七千三百五十三、所帶數五十八萬五千百九十五、現在人口三百三萬九千七百五十一人なるとを明らかにし得、此の結果統治に至大の便宜を見るに至れり

鐵道は臺灣領有の當初、劉銘傳の布設したりし基隆新竹間六十二哩餘に過ぎざりしが、明治三十二年二千八百八十萬圓の經費を以て向ふ十ヶ年間に全島を縱貫すべき鐵道布設の計畫を立て、四十一年四月廿日豫期以上の成績を以て竣功せしめたり、即ち基隆より臺北に至り、臺北を基點として臺中を串き、臺南を經て打狗に至るを本線とし、別に臺北より淡水に至る支線あり、總計二百七十一哩餘とす、其の乘客貨物の收入一ヶ年二百八十萬圓を超ゆ

鐵道に次ぐ工事を基隆と打狗との築港とす、前者は三十六年七月第一期工事を竣り、次て第二期計畫を立つ、第一期の經費は二百萬圓に過ぎざるも、第二期豫算は五百四十七萬餘圓とす、後者の豫算は四百七十三萬餘圓にして、兩港ともに僅々六千噸乃至二三千噸内外の船舶を容るゝに適するのみ、未だ大計畫と稱するに足らざるも、前者を製茶米穀の輸出港並びに母國よりの輸入港とし、後者を砂糖の輸出港とする計畫にして、自から徑路脈絡あり、我が本土の九州と相匹敵する一島に在ては、蓋し相當の施設として稱せざる可らざる也

臺灣に於て理想的に作り上げられたるは其の首都臺北市ならん、其の市區改正に由て街路を擴張し井

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然たらしめたる、下水道々作り、且つ上水を供給し、衛生設備を完全ならしめて、本島特有のマラリヤ疫を幾んど全滅したるが如き、或は母國の大都たる東京、大阪等の諸市をして瞠若たらしむるものあり、足一び之に到るもの、應さに帝國殖民策の完全なる成功縮圖を看取するに難からざるべし

産業の發達を視んには、米、甘蔗、茶の累年産出額を示せる左の一表に由るを可とす

	米(石)	茶(生葉、斤)	甘蔗(斤)
明治卅二年	四、一〇五、九三九	—	三四二、三四三、九四〇
同卅三年	四、三〇〇、〇五四	一七三、八五四、五三九	二七〇、八七五、〇九五
同卅四年	六、一三一、六七七	三〇、一六九、三三六	—
同卅五年	五、六四二、八四六	四七、一一一、四三五	一、二六七、〇二五、二九六
同卅六年	七、三五四、四一四	四四、八九六、一一四	六八三、一五七、九〇二
同卅七年	八、三一九、七二四	五〇、九六七、六五四	一、〇七四、九七四、九二九
同卅八年	八、七〇七、六九〇	五一、四八〇、三九二	一、一五五、九四四、四三八
同卅九年	七、九三七、一五五	四七、一〇六、五〇九	一、六九〇、二〇六、七九四
同四十年	九、〇二四、二八四	四五、七〇三、七二〇	一、三八三、六四八、〇八一
同四十一年	九、三一三、二五四	七七、四五七、〇四二	一、四一九、八六〇、七九九

之を金額とすれば、米は年々大約四千百萬圓、製茶は輸出するもの丶みにても一千六百萬斤、此の價六百萬圓に上り、甘蔗は母國の輸出高のみにても九千五百萬斤、此の價は百萬圓を超ゆ、今や産額激増して母國に供給する丈けにては、幾んど生産過剰に傾むかんとす

更らに左の輸出入表を看よ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

輸出入品價額(圓)

年次	輸出	輸入	計
明治二十九年	一一、三九五、六八〇	八、六三一、〇〇二	二〇、〇二六、六八二
同三十年	一二、七五二、二〇〇	一二、六五九、二九八	二五、四一一、四九八
同三十一年	一二、八一九、七六〇	一六、八七五、四〇五	二九、六九五、一六五
同三十二年	一一、〇七二、六二三	一四、二七三、〇九二	二五、三六五、七一五
同三十三年	一〇、五三二、一六五	一三、五七〇、六六四	二四、一〇二、八二九
同三十四年	八、二三四、〇九七	一二、八〇九、七九五	二一、〇四三、八九二
同三十五年	一三、七二四、二七一	一〇、一〇〇、五三二	二三、八二四、八〇三
同三十六年	一〇、九八六、九六六	一一、〇〇九、四六四	二一、九九六、四三〇
同三十七年	一二、二八七、三六六	一二、五九〇、〇一〇	二四、八七七、三七六
同三十八年	一〇、六二九、五〇七	一〇、九六三、八七七	二一、五九三、四八四
同三十九年	九、七七九、〇八四	一二、七三七、四六〇	二二、五一六、五四四
同四十年	九、七四一、四二九	一一、二二〇、六八五	二〇、九六二、一一四
同四十一年	九、二九七、八九八	一七、〇七四、七六六	二九、三七二、六六四

母國の面積、人口の割合よりいへば、實に大に富めりといはざる可らず、尙ほ財政上より視ん乎、其の諸收入實に左表の如し

臺灣總督府歲入(圓)

年度	經常部	臨時部	計	指數	百分比例 經常部	百分比例 臨時部
明治二十九年度	二、六一二、二〇二	四、四五八	二、六一六、六六〇	一〇〇	九九・八	〇・二
同三十年度	五、三一五、九〇五	五、九六七、三八六	一一、二八三、二九二	四三一	四七・一	五二・九
同三十一年度	七、四九三、六五五	四、一二五、三八四	一一、六一〇、〇三八	四四四	六四・五	三五・五

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同三十二年度	一〇、一五八、六五二	七、二六七、九六六	一七、四二六、六一八	六六六	五八・三	四一・七
同三十三年度	一三、〇六二、五二一	九、二〇七、一七四	二二、二六九、六九五	八五一	五八・七	四一・三
同三十四年度	一一、七一四、九四八	八、〇五一、六八六	一九、七六三、三四四	七五五	五九、三	四〇・七
同三十五年度	一一、八七六、八五四	七、六二〇、七二五	一九、四九七、五七九	七四五	六〇・九	三九・二
同三十六年度	一二、三九六、〇〇七	七、〇四一、五二六	二〇、〇三七、五三三	七六六	六一・九	三八・一
同三十七年度	一六、一七〇、三三五	六、一六二、七八〇	二二、三三三、一一五	八五三	七二・四	二七・六
同三十八年度	二一、六九九、九二九	三、七一四、二一七	二五、四一四、一四六	九七一	八五・四	一四・六
同三十九年度	二五、六五六、六七二	五、〇三五、五〇一	三〇、六九二、一七三	一、一七三	八三・六	一六・四
同四十年度	二八、八九〇、一一七	六、四四五、六五五	三五、二九五、七七三	一、三四九	八一・七	一八・三
同四十一年度	二六、八三二、四三八	一〇、七三三、三二六	三七、〇〇五、七六四	一、四一四	七二・五	二七・五
同四十二年度	二六、一〇一、二一三	三、八五〇、二三六	二九、九五一、四四九	一、一四五	八七・一	一二・九

明治四十年度迄は決算同四十一年度は現計同四十二年度は豫算なり次表亦同じ

地方税收入(四)

年度	經常部	臨時部	計	指數	百分比 經常部	百分比 臨時部
明治三十一年度	七四七、八五一	四一〇	七四八、二六一	一〇〇	九九・九	〇・一
同三十二年度	一、五九〇、七〇〇	一、五〇、〇八一	一、七四〇、七八一	二三三	九一・四	八・六
同三十三年度	一、八二六、四五七	一、四八八、五二七	三、三一四、九八四	四四三	五五・一	四四・九
同三十四年度	二、〇七二、七四六	一、五四九、四七三	三、六二二、二一九	四八四	五七・二	四二・八
同三十五年度	二、一三九、二九一	一、九六一、三三四	四、一〇〇、六二五	五四八	五二・二	四七・八
同三十六年度	二、四二七、〇六九	二、〇〇一、二一一	四、四二八、二八一	五九二	五四・八	四五、二
同三十七年度	二、五八六、八六七	二、〇四九、八九六	四、六三六、七六一	六二〇	五五・八	四四・二
同三十八年度	二、五七四、三八九	二、九五二、五三六	五、五二六、九二五	七三九	四六・六	五三・四
同三十九年度	二、九九四、五〇四	二、四〇八、四五九	五、四〇二、九六三	七二二	五五・四	四四・六

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

同　四十年度	三、六二四、三二四	二、九三五、〇二〇	六、一五九、三四四	八七七	五五・三	四四・七
同　四十一年度	三、四四一、二一	四、三二八、四四七	七、七七〇、二六八	一、〇三八	四四・三	五五・七
同　四十二年度	三、〇〇二、四五八	二、八二四、二五七	五、八二六、七一五	七七九	五一・五	四八・五

ロ

關税收入（圓）

年次	輸出税	輸入税	噸税	諸收入	計	指數
明治二十九年	二八九、〇三三	四六九、三七四	…………	二七、八〇九	七八六、二一六	一〇〇
同　三十年	二六三、九二五	四二一、七三〇	…………	二九、七五四	七一五、四〇九	九一
同　三十一年	二八二、二二六	五一九、九八八	…………	三〇、一五四	八三二、三六八	一〇六
同　三十二年	三〇六、六八一	一、一七八、四六八	…………	二九、八四〇	一、五一四、九八九	一九三
同　三十三年	三七六、二八一	一、一二三、五三二	一四、八九一	一八、五二〇	一、五三二、二二四	一九五
同　三十四年	三四二、五〇八	一、二三五、七〇〇	一二、四七五	二六、一三九	一、六一六、八二二	二〇六
同　三十五年	四　九、四八九	一、〇三四、九〇八	一三、一八八	一五、六二三	一、五三三、二〇八	一九五
同　三十六年	三六四、二二六	一、〇五八、九一一	一一、九一七	一五、七三三	一、四五〇、七八七	一八五
同　三十七年	三二六、五六〇	一、〇九四、九五一	一六、六五九	一〇、九二七	一、四四九、〇九七	一八四
同　三十八年	三三七、四〇八	一、三三四、〇三九	一四、六一一	一五、二三一	一、七〇一、二八九	二一六
同　三十九年	三二四、六五〇	一、三五七、八三一	一七、五九三	一一、五三〇	一、七一一、六〇四	二一八
同　四十年	三〇二、一九八	一、四八五、五〇二	一七、八五三	九、九一六	一、八一五、五一七	二三一
同　四十一年	三一二、一三二	一、四六一、三〇三	一八、一九七	一三、〇一〇	二、八〇四、六四二	三五七

政府は始め年々國庫より臺灣の財政を補助し、四十二年度に至て始めて罷むる計畫なりしが、前表の如く諸税收入增加したる結果、三十八年度より全く會計を母國より獨立せしめたるのみならず、却つて反對に國庫へ幾分の收納を命ずるに至り、尙ほ關税統一の名義の下に、關税收入をも擧げて國庫に移す

の議あり、諸税收入の增加は臺灣の富度增加の一證にして、而して又統治の成績顯著なる反證と爲すに足る、事實は最大なる雄辯也、以上の諸表を視るもの誰か我が殖民政策の成功を疑ふ可んや、之を疑ふは猶ほ太陽の熱からざるを疑ふに齊しきのみ

（五）

臺灣統治の成績は、世界列國の既に折紙を附したる處、此がため兒玉總督は男爵より子爵に陞叙せられ、後藤民政長官は男爵に叙せられて、名聲世界的となりし素より其の處のみ

今や臺灣に於て爲すべきものなき乎、唯だ勳赫々たりし故總督と前民政長官の方針を紹述して守成せば足る乎

今の總督府は、阿里山製材を官營とするの外、尚ほ五年計畫二千萬圓の經費を以て理蕃策を行はんとし、且つ明治四十一年より向ふ十六ヶ年の繼續事業として、三千萬圓を投じて埤圳を開通せんとす

臺灣本土の面積約六割は、今尙ほ全く生蕃の盤據する所にして、鋤犂の入らず斧鉞の加らざる田畑山林多く、其の富源實に測る可らざるものあり、中央山脈の大部分と此の山脈以東の幾んど全部即ち是れ也、當局は乃ち其の富源を開發するがため、全然生蕃を殲滅するか、若くは之を威壓して招撫せんとし、今や大規模の隘勇線を前進せしめつゝあり、若し理蕃全く功を奏せば、多くの山林は拓かれ、世界の珍とすべき巨木良材を始め、多くの鑛物も出でゝ人生の資たるべく、東部不毛の地亦總て開墾せらるべく、臺灣の富幾んど今日に陪蓰せんとす、吾人は切に其の成功を期待す

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

埤圳とは人造の水路の事なり、即ち水利の便なき所に在ては、埤頭に溜池を作り、溪河より水路を導きて以て灌漑の便に供す、事業の宏壯なる、殆んど天然の河川に異ならず、一埤圳にして二萬甲に灌漑するものあり、此の埤圳の開通により水田及び甘蔗畑の開墾せらるゝもの多く、殊に南部の甘蔗畑は、埤圳に由て益々增加し、彌よ改良せらるべき乎、臺灣の砂糖は其の生產費不廉にして到底爪哇糖布哇糖若くば獨逸の甜菜糖と競爭するに堪えず、課稅の關係によつて母國に於てこそ辛ふじて其の販路を支持すれ、一歩帝國の領域以外に出れば、忽ち外國諸糖に壓倒せらる、故に臺灣の甘蔗畑を增加して其の產額を多くせんとせば、勢ひ外國糖と競爭するがため、其の生產費を廉にするの外あらず、而して之を爲すの外多方なし、唯だ最良の苗種を栽培すると、集約法を用いて同一面積より多くの甘蔗を獲るに在るのみ、而して集約法を用ゆるの途は、此の埤圳に俟つの外あらざるに於て、埤圳が臺灣の大事業たると共に、富源開拓に關するや亦極めて密也、吾人は又亦其の成功を祈らざらんと欲するも得ざる也、此の二個の成功は更に臺灣の統治に成功の光彩を添へ、我が帝國の殖民政策をして、彌よ名譽を發揮せしむるものなれば也

但だ韓國及び滿州に於ける我が殖民政策の成否に至ては、吾人不幸にして未だ成功の裏書きを爲すの決斷を有せず、彼の二國の貧寒なる、到底臺灣と同日に語る可らざれば也

我れ既に臺灣の統治に成功して、世界列國の承認を受く、天命の在る處以て推すべきにあらずや、吾

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人が常に斷乎として北守、進を主張する微意も亦茲に存す、嗚呼臺灣の成功豈等閑に附す可んや、吾人の其の功を揚ぐる、必らずしも其の治蹟を點檢する主意のみにあらず、筆墨の外別に主張有り



Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

公論

機械的現代觀
（附、日本の最大憂患）

河上肇

一

諸君、諸君は果して如何に現代を觀らるゝ乎。

吾輩は、今の時を以て、人類の歷史あつて以來、實に未曾有難見の時であると思ふ、今の時は、舊人衰へて新人起るの時と思ふ。舊人類が新人類てふ別種の動物に進化する其の過渡の時代だと思ふ。舊人類の發生は何十萬年前の事であるか、其の年數の概算さへ出來ぬ程遠い〳〵昔の世の事である。然るに此の舊人類が、今や既往數十萬年間に於ける進化の結果として、將に新人類てふ別種の動物と爲りつゝあるのである。今の時代は數十萬年にして始めて見ることを得べき實に未曾有難遭の時代である。全く驚くべき時代、大に動きつゝある時代、誠に驚天動地の時代である。今ま吾輩、偶々此の驚天動地の時代に生れ、京の片邊りより、諸君に向つて、其の驚天動地の時代たることを論說するを得るは、吾輩の竊に光榮とし且つ幸慶とする所である。

二

小供は動物が好きである。吾輩京都に移轉してより、兒輩を連れて動物園に行つたことも早や十數回に爲る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かと思ふ。動物園に行く毎に、何時も動物は憐れだと思ふ。百獸の王と云はるゝ獅子でさへ、遠き異郷に囚はれて、狹い檻の中で見せ物にされて居るでは無いか。彼等は何故人間如きものに征服されたであらう、抑々人間は如何なる長所あれば斯くまでに一切の生物を支配し得るに至つたであらう。

昔の學者は人間を以て萬物の靈長だと誇つた。そうかも知れぬ。併し見給へ、人間は實に生物の體長では無いか。

人間は四足獸の直立したものである。直立し得る故に、彼能く手を有す。而して此の手を有することは實に人間の人間たる所以である。熊を見る、虎を見る、獅子を見る、何れも恐ろしきに相違なけれど恐るゝに足らぬ所以はそが四足獸たるに在る。彼等は四足で歩く、人間は兩脚で歩く。彼等には手が無いが、人間には手がある。猿、猩々の類に至つては、稍々其の手を用ひ得るが、猶ほ極めて幼稚である。獨り人間に至つて、手が無類の發達をして來た。是に於いて人間は始めて道具を作り得るに至つた。此の道具の製造、これが人類文明の根本たり基礎たり前提たり要件たるものである。見給へ、百獸の王と云はるゝ獅子も道具製造の能力は無い。鶴能く直立して百禽の王たる品格を具ふるも、彼の手は翼と爲つて遂に道具製造の用を爲さぬ。牙も無く爪も無き裸體動物たる人間の爲めに、百禽百獸、羅致されて玆なる動物園に飼養されつゝあるも、思へば手の賜物である、手に依つて人間の作り出した道具の賜物である。

人間と人間以外の動物と其の差は何處に在るか。學者の見地に依つて答案自ら異るであらう。姑く之を經濟上より見る、吾輩は直に道具製造の能力の有無、只だ是れのみと答ふるに躊躇しない。

道具製造能力の發生は、動物たりし人類をして能く人類てふ動物たるを得せしめた條件である。生物進化史上、人類發生の時期は即ち道具製造能力の發生の時期である。道具製造史の第一頁は即ち人類史の第一頁である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三

是の故に、諸君、道具發達史は或る意味に於いて人類文明の發展史てある。然るに、其の道具の發展たる、既往數十萬年間實に遲々として牛歩の如くてあつたが、今を去る約百三十年前に於いて實に驚くべき發達を爲し、道具は俄然進歩して機械と爲つた。而して是れ實に、人類の歷史に於ける未曾有の大事件てある。

始めて機械が發明されたのは十八世紀末の英國てある。西曆紀元千七百六十九年は、恰も後櫻町天皇の明和六年て、此の年に吾國ては加茂眞淵、青木敦書の二學者が地下の人と爲り、西洋てはナポレオン、ウエリントンの二大英雄が始めて呱々の聲を擧げたのてある。併し是等偉人の生死は、數十萬年の人類の歷史より見る眞に大海の一波だが、玆に記憶すべき大事件と云ふは、かの有名なるワットが其の蒸汽機關の特許を得、アークライトが其の紡績機械の發明をしたと云ふ事てある。猶ほ越へて七年、吾朝後桃園天皇の安永六年即ち西曆紀元千七百七十六年には、一方にアメリカ獨立宣言書の起草あり、他方には英吉利經濟學の鼻祖とも云ふべきアダム・スミス、富國論の公刊あり、共に近世史上著名の事件たるを失はないが、それにも增して記憶すべき大事件と云ふは、此の年の前後に於いて、ハーグリーブス、クロンプトンの紡績機械、アークライトの織物機械等の發明相次いで起つたと云ふ事てある。之より以降、譬ふれば夜明けて諸處の人家戶を開くが如く、又た譬ふれば春到つて百花先を爭ふて一時に咲くが如く、諸種の偉大なる發明相次いで起り、破竹の勢今に迨んで未だ停る所を知らざる有樣てある。是に於いてか道具時代既に去つて世は機械時代と爲つた。道具變じて機械と爲ると云ふ、事極めて小なるが如きも、而かも道具の製造が甞て動物たりし人類を化して人類てふ動物たらしめしが如く、機械の發明は能く舊人類を化して新人類たらしめし原動力てある。機械の發明の爲めに、經濟社會は俄に面目を一新するに至つた。故に經濟學者は其の變化を名けて產業革命と云ふ。革命の文字誠に當れり、乍併その革命たる啻に經濟上に

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

止まらずして政治法制風俗習慣其他社會の百方面に及びたるものなる故、産業革命の文字實は當らず。這般の革命は産業革命と云ふより寧ろ社會革命と云ふべきである、否な社會革命と云ふより寧ろ人類革命と云ふべきである。假りに人爲を以て年代を定むるならば千七百六十九年とするか或は千七百七十六年とするか、兎も角十八世紀の末葉は謂ふ所人類革命の時代であつて、吾輩は此の時代以降を指して現代と云はんとするものである。固より天下の事は、一人の力に依つて成るに非ず、又た一時の勢に依つて成るに非ざれば、十八世紀末に於けるワット以下の發明も淵源する所久しきは言を待たぬ所である。現に今日使用されつゝある紡績機械は約八百個の發明の結合であり、梳毛機械は約六十の特許發明の集積だと云ふ。若し十八世紀に於ける大發明に就いて、其から其へと原因の原因に遡らば、恐らく際限の無い事であらう。吾が庭前のカンバヌラ、蕾を持つこと既に久しけれど、花を開きしは數日前のことである。十八世紀末は花の開いた時である。故に吾輩は此の時代以降を以て假りに現代と名ける。

四

現代は機械の時代である。而して機械の力は實に驚くべきものがある。米國のダコタ地方、機械の應用の最も十分に行れ居る所の農業にあつては、今日一人の勞働者が一ヶ年間に五千五百ブッセル(約千百石)の小麥を生産しつゝある割合である。而してミネソタ地方の大規模の製粉場で、等しく機械の應用の最も遺憾なく行はれ居る處では、先きの五千五百ブッセルの小麥から種子料の五百ブッセルを引いた殘りの五千ブッセルのものから、約千桶の製粉をば一ヶ年間に一人の勞働者が作り出す割合である。今ま小麥粉一桶は恰も一人一ヶ年の食料に當ると云ふことであるから、今日は前後二人の勞働者に依つて千人分の食料が作り出さるゝ次第である。

千八百八十八年に出た米國の或る報告書を見ると、其の頃の留針製造機械は一分間に百八十本の留針を製造する。從つて一日(運動時間十時間)の中には一の機

械て十萬八千本を製造する割合になるが、或る工場ては此の如き機械が七臺据へてあつて其をば三人の勞働者が運轉して居る有樣て、即ち三人の手によつて日に七十五萬六千本、一人の手によつて二十五萬二千本宛生産されて居たと云ふことてある。然るに今日ては其が更に進歩して一人一日能く千五百萬本を生産する割合てある。

前に一言したハーグリーブスの紡績機械の効果を聞くに、既に千八百十五年に於いて——爾來今日に至るまて幾多の改良が行はれて居るが——僅か數年前まては二百人の手を要した仕事を只の一人てやれることにしたと云ふ。現代に棲息する吾等は、斯かる事例に慣れたるが故敢て驚きもせざれど、而かも此の如き急激なる大進歩は有史以來曾て其の例なかりしものなる事を忘れてはならぬ。機械の應用の盛な米國の工場ては、一人の職工が日に三百對の靴を作ると云ふ。若し機械を使用せぬ場合に、一人の職工が日に一對宛の靴を作り得るとするならば、三百對作るには約一ヶ年を要する割合てある。即ち今や一人一ヶ年の勞作が一日の一事に爲つたのてある。さればボストン附近の或る工場ては、機械を使用せぬバリの製靴業者三千人分の勞作に比敵する仕事が出來ると云ふのも、敢て怪むに足らぬ事てある。新聞紙三萬六千頁を刷つて折る手數が、米國の例て云ふと、手てやれば二百十六時間かゝる。即ち日に十時間宛働けば二十何日間かゝる。然るに機械の力てやれば其が僅に一時間八分て出來る。其の他此の如きの事例、枚擧し來れば殆ど際限無しと云つても善い。

汽車汽船の發明に依つて交通狀態の面目を一新したものも皆な十九世紀に爲つてからの事てある。汽車て旅客を運送したのは、千八百三十年に開通した英國リバープール、マンチェスター間の鐵道が世界て最初のものに屬する。此の鐵道の開通する迄は兩都市間の往復は凡て馬車に依つたもので、其の當時は日々往來する馬車が二十二臺、臨時のものが七臺あつて、合計二十九臺の馬車に乘客を滿載しても六百八十八人を運送

し得るだけて、而かも時間は四時間もかゝつて居たと云ふ。それが汽車が開通すると、日に乘客平均千七十人を運び、時間は一時四十五分に減じたと云ふ。併し之は開通當時のこと、爾來の進步に至つては今ま一々述ぶる必要はあるまいと思ふ。古歌にいふ。都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白川の關。又いふ、夜を寒みおく初霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝびねぬ。交通の便利なる今日の世よりして見る、實に隔世の感あれど、それも無理からぬことにて、是等の歌は皆な舊人類の遺し置きたる舊時代の和歌なるものてある。

　現代の進步は數十萬年の間始めて起つたる未曾有の大進步てある。されば其の進步の急激なる、何人と雖も之を前知豫想することは、到底出來得なかつたのである。今を去る六十餘年前、有名なる經濟學者マカロックの商業辭書の鐵道の項を繙いて見ると、左の如く記してある。

『今日出來上つて居る鐵道の中て長距離のものてはロンドンからマンチェスター及びリバープールに至る線路が一番てある。……これは如何なる國に於いても未曾有の大工事の一て、近代に於ける富、科學及び文明の驚くべき結果てある。……』

　六十餘年前の經濟學者は、僅にロンドン、マンチェスター間の鐵道を目するに世界未曾有の大工事を以てし、之を以て近代の富及び科學の齎したる驚くべき結果なりとしたのである。忠臣藏の講談物などを見ると、江戸の凶變を播州赤穗に傳へる爲め急使を出したのが、何日目とかに着いたと樣の事が書いてあるが、今日ては電話機と云ふ物が出來て居ながらにして百里の間に話も出來る。變化の急激なる凡て此の如くてある。されば始めて英國に鐵道が出來てから十三年目の原稿に、ロンドン、マンチェナター間の鐵道を以て現代文明の驚くべき産物て、世界未曾有の大工事ぢやと書きおろしたのも、強ち不思議ては無い。

五

　扨て各種の方面に於ける機械の應用が如何に社會の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

面目を根本的に一新したか、詳しく之が說明をする爲めには少くも一大冊子を必要とするてあらう。仍つて事實の列擧は、眞に九牛の一毛に止るけれど、先づ以上を以て足れりとして置く。要するに吾輩は、今の時を以て實に人類あつて以來の驚くべき時てあると確信する者てある。嘗て道具の發明が四足獸と人とを分ちし如く、今や機械の發明は舊人と新人とを分ちつゝありと確信する者てある。ギッヂングスは嘗て産業革命を論じ it introduced a new race of men（是が爲め新人種生ぜり）と爲して居るが、これは誇張的の形容的の言葉ては無い、事實そのまゝの描寫てあると、吾輩は確信する者てある。

六

嗚呼、今の時は新人てふ新たなる人類の一種屬の發生しつゝある時代てある。新人と舊人とは將來恐らくは動物學上に於いても別種の分類に屬すべき運命を有する者てあらう。されば新時代の思想が舊時代のそれと大に面目を異にし來つたも敢て怪むを要しない。今ま試に其の數箇を述べて見ようか。

第一に今の時代は進化の思想、流轉の思想の全盛時代て、何事をも固定した不動のものと見ぬのが現代思潮の特徵てある。吾輩は上來既に數頁を費して、現代の社會そのものが如何に驚くべき進化流轉の狀態に在るかを述べた。斯かる社會に棲息する吾等の思想が進化流轉を重視するに至るは、蓋し當然必然の事と云ふべきて有らう。前既に一言せるが如く、アダム・スミスの富國論は、産業革命の幕正に開かれたる其の刹那に公刊された物てあるが、其の第一編第八章を見ると、『動物ハ各々の種屬は彼等の生活資料に比例して自然的に增殖するもので、如何なる種屬も曾て之を越へて增殖し得ぬものてある』と論じてある。マルサス自身の言に依れば、彼の人口論はゴドウヰンの說から思ひ付いたものとあるが、富國論の公刊に後るゝ二十二年にして公にした其の人口論の根本前提は、玆に揭げたる如く既にアダム・スミスの喝破して居る處てある。それは兎も角、産業革命に伴ふて當時の英國に起つた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第一の弊害は貧民の増加て、是が爲めに、スミスの富國論は富の原因を論じ生産の理法を講ずるを主眼としたに反し、之に後れて出てたるマルサスの人口論は貧困の原因を論じ分配の理を講ずるを主眼としたのである。而してマルサスの人口論に後るゝ六十一年にして公刊されたダルヰンの種の起源は、マルサス人口論の根本前提を其のまゝ生物界に適用したものである。要するに生物と食料との關係は十八世紀末産業革命の幕開きと共に先づ經濟學者の注意を惹き、十九世紀の中葉産業革命の大業約ぼ面目を具ふるに至つて始めてダルヰンの進化論と爲つて表はれたものである。即ち先の進化流轉の思想は畢竟は産業革命の所生て、軈て又た機械の製品である。

七

第二に今の時代は唯物思想――殊に經濟的唯物思想の盛な時代である。而して是れ亦た新時代に伴ふ必然の産物かとも思ふ。夫れ新時代の特徴は貨物生産激増の時代である、經濟財の生産増加が人の注意努力の中心と爲りつゝある時代である。進化的流轉的思想に伴ふて、物質的經濟的思想の起らざるを得ざる時代である。而して此の時代の精神を一管の管城に托して世に宣傳したのが、カール・マルクスの經濟的唯物史觀てある。ダルヰン種の起源の出てたる千八百五十九年に、マルクスの經濟學の批判が出た。彼れ當時既に其の書に序していふ、生産條件の總合は社會の經濟的構造を成し、而して其の經濟的構造は社會の眞實の基礎て、その上に法制上及び政治上の建築物は建てられ、又た之に伴ふて一定の社會的意識の成形を生ずるものであると。後年學徒の間に好個研究の一題目を提供せし經濟的唯物史觀は既に此の一句の中に道破してあるのである。唯物史觀のことは今ま姑く舍くとするも、現代人の思想は概して之を云はば、物質的實感的機械的宿命的客觀的て、主觀の力意志の力精神の力は動もすれば之を輕視し無視する傾向がある。否な現代人そのものゝ意思が既に薄弱になり主觀が亦た頗る貧弱と爲りつゝある。此の如きは喜ぶべきか悲むべきかは別とし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、機械てふ無生の物質が大勢力を發揮しつゝある現代に於いては、勢已むべからざる所かと思ふ。

八

第三に今の時代は科學思想——殊に自然科學の思想の全盛時代てある。併し吾輩を以て見れば、是れ亦た勢の自然てある。科學は近代に於いて驚くべき發達をしたと云ふが、その發達をしたのは自然科學てあつて、而して其の自然科學の斯かる進歩を爲し得たるは實に亦た機械の賜物てある。近頃ハレー彗星の出現に伴ふて天文學のこと稍々人の注意を惹いたが、此の天文學の進歩は何に依るかと云へば、何人も望遠鏡其の他の物質的設備が其の前提たるを拒む者はあるまい。天文學の研究物體の頗る廣大なると正に相反し、極めて微細な物體を研究の目的物とせるは細胞學てある。而して此の細胞學も亦た近時に至つて長足の進歩を爲したものてあるが、其の進歩の前提はと云へば矢張驗微鏡其他の物質的設備と答へざるを得ない。要するに自然科學の進歩は、望遠鏡と云ひ驗微鏡と云ふ類の機械の賜物て、畢竟は現代人の科學偏重の思想も亦た機械の所産と云はざるを得ぬ。

九

論じたき事猶ほ有れど、擴げ行かば暫は際限なからん。短篇寄稿の約を結び置きたることなれば、此れ以上に論じなば腰折れとさるゝ憂もあり。旁々最早筆を擱かんと思へど、猶一二言を日本の現狀に就いて費し置かんと思ふ。

吾輩は日本國民の將來を悲觀するものてある。何故かと云ふに、上來論じたるが如く、現代の文明は即ち機械の文明てあるに、吾國民は機械の發明は勿論其の應用に於いても遙に歐米人に劣る處あるが故てある。裁縫と云へば針一ッ、音樂と云へば三味線一ッ、ミシンやピアノには及びも付かぬ。其他何に限らず皆な此の調子て、西洋ては疾くに機械と爲つたものが日本ては依然として舊人類の遺物たる道具てある。日本の貧乏も亦た故ありと思ふ。試に神戸博士の調査を見るに、日本の國富を百圓として諸國の富の比例を示さば、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本	一〇〇円
伊太利	二六九
墺太利	三八四
露國	五五一
獨逸國	六八三
佛國	七四三
英國	一〇〇八
米國	一三九七

て、更に日本國民の所得分頭額を拾圓として、諸國民の所得の比例を示さば左の如しだと云ふ。

日本	一〇円
伊太利	二三
墺太利	二八
獨乙	四一
佛國	五二
英國	六〇
米國	七三

最も織物機械も紡織機械も汽車も汽船も輸入されて居る世の中だから、其他の諸種の機械も將來益々輸入さるゝことに爲らう。又た日本人自身に依つても追々色々の機械が發明されて、下駄と云ひ傘と云ひ味噌醬油と云ふが如き日本固有の品物も或は機械の力で製造されることに爲るかも知れぬ。――日本固有の品物を作る爲めの機械を作らなくてはならぬと云ふのは、戸田博士の意見だが、吾輩は至極贊成である。――併し茲に吾輩の竊に以て日本國民の一大憂患とする所は、日本國民は米を食ふ動物であると云ふ事である。米を食ふ爲めに麵包の製造法を利用することが出來ぬ、戸々で小規模な炊事を舊時代の道具で永續しなければならぬと云ふ運命に陷つて居る。――吾輩嘗て飲炊會社設立の必要を唱へたことが有るが兎ても實行は六ヶしいと云ふ諸人の說だ。――しかし炊事は姑く別としても、米そのものを作るのが永久に舊時代の道具式でやらなければならぬかと思ふと、誠に心細く思ふ。京都の片邊りに住めるものから、折々郊外を散歩して農夫の作業を目擊するが、チェイネーの英國經濟史にある十四世紀頃の英國農夫の有樣と寸分も違はぬ。極めて簡單な道具を使ふだけで、畑を打つにも稻を刈るにも凡て手と足との働きに過ぎない。前にも述べたが米國では二人の勞働者があれば千人分の食料に爲るだけのもの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を育成して其を衣料にまで仕上げるに日本人の十円位にも達する富を有し乍ら、食物は法外に安いと來るから、とても叶はぬ。澁澤男爵は米國より歸朝された時人に語つて、米國の經濟には兎ても叶はぬ感じが起る、併し米國が今日の盛大を爲すに至つた原因に幾分でも人爲が加はつて居るならば、吾等と雖も決して失望するに及ばぬ、と云はれたとか。處が、前から繰り返し云ふ如く、現代の文明は人力の所生でなくて機械の所生である、固より機械そのものは人の製造する所であるが、其の機械の應用が、少くとも日本の農業には應用できないでは無いか。否な米國式の大農法と雖も應用するにされぬことは無いが、それでは産額が減つて兎ても仕方が無い。然らば内地生産は見合はして之を海外から輸入するかと云ふに、果して世界の如何なる場處に良質にして廉價なる米穀を多量に供給する所ありや、吾輩は實に鶴首して其の報を得んと欲しつゝある者である、百三十年前、アダム、スミスの云つた如く、總ての動物は食物に比例して増殖するのであるが、今や日本人と云ふ一種特殊なる米食人種の食料は大いに減少しつゝあるでは無いか、機械を使用せずして之を内地の島國に生産せんとすれば、産額は多少宛増加するにしても其の價格は益々騰貴するであらう、たとひ騰貴せざるまでも、小麥の値段が西洋人の生活程度に比して非常に安きが如く安くなるの望はあるまい。而して高價の食料は即ち少量の食料を意味するに外ならぬ。海外に於いて廉價なる米穀を多量に生産して之を吾國に供給するものゝ出でざる限り、實に吾等の食料は將來經濟的相對的に減少の一方にある。人或は云はん、吾等何ぞ必ずしも米をのみ食ふの必要あらん、米食不經濟とあらば宜しく改めて麥食と爲すべしと。乍併、麥食論は畢竟羅馬字論である。言ふは易くして行ふは實に至大の難事である。池に住むの鯉、水若し乾かば陸に生活せば可からんと云ふとも、彼は一朝一夕にして水に住むの性を改め得ぬのである。之を要するに、米穀の供給が將來何等かの方法に依つて大に増加せらるゝか、然らずんば米食を廢して麥食とせざる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

限り、米食人種の將來は慥に悲觀せざるを得ぬと思ふ。軍事の方面にこそ軍艦も大砲も出來たが、農事の方面ては依然として弓と矢だ。いくら弓の名人でも大砲には兎ても叶はぬ。軍事的戰爭でこそ日本人も武勇を天下に轟かしたが、經濟的戰爭では恐らく大敗北かと氣遣ふ。然るに人往々にしていふ、物質的文明は西人の長たり、吾は吾が長たる精神的文明を以て之に對抗せんのみと。危い哉言。物質的文明と精神的文明と譬へば車の兩輪なり、其の一を廢せば車進む能はず。昔は白隱禪師學者をして能く隻手の聲を聞かしむ、然れども由來双手相打つて始めて聲あり矣。

人生評論の意義と人生評論家の資格

田中王堂

私は嘗て近世社會の特色よりして、文藝の一樣式たる評論（Essay）が現代の文壇に於て當然占むべき位置を明かにしたことがあつた。（昨年五月發行の新小說參照）こゝには更に一歩を進めて人生評論の意義と人生評論家の資格とを少しく論じて見たいと思ふ。

もし人間が生活するといふことは、獨り己れを改造することによつてのみ得らるゝものなら、（此の事實は私がこれまで多くの評論の出立點として、屢詳說した所であるから、茲には其證明は一切省くとして）生活の持續といふことと改造の連續といふこととは同一の事件となる。而して批判の有ち得る唯一の目的は、改造にあるとすると、生活の持續といふことと批判の連續といふことも是れ亦同一の事件となる。私は人生の特徵と批判の特徵とより、斯く理解することを正當と信

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずる。さうすると人間は獨り批判の方法によつてのみ生活し得るものであるから、人間が生活を始めて以來、批判は絶えずあつたものと云へる。事實どうしても其う見なければならぬ。而して少しく事理を解するものならば私の此の斷言に異議を挾むものは恐らく一人もあるまいと思ふ。併しそれは第一義に於ける批判であつて、本論の題目としては廣義に失するの虞れがある。それで私が殊に茲に論じようと欲ふのは、やゝその範圍を狹隘にし、其の意義を制限した、云はゞ第二義に於ける批判即ち評論である。

第二義に於ける批判即ち評論は嚮の論文に於て私が述べた通り近世社會の特産である。嚴密に云へば、人間の生活であらん限り、如何なる時代に於ても、其れの改造の目的とせられない時はないのであるが、改造が緩漫であるが爲めに、比較的に其れが無意識に行はれると、又改造が急激であるが爲めに、比較的に其れが有意識に行はれる、との相違は確かに認めることが出來る。私は前者を演繹的の時代と呼び、後者を歸納的の時代と呼ぶのである。而して演繹的の社會は多く教理によつて支配せられ、歸納的の社會は多く批判に依つて支配せられる。斯くして批判は歸納的なることを其の特徴とする近世社會に於て、重要なる位置を占め來つたのである。

現代を支持し發展して居る機關は、其が政治であり、道德であり、藝術であり、はた科學であるにしても、皆一つの評論であらねばならぬ。是等のものは日に有意識の改造を必要とする社會生活を支持し、發展する機關となつて居る事實だけによつて見ても、是等の孰れもが一の評論となつて居るのは自明のことである。さうすると是等のものの一つ〳〵に就き、各一の評論として其の特殊の役目に從つて、如何に特殊の作用を充して居るかといふことを考察するのも、興味あることではあるが、殊に私が茲に研究して見ようと思ふのは、是等個々の評論を綜合して初めて出來る人生評論に關してゞある。併し是れが先決問題として、人生評論といふやうなものが果して成立ち得るや否やを吟味

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

するの必要がある。個々の評論が現に成立つて居るといふことは政治や、道德や、藝術や、科學が存在して居るので明かである。併しながら是等を綜合して、其を根柢とした人生評論なるものが果して成立ち得るや、否やはまだ未決の問題である。

是等政治、道德、藝術、科學等が人生を形作り、而して是等の何れもが一つの評論であるとすると、もし是等の活動の間に何か共通し、協同する要素が發見せらるゝならば、其れは自から人生全體を對象とする評論、即ち人生評論の與料であることは明かであるから、是等の活動の間に有機的の關係があつても、人生評論の成立は可能であるし、又其れが其うでなくても、其處に作用的の影響があれば、其れでも人生評論の成立は可能である。而して事實兩方のものが存在すると私は信ずる。何となれば是等の活動か生活の持續といふ單一なる目的より分化したことは歷史によつて說明が出來るし、又新らしき理想は必ず先づ是等の活動の何れかに起り、其れが段々に他を感化し行くといふことも事實によつて證明できるからである。されば是等の活動が共通し、協同して居るといふことには一點の疑を容るべき餘地もないのであつて、人生評論はたゞこの共通し、協同する樣式と要件とを捕捉し、醇化した結果に過ぎないのである。

昔識見、學殖共に一世に傑出した英國の政理學者エドマンド・バークは、あらゆる人民があらゆる時代に於て生活する樣式を概括して、過去の歷史を基本として、現在の要求に適應することにあるとなし、之を便宜と名づけたのであつた。實に如何なる人民にしても其の生活の方法は、エドマンドバークの所謂便宜の外に出ることは出來ない。事實として如何なる人民でも其れが有する勢力を最も有効に利用して生活して居る時には、皆便宜に從つて生活して居るのであるが、色々の事情より必ずしも何時でも等く過不及なく、又偏頗なく中正に其うして居るとはいへないのであつて、或は部分と部分との間に扞格を作り、或は過去と現在との間に矛盾を作るのであるから、時々社會全體の志趣よ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り個々の事實の特相を批判し、其れによりて本流に適行し、或は大勢より遊離せんとする要素を啓發し利導するの必要があるのである。

究竟するところ、人生評論の作用は二つに限られる。一つは過去と現在との相承を圓滑にすることてあつて、も一つは部分と部分との關係を敏活にすることてある。而して是等何れの作用も人間の性情より自然に出現し來る缺陷を塡補するに必須のものてある。人間によつてなさるゝ過失と錯誤とは、其の數に於て固より少くはないが、其の多くは過去と現在との推移が圓滑ならず、部分と全體との交渉が敏活ならざるより來つて居るのてある。

部分の機能は全體の要求より自然に分化したものてあるから、其の性質は絶えず全體の方針によつて左右せらるべきものてあるが、併し部分の特色として、其の機能が發達すればするに從つて、段々に全體の方針より孤立して、時には全體の利益と矛盾しようとする。假令ば科學も、藝術も、宗教も、政治も、殖産も、もと社會を豐富にすることを唯一の目的として分化し來つたことは明てあるが、是等が時々一つの方便たることを忘れて、自から一つの目的てあると信じ、其れが爲めにやゝもすれば全體の幸福を破壞しようとする態度に出づることは珍らしくない。科學の爲めの科學とか、藝術の爲めの藝術とかいふ類は、皆部分が全體から孤立した病症に與へられた言葉てある。併し一層深く考へて見ると、是等の部分はもと全體の幸福を增進する爲めに分化したものてあるから、其の内には各全體に對する關係の意義が含まれて居るに違いない。而して此の義意を發揮する爲めには、唯部分を全體に反照することが必要となる。今人生批評は是れをなさうとするのてある。

生活は過去と現在との協同より成立つ。過去の樣式によつて現在の欲望を拘束し、現在の理想によつて過去の活動を開張することより成立つのてあるが、是れも人間の根本性より過去は己れの樣式の改造せらるゝことを拒み、現在は己れの發動の拘束せらるゝことを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嫌ふが故に、こゝに端なく生活法として適せざる二種の處世觀が生ずるのであつて、守舊及び急進は即ち是れてある。新なるものは唯舊の根抵の上に立つことによつてのみ其の發展を遂げ、舊なるものは唯新の體系の內に入ることによつてのみ其の生命を保つことが出來るものならば、生活の常道は守舊にも非ず、急進にも非ずして、漸進てあらねばたらぬ。而して此の漸進の常道を暗示するところのものは是れ又人生批評の職分てある。

さうすると私の見るところでは今いつた通り、人生批評の職分は歷史的研究と社會的觀察との二つの立場より、ある時代に於けるある人民の傾向を認得し、其の結果を標準として、過去と現在との間に生ずる扞格を融和し、或は部分と全體との間に生ずる矛盾を整齊するにあるとしなければならぬ。

かく私が人生評論の職分を割義すると、其の文字だけが見えて、其の精神の悟れない人々は、人生評論の職分は極めて抽象的であり、形式的であると考へ、隨つて其の効果を疑ふものがあるかも知れぬ。併し是れは全く彼等の誤解に過ぎぬ。人生評論の職分は一般的てあるが、決して抽象的てはない。作用的てはあるが、決して形式的てはない。既に一般的てあり、作用的てあるからには、何物にも優りて、具體的てあり、有機的てあらねばならぬことは、事理を解するものゝ容易に認めねばならぬところのものであらう。詰り私は人生評論の職分を極めて具體的に且つ有機的に見る結果として、其れをいひ表す言葉は自から一般的に且つ作用的とならざるを得ぬのである。

人生評論の有する目的は何時ても單一てあるが、其れが適用せらるゝ場合に從つて、無限の色彩をとり、無限の樣式をとることになる。試みに近世文壇に於て第一流を以て目せられた評論家の評論をとつて見るに、上はヂデローより下はウォーターペーターに到るまて、等しく人生評論に從事しながら、其の題目に至つては彼等各の興趣と才能と義務の觀念とに從つて、實に端倪すべからざる程に千差萬別をなして居る。彼等

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は等しく未だ嘗つて人生評論が必然に人生全體に關することを忘れたものではないが、ある者は藝術の側に立ち、ある者は政治の側に立ち、ある者は道德の側に立ち、又ある者は宗教の側に立ちて、是れが評論を試みて居る。されば其の見地と興味の廣さことはよく人生全體の範圍を掩ひながら、ロック、モンテスキュー、ルーソー、ベンザム、ミル、カーライル、ラスキン、マジニー、ジョン・モーレー、フレデリック・ハリソン、等皆各其の領土を異にして居る。

人生評論を目的として立つところのものは、彼の題目は宗教にしても、政治にしても、藝術にしても、科學にしても、單に宗教家が宗教に據り、政治家が政治に據り、藝術家が藝術に據り、科學者が科學に據つて、其れ等のものを論するのとは大いに其の趣を異にする。人生評論を目的とするものは常に人生の立場より宗教、政治、藝術等を論ずることを忘れないから、其の動機と經過と歸結とに於て、個々の専問家と大いに其の撰を殊にせねばならぬ。而して此の異る點は個々の専問家の職分が、殊に己れが從事する專問の改造又は發達に止まるに反して、人生評論家の役目は過去と現在との推移を圓滑にし、全體と部分との關係を敏活にするといふことに歸するのである。過去と現在との推移とか、部分と全體との關係とかいつても、其んなものが一つの形を以て宙に浮かんで居るものではない。其れはたゞ立場であり又見方である。人生は其を構成する宗教、政治、藝術、科學等よる成立つて居るのであるから、人生の意義は又是等のものゝ中に分配されて居るのである。されば、人生全體の評論を試みるといつて、宗教にも非ず、政治にも非ず、藝術にも非ず、科學にも非ざるものを問題とするのではなくして、是非とも時としては宗教を中心として、他の活動を末梢としたり、或は時としては科學を中心として、他の活動を末梢としたりする外に道はない。併し重ねていふが何れの場合に於ても眞正なる意義に於ける人生評論たるには人生全體の意義を暫くも念頭より遺れぬことを其の必要條件とせねばならぬ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人生評論の目的は何處までも一部の改造であつて、全體の革新であつてはならない。もし此の世の中に一つでも神聖にして、惡をなすこと能はずといはれ得るものがあるならば、其れは確かに人類全體の進行のみである。されば我々は如何なる時代にあり、如何なる場合にあつても、社會の行動を全體として非難する譯には行かぬ。其れは大體に於て正しきものと見ねばならぬ。人類全體の欲求とあらば、吾人はどうして今日科學の隆盛を非難し得よう。又どうして信仰の衰徴を非難し得よう。人間の常に追求する最後の目的は、彼の欲望の滿足である。彼が永劫に走る進行中に於て、ある時代のある物が最も多く彼に滿足を與へるならば、吾人はどうして是れに反對することが出來よう。唯吾人がなし得る所のものは其の本流と大勢とを看取して、其れに逆行し、或は其れより遊離せんとするものを啓發し、利導して、其れをして本流に適從し、大勢に順應せしむるだけである。

併しながら從來人生評論家の多くは當時の社會の活動全體を非難しようとしたのである。例へばジヨセフ・チユメーストルが當時の信仰に對して取つた態度の如き、カーライルが當時の道德に對して取つた態度の如き、乃至スラキンが當時の經濟組織に對して取つた態度の如き、皆全然其等の傾向が其の根柢より邪惡のものであるといふ偏見を懷き、是れが滅絕を期さうとして居るが、是れは決して正しきものではない。後年より見れば大抵は時代の傾向の方が正くあつて、其れを阻止しようとした彼等の努力の方が間違つて居たのである。

併し私は決して其れであるから彼等の事業は全然徒勞に終つたといふのではない。彼等の努力の効果には大に見るべきものがある。假令ばジヨセフ・チユ・メエストルの新教主義を排斥して、再び舊教主義を挽回しようとした目的は失敗であつたが、世人をして舊教主義に含まれた優秀なる精神を保留せしむることには與つては大なる効力があつた。又カーライルの事業についていふならば、彼が深く何故に近世に於て個人主義

が一般の生活方法となりたかといふことを見極めずして、たゞに中世紀の共産主義を以てこれに代らせようとしたのは、失敗に終つたが、彼の燃ゆる如き雄辯によつて、世人が將に忘れんとした一致と犧牲との精神が何時でも社會生活の根柢であるのを知り得たのは全くカーライルの恩惠であるといはねばならぬ。最後にラスキンの熱心なる說敎も格別近世の大工業より來る經濟組織の方向を變更することは出來なかつた。併し最も密接なる關係を保たねばならぬ經濟と道德とが全然離別されて居た時に當つて、其の言論はやゝ奇矯に失したにしても、猶ほ經濟と道德とは互に相俟つて行かなければならぬことを世人に知らしめ、其れによつて現代の經濟思想に一生面を開いたのは、慥かにラスキンの賜であるといはねばならぬ。其うして見ると世の評論家なるものは、たゞ眞面目に時代の病弊を診斷し、眞面目に之れが治療を試みるならば、假令其の方法は餘程極端なものであつても、猶ほ其の功は其の過を償ふに足るといふことが分かる。されども一人や二人のものゝ力で到底人類の進程を阻止し、或は廻轉することが出來ないならば、初めより是の眞理を理解して大體に於ては大勢を是認しながら、たゞ其の過激なる部分を拘束し、其の不足なる部分を補佐して、全體の革命を企てずして、一部の改善を圖ることか、凡ての評論家の覺悟とすべき所であらう。

もし人生評論の性質が斯くの如きものであり、又其の方法が斯くの如きものであるならば、其れを運用する人生評論家の資格は如何なるものであるべきか。

昔希臘の雄辯家デモステネースは人に雄辯の秘訣を問はれて、一にも活動、二にも活動、三にも活動であると答へたさうであるが、人生評論家が何よりも先きに有たなければならぬ資格は誠實である、憂國愛民の誠實である。過去に於て偉大なる感化を殘した評論家は皆是の誠實といふ要素を十二分にもつて居たのである。デデロー、ルソー、モンテスキユー、カーライル、ラスキン、ジョン・スチユワート・ミル等皆其うであつた。誠實の要素がなくして評論家たらんとするものは、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

恰も駱駝に乘つて針の穴を通らうとするが如きものてある。心に一片の誠實があれば、經驗や學問を以て一層其れを有力ならしむることは出來よう。併し其れが缺けて居るならば、如何なる學問も經驗も、何の役をもなすものてはない。恰ど同じ樣な性格の人物てありながら、其の當時に於てヴォルテールが大なる感化を及ぼしたのに反して、ハイネの感化の甚だ尠きは、全く一方は此の誠實があつたのに、他方は此の誠實を缺いて居つたからてある。又少し當を失して居るやうてはあるが、ジョセフ・マジニーがゲーテを貶し、バイロンを擧げたのは、バイロンの有した誠實はゲーテーの其れに比して遙かに優れて居たと彼は見たからてある。實に此の誠實なるものは眞正なる評論の精神てあり、動力てあり、指南てある。唯此の一要素によつて彼の見識は高邁となり、彼の興味は博廣となり、彼の智識は深遠となるのてある。一度評論家が此の誠實を有すれば、偶々彼が注意を拂ふ問題は何にしても、其れは其の立論の根抵は何時ても同胞全體の幸福利益の上に置かるゝのてある。

　チデローやカーライルや、ラスキンには他に百の缺點があるにしても、尙ほ彼等をして百歲に涉つて、人生評論家の模範たらしむるものは、慥かに彼等が眞に持つて居た憂國憂民の赤誠より來つたのてある。只是あるが爲めに、彼等の道義的熱情は自から人生の最大事件に對して燃え、彼等の鑑賞的興味は人生の最高意義に對して動いたのてある。かくして人生全體の成立と傾向とは、彼等によつて殆ど直覺的に感得し、觀得せられた。其れ故に私は何人ても評論家たらんと企てるものに取つては、何物よりも先きに此の誠實を蓄ふることが必要てあると信ずる。

　第二に人生評論家の持たなければならぬ資格は廣汎なる知識てある。希臘人はあらゆる國民に優れて知識の効力を認めて居つたものてあつて、優秀なる道德又は卓絕せる藝術は必ず其の根柢を正確なる知識の上に置かなければならぬと信じて居つたのてある。其の後情操を尊ぶ基督敎が、感情に偉大なる權威を認めるセ

ルマン人によつて信奉せられて以來、道徳に於けると同じく藝術に於ても、情操は常に知識と對等の位置に置かれ、時としては情操の方が知識の上位に置かれたのであつた。併し私は情操より來る標準を輕蔑する譯ではないが、知識の標準を再び希臘人が之に與へた元の位置に引上げぬ中は、如何ほど人生評論を名とするものは出づるとも到底其れは事物の眞相を發揮することは難いと思ふ。前にも述べた通り、人生評論の唯一の職分はある場合或はある時代に於て、人生を形作るあらゆる活動の綜合的傾向を體認して、而してもし其れと逆行し、或は其れより遊離する要素の顯れた時に、其れをして全體と調和せしむるにあるならば、評論家の持つべき知識は乃ち人生全體を包含するものでなければならぬことは明かである。或は人によつて藝術を中心とするにしても、宗教を中心とするにしても、或は道徳を中心とするにしても、彼の知識は人生全體に渉つて居ることは自から假定さるべきである。

私が人生評論家の一つの資格として、かゝる廣汎なる知識を要求するのを見て、職業と活動との分化は日に益々盛にして、殆ど其の際涯を見ざる今日に於て、其んなことは一つの空想に止まると非難するものがあるかも知れぬ。一藝一業に關して妥當なる知識を得るさへ、一生を通じて尙ほ足らざる程であるのに、其の數無限なる凡ての活動や職業の知識がどうして得られやう、と彼等はいふてあらう。是れは一應尤もに聞える。併し私は猶ほ人生評論家たる職分より、彼は是非ともかゝる知識を有することを一つの必要條件とすべきものなることを斷言する。然らばかゝる知識は果して一人にて能く得らるゝものかどうかといふことが問題になる。而して私は是れにも答へて、然り、容易の業ではないが決して得られないものでもないといふのである。固よりものゝ關係は無數であるから、吾人が注意の範圍を狹くすればする程、其の範圍の中にあつて新關係は益々新事實を齎すのである。されば見ようによつては、如何に狹き範圍に跼蹐するとも、吾人の知識は到底其れを齎すことは難かしいといへる。併し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其れと同時に吾人のとる見地の性質によつては、半生を費さずして人生全體の知識を得るのもさまで難かしいことではない。而して評論家の必要とする知識は前種のものでなくして、後種のものであることは明かである。細微の性質を知らうとすると、自から大局の意義を遺れるのが必然の傾向であるから、大局の意義を知らうとする人生評論家にあつては細微の關係に關する知識の如きは極力排斥せなければならぬ。

人生評論家たらんとするものは、苟も人生を形作るものは宗教にしても、政治にしても、經濟にしても、道德にしても、藝術にしても、科學にしても悉く知らねばならぬ。併し其れは全體として人生の意義を知り得るやうに知るのである。人生の意義を沒却して了うやうに知るのではない。而して何時でも是れ等のものゝ何れもが社會活動の一つの發現であるとして、常に其の起源と經過と作用とに社會的意義を求める事を忘れないならば、かゝる種の知識は得られることゝ思ふ。而して評論家の必要とするのは僅かに此の種の知識である。

第三に人生評論家の持たなければならぬ資格は見識である。如何にある評論家が知識の數と量とを蘊蓄するに汲々としても、もし彼が人生の指標（インデツキス）として、其れ等が自然にもつ價値を識別することが出來ないならば、彼等は其れより完一なる人生を構成することは出來ない。たゞ五感に映ずるものは雜然無差別の價値を有する事實である。併し一度其等を材料として人生を形作らうとすると、こゝに初めて價値の相違が顯はれて來る。あるものは主となり、あるものは從となる。あるものは正となり、あるものは副となる。あるものは常となり、あるものは變となる。いづれにしても出現し、存在する以上は其れ々々理由がなければならないから、何れに對しても相應の尊敬を拂ふことは勿論であるが、其の間に價値の差等は立てねばならぬ。而して其うすることが精密となり精確となるに従つて、其れより構設さるゝ人生なるものは、ます〳〵意義を有し來るのである。而して是れは全く見識の職分であ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。

然らばかゝる職分を有する見識は如何にして養成せらるゝか。嚴密にいふと見識は直覺の一種であるから、同じ位の教養や經驗をもつて居る二人の人が、其の天性に從つて直覺の多寡と性質とに至つては、非常な相違のあるやうに、見識に於ても大なる相違のあるものである。見識とは全體の目的に照して部分の價値を定め得るところの卓越せる叡智のことであつて、之れは天分より來ることが多い。併し天分は別として、見識となるある素質が賦與されたならば、其れをある方向に、ある程度まで發達さするといふことは、全く個人の注意と努力とによつて出來ることである。而して其れは私の考では一方に先覺の經驗と覺悟との記録によつて、自己の教養を增長して行くと同時に、他方には日常の酬酢應對によつて、其の教養を實化して行くことの外にはないと思ふ。

見識が働く直接の結果は公準の創設である。雜然として日夜に出現し、消滅する出來事について、生活を持續し、發展するに必要なる無上條件より、何れに第一義を附し、何れに第二義、第三義を附すべきかを商量し、其れによつてあらゆる事實を統一しようとするのである。一寸見れば如何にも有力であり、强烈であるやうでも、もし其れを根柢と假定しては、吾人が今現にもつて居るやうな生活は一日も持續出來ないと思はるゝやうならば、其れは僅かに根抵ではなくして、ほんの枝葉である。眞の根柢なるものは他にあらねばならぬとするのが、公準の特色である。而して是れまで一世に大なる勢力を有した評論家は皆彼等の卓絶せる見識によつて、ある公準を發明し、其れで以て世道を維持し、人心を統一しようとしたのである。

最後に人生評論家のもたなければならぬところのものは技巧である。こゝで技巧といふのはたゞに言葉の上の事柄に止まらずして、直ちに思想の上に關係するところが多いのである。否寧ろ思想の上に關係するところあるのみならず、直ちに事實其の物の上に關係するところが多いのである。もし世にカーライルの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

サートル・レサルトスに卓絶せる技巧を認め、ジョージ・エリオットのロモラに優秀なる技巧を認めるものがあるなら、彼はこゝて私が語つて居る技巧の意味は理解出來ると思ふ。詰りこゝて私が技巧と呼んて居るところのものは、修辭や論理を超越したところのものてあつて、藝術として實際的興味が働く時に起るところの技巧てある。此の技巧が働く時には、自己の思想を整頓すると同時に、其れは直ちに一つの實在として適當なる遠近と、明暗とを以て他人に訴へるのてある。かゝる技巧によつて動かさるゝ評論は、歷史上の事實に基きながら、其の意義は歷史よりも一段強烈てあり、社會上の事實によりながら、其の暗示は社會よりも一層明確てある。嘗てアリストートルは詩歌は歷史よりも眞てあるといつたが、かゝる技巧によつて作らるゝ評論は慥かに歷史よりも、社會よりも眞てあるといふことがいはれる。

世には劇や小說に技巧の大切なことを知つて居るが、評論には少しも技巧を要しないやうに考へて居るものもあるが、私より見れば是れほど正鵠を誤つた見解はないやうに思はれる。概していふと評論によつて達しようとする目的は小說又は劇によつて達しようとする目的よりも廣汎てあり、又深奧てあるから、もし技巧が文藝上の事業に必要てあるものならば、其は小說や劇よりも寧ろ評論の方にあらねばならぬ。只相違する點は、小說や劇に於ても固よりさうてあるが、殊に評論に於ては其の技巧なるものは文字の上よりも、事實を發見し、整頓し、創設する上に於て働くといふことだけてある。

以上は現代の社會組織よりして、評論が當然に占むべき重要なる職分より、人生評論の意義と、人生評論家の資格とに就いて、少しく述べたのてあるが、世には未だ人生評論が如何なるものてあるべきか、人生評論家は如何なる人てあるべきかといふことに就いて、一向に的確なる意見を持つて居ないものがあるやうてあるから、此の一篇は全く彼等の爲めに作られたのてある。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

殖民地掠奪の愚策

竹越與三郎

其形甚だ小なるが如くして、其實甚だ大なるもの少なしとせず。大藏省が臺灣の粗糖消費税を内地に引揚げんとする一事の如き即ち是である。其の金額から言へば僅に六百萬圓である。其事柄より言へば臺灣の金を内地に取ると云ふに過ぎぬ。而して其の利害の關係を有する者は僅に三百萬人の臺灣人に過ぎぬ。之を五千萬人の國家より見れば甚だ小なるが如くであるが、其實は我が殖民政策の根本に接着する一大問題である。即ち單り臺灣のみならず、將來朝鮮を經營し、滿洲を經營すると云ふことに至大なる關係を有する拓殖民政策上の一大變化であるが故に、予は玆に一言を費して世人の注意を促したいと思ふ。

抑も我が殖民政策なるものは、其の定まりたること、僅に明治二十七年臺灣を領有したる以來にあるので、其の歷史甚だ淺い。併ながら我が聰慧なる政治家が、歐洲各國の歷史に鑑みて、長短を比較し、得失を考慮して定めたるものなるが故に、比較的に見識ある政策であつた。即ち我殖民地は——殖民學者の言ふ所の狹き意味ではないが、——英吉利殖民地の如く民衆的要素より成立つ所の獨立の權能を與へないが、帝國の政策を代表する官吏をして之を自治せしむると云ふ方針を執つて來た。又佛蘭西の如く中央より萬事干渉すると云ふ、所謂劃一制度は執らぬが、同時に又本國より之を放任すると云ふ制度も執らず、恰も英吉利の散漫なる弊を避け、佛蘭西の干渉好の弊を避け、英佛兩國の間の長短を比較して、其の利益ある所を採つたと云ふ形がある。即ち總督は帝國政府の委任を受けて、宗國の法律と相衝突せざる限り、法律に代る命令を發布すると云ふ權能を有し、同島内の事は一に總督の權力に委任せられて、財政なり、法律なり、兵備なり、嚴然

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たる自治の國となつて居る。同時に帝國政府は、總督に命令し制肘するの權力を保有するが故に、何時たりとも其の政策が帝國に不利なる時は之を改善せしむるの權能を有して居る。而して帝國議會は勿論其の見る所に依て政策を批評し注意するの權力を有して居る。故に我が殖民政策なるものは比較的善美なるものと認められて、伊藤内閣より山縣内閣、松方内閣、大隈内閣、西園寺内閣、桂内閣に至るまで、未だ曾て此の政策を變更したことはなかつたのである。是が所謂六十三號の法律で、後に變じて三十一號の法律となつたものであつて、此の法律に依て我が殖民政策なるものは殆ど歸着する所が定まつたのである。今日臺灣の發達したのは、此の法律に依て總督が官府的自治の權力を有して、機に應じ變に處して宜しきを得たと云ふことが與つて力あることは言ふまでもない。此の殖民政策なるものは、自然の結果として臺灣を財政上自給ならしむると云ふことを要求して來るのである。即ち、既に本國より干渉を免るゝ以上は、本國の世話にならぬと云ふことが必要である。其の世話にならぬと云ふことは最も多くは財政上にあるが故に、臺灣に於ける殖民政策なるものは、孜々として臺灣の富源を開發し、財政上自給國となると云ふことであつた。而して其の目的は遂げられて、今日は財政上自給となつたが、同時に此の官府的自治主義を發達せしめんが爲には、財政上自給であるのみならず、又財政上の獨立を要するのである。故に將來臺灣が益々發達して、本國に對して陸海軍の費用を貢ぐと云ふが如き場合を外にして、本國は其の自給財政となつた事に滿足して、之を開發せしめ、發達せしめ、我が本國の人民をして益々移住することを樂しましめて、制度の上ならずとも、實質の上に於て臺灣を純然たる日本國に同化せしむると云ふことを主とせねばならぬ。就ては同島を獨立せしめ、之に干渉し、若くは之を誅求して、西班牙の如く殖民地を以て掠奪の場所とするが如き政策は、全然之を思ひ止まらねばならぬと云ふことは、我が十五六年間の殖民政策の示す所であつたと思ふ。然るに今や突然と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して政府は、臺灣より六百萬圓の消費稅を本國に引上げむとすると云ふことは、十五六年來我が殖民政策の根本となつて居つた所の財政自給政策を破壞せむとするものであつて、取も直さず同島の官府的自治主義をも改めむとするものであるが故に、我が殖民政策にとつては、新なる出來事て、新なる方針てあつて輕々に看過すべからざる大問題てある。

元來大藏省の吏僚が、年來收入の增加を單一の目的として、また大局に亘つて政策の如何を顧みることのないのは珍らしき事てはなかつた。併ながら思慮ある大臣は其の吏僚の意見を採用せずして今日まで來たのてあるが、今や政府は財政整理と號して消極財政を取るより、財源極めて少なきがため、種々なる方面より財源を發見せむと、鵜の目鷹の目と捜して居る最中てあつたが、幸にして臺灣に六百萬圓の財源あるを見て、得たりかしこしと之を本國に引揚げむとするのが即ち今日の消費稅引揚問題てある。然るに民間の論者は思慮少なく、殖民地より錢を取ると云ふことは、本國人の懷ろを痛めぬと云ふ一點より、寧ろ消費稅引揚に贊成する者も少なくないが、茲に考へなければならぬ事は、政府をして增稅をなさしめずに、新に六百萬圓の財源を得せしめると云ふことは、即ち政府をして其の放蕩息子たるの資を益々行はしむるものであつて、寧ろ放蕩息子を助長するものと言はねばならぬことてある。而して何故に臺灣の消費稅を內地に引揚げるかと言へば、之を名けて財政統一と云ふのてある。抑も統一なるものは、帝國經綸の下に於て殖民地若くは保護國をして、其の定めたる軌道の上に在らしめて統體を維持せしむると云ふに外ならぬのてあるが、臺灣は如何なる點に我が經綸統體の外にあるか、日本政府若し總督の政策を不可なりとせば一通の電信文に依て之を改めしむることが出來るのてある。若し其の行政振りが帝國の經綸に合せずとしたならば、一通の書面に依て之を改善せしむることが出來るのてある。臺灣は英吉利の殖民地の如く獨立ならざるが故に、何時にても本國より干渉することが出來るのてある。英國に於

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ける統一と云ふことは、各殖民地咸な民衆的の要素に依て顯然たる獨立の形體、性質を有し、往々にして本國の政策と相矛盾することを行ふが爲に、之を統一し之を同一軌道の下に引入るゝを要するがため帝國統一なる文字が現はれたけれども、我國に於ては未だ曾て斯の如き民衆的要素もなければ、獨立の形質もない。何時にても一通の電信に依て其の政策を改變せしむることが出來るのである。然るに單り財政のみ統一の名義の下に干涉し、誅求せむとするに至つては、其名を美にして、其實を醜ならしむるもので、要するに六百萬圓の財源に涎を垂らして之を奪はむとする精神を、統一の名を以て掩はんとするに過ぎぬことである。若し統一の名の下に財政に干涉するならば、何故に統一の名の下に鐵道を遞信省に直轄し、敎育を文部省の下に直轄し、司法行政を司法省の下に直轄せしむることをせぬのであるか。甚だ奇怪千萬、矛盾至極と言はねばならぬ。此に由て之を觀ても消費税を取上げると云ふことは、畢竟殖民地に誅求せむとする劣惡なる西班牙流の政策が、其の端緒を示したものであることは蔽ふべからざることであらうと思ふ。

又何故に消費税を本國に引揚げむとするか、之に贊成する者の說を聞くに、消費税其物は消費する場所に於て取ることを目的とするものである、砂糖は臺灣に於て製造せらると雖も、其の消費せらるゝ所は內地なるが故に消費税を內地に引揚げるのを至當とすると云ふことである。然らば予は斯の如き論者に反問せん。內地に於て製造せられ、而して其物が臺灣に輸入せられたる場合に於ては、帝國政府は臺灣政府をして內地製造の物品に特別なる租税を課せしむることを許すや否や。決して許しはすまいと思ふ。內地より行く物には臺灣をして課税せしめず、臺灣より來る物は內地に於て課税すると云ふに至つては、何ぞ矛盾の甚しきや。凡そ租税に種々なる名目あれども、畢竟は其國、其の土地の政治を經營するに必要な財源を得むとするに過ぎぬのである。或は所得税と云ひ或は土地税と云ひ、或は海關税と云ふも、要するに其國に必要なる財用を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

徵發する手段に過ぎぬのである。臺灣の消費税と雖も、幸に本國に消費税なる名目あるが故に砂糖に課税するのである。若し消費税なるもの無くんば、更に他の名義を以て、砂糖に税を課して臺灣の財政を助けると云ふことが必要なのである。故に其名は消費税たるも可なり、粗糖税たるも可なり、兎に角、政治を行ふ財用に、幸ひ砂糖と云ふ大きな產物があるから之に課税するに外ならぬのである。然るに幸ひ……或は不幸にして消費税の名あるが故に、此税を內地に引揚ぐべしと云ふに至つては、殆ど租税の性質を辨ぜざる三百代言的の政治家のすることであつて、堂々たる天朝政府の爲すべきことでない。

母國と殖民地は、單り政治上に於てのみならず、行政上に於てのみならず、又經濟上に於ても、更に一轉して財政上に於ても密接なる關係を有せねばならぬのは言ふまでもないことであるが故に、將來臺灣益々發達して其の經濟に餘裕の生じたる時に、本國に貢金せしむると云ふことには予は必しも反對せぬ。即ち英吉利の殖民地がドレッドノート型の軍艦を造つて、之を本國に獻上すると云ふが如きは予の望む所である。故に若し政府が臺灣政府に命じて陸軍若くは海軍費の一部を獻金せしむると云ふやうな形式を執るならば、予は悅んで之に贊成せむとするものである。併ながら口を租税の性質に藉りて之を奪はんとするに至つては、是は全然掠奪なるが故に贊成することが出來ぬのである。抑も明治二十八年に我國が臺灣を領有して以來、最初七百萬圓を注入し、次年に六百萬圓を注入し、年々注入したる金は明治三十八年に至つて了り、之を合計して三千萬圓となるのである。今我國と臺灣との貿易を見るに、明治二十八年以來三億萬圓に達して居る。三億萬圓の一割五分は少なくとも我が母國の利益となつて居るが故に、母國は臺灣との貿易によりて、既に四千五百萬圓の利益を得て居るのである、最初三千萬圓の金を注ぎ込む時は、何人も臺灣は我國の頸枷と思つたのである。是が爲に母國の財政を紊しはせぬかと思つたのであつたが、幸にして貿易は發達し、財政亦

宜しきを得て自給となつて、財政上の本國よりの補助は止めとなつて、母國は既に四千五百萬圓の利益を得て、三千萬圓の補助と相差引しても一千五百萬圓だけは儲けて居るのである。然るに此上更に海關税のみならず消費税をも臺灣より奪はむとするに至つては、餘り儲け過ぎる仕事と言はねばならぬ。是れ或は高利貸の如き政治家の眼より見れば、善良なる方策かも知れぬが、併ながら帝國の同島に於て爲すべき事、及び同島を起點として大に南方に爲すべき事あるを考へる經綸より見れば、此事たるや自殺的の政策と言はねばならぬ。

思ふに臺灣は財政上既に自給となりたりと雖も、其事尙久しからず、公債に依て爲しかけた仕事は頗る多い。而して臺灣は既に開拓せられたりと雖も、僅に同島の三分の一の平原が開發せられたりと云ふに過ぎずして、餘す所の三分の二を占むる山地は、依然として生蕃の跳梁するに任せてある。而して生蕃は毫末も手を著けなければ僅に平和を維持するが、一歩生蕃の領分に入るや忽ち反亂を起すのである。即ち近日全島に於て生蕃が反亂しつゝあることは、新聞を見る者の注意を怠らぬ所であらうと思ふ。一たび手を着くれば全島斯の如く亂れるのである。是等の生蕃を退治して、全島を開發する事業が未だ端緒にすら着かざる今日に當つて、臺灣の財政より六百萬圓を捲上げむとするに至つては、殆ど臺灣の發達を中止せしめむとするものである。況や議會が協賛したる臺灣の歲計なるものは、悉く是等の消費税を臺灣に使ふことを目的として編出されたものである。然るに大藏省自らが其の財政を破棄せむとするに至つては、余は其無謀に驚くの外なし。余は斷言す、此掠奪にして行れんか、臺灣の百事之より荒廢せん。

惟ふに政府は、今年の冬は必ずや六三問題なるものを提出する積りであらうと思ふ。予は之に賛成せむと欲するものである。議會は勿論之を通過するであらうと思ふ。何となれば臺灣をして官府的自治ならしむることは、臺灣の開拓に已むべからざる事情であつて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

各國の殖民地皆な其の主義を同じうせざるはないからてある。併ながら若し一方には總督に官府的自治の權能を與へながら、一方には其の消費稅を內地に引揚げむとするならば、必ずや茲に一個の論戰を開くことてあらうと思ふ。財政上同島に干涉することを是なりとするならば、何故に總督の權能を縮少して、事每に干涉すること、恰も他の府縣に於けるが如くすることを許さぬのてあらうか。若又總督をして自治の權能を有せしむることが臺灣の事情に適切てあるならば、何故に其の財政に干涉するか。政府は必ずや相容るべからざるヂレマンの上に立ちて苦痛を受けることてあらうと思ふ、予は政府が大局に眼を注いて速に、臺灣の消費稅を掠奪せんとするが如き短見なる政策を放棄せむことを望んて已む能はざるものてある。蓋し此事たるや、單り臺灣の爲めのみにあらず、將來韓國に於ても斯の如き誅求政策を行ひ、滿洲に於ても斯の如き誅求政策を行ふならば、其の失敗や期して待つべしてある。今や我が朝鮮を領有して以來六年てある、朝鮮と內地の貿易は輸出入を合して三千五百萬圓てある、三千五百萬圓の貿易ある保護國に對して、我國は三千二百萬圓の金を費して居るのてある。即ち我國より朝鮮に賣る品物は年に二千五百萬圓てあるが、我國が二千五百萬圓の貨物を無代價て朝鮮に捨て、更に七百萬圓の正金を添へて捨てゝ居ると同じことてある。朝鮮に向つては殆ど浪費の如き政策を行つて居つて、而して少しく餘裕ある臺灣に向つては、海關稅の上に、更に消費稅を掠奪せむとする、何ぞ彼に厚くして此に薄きや。

余は所謂る統一政策は爲めに臺灣の事業を荒廢せしめて、人心を沮喪せしめ、却つて統一を妨ぐるの本たらんことを恐る。余は斯の如き政策が臺灣土人に至大なる影響を與へて、耳目の開けたる彼等をして、本國に對する忠義の心を薄くせしむる本となりはせぬかを恐る。余は此等の事を考慮して、深く帝國政府の反省を望んて已む能はざるものてある。

(完)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赤痢の話

醫學博士 二木謙三



原因

赤痢には熱帶地方の赤痢と溫帶地方の赤痢との二種ある。熱帶地方に於ては土着性に存在して居つて其原因は赤痢アミーバと稱する原蟲である。溫帶地方の赤痢は所謂流行性の赤痢であつて、流行ある時に起り、無い時に休む。そして其原因は黴菌であつて、日本には三種類ある。第一種は志賀博士の發見せられたる赤痢菌であつて、第二種は駒込病院に於て發見せられたる赤痢A菌、第三種は同じく駒込病院に於て發見せられたる赤痢B菌である。東京の赤痢に於ては駒込菌が多くして志賀菌が少い。駒込A菌は患者の四十パーセントに發見せられ、駒込B菌は患者の三十パーセントに發見せられ、之に對して志賀菌は二

乃至四パーセントに過ぎない。(明治三十六年より四十二年までの統計)。そして僅かに臺灣を除くの外、日本には熱帶のアミーバ性のものがない。

赤痢菌 は前號に話したチブス菌に極く近似の黴菌であつて、異る所はチブス菌の如き運動を有して居らぬ、又鞭毛をも有して居らぬ丈けてある。

抵抗力 藥液に對して千倍の昇汞水或は二十倍の石炭酸に對して直きに死滅する。然しながら糞便の粘液等に包まれて居る場合には藥液は滲透しにくいから尚長き時間消毒しなければならぬ。乾燥に遭へば直きに死滅し、腐敗せる液或は汚水中等にあつては他の黴菌の爲めに劣敗者となつて死滅する。直射日光に遭へば死滅する。然しながら寒冷に對しては抵抗力非常に強い。

傳染徑路 多くは人より人に觸接的に感染する。或は井水河水等を介して傳播し、又食物食器等を介して健康者に感染する。蠅、鼠等は感染の媒介をなす。殊に鼠の如きは好んで赤痢菌を食ふから最も危險てある。

土地 赤痢の流行する土地は多くは不衛生的の人家稠密の場所である。然しながら赤痢は又山間僻地に於ても流行する所以は多くは不潔なる水を飲用するに依るのである。

期節 は日本を三部に分て、南部は七月より八月、中部は八月より九月、北部は九月より十月にかけて流行する。

小兒壯年者 及び男子は之に罹り易い。老年者及び小兒の之に侵されたる場合は危險である。

病毒侵入門 は常に食物或は食器を介して口腔より胃に入り、多くは胃に於て撲滅せらるれども、若し其人偶々胃加答兒を患ひ居るか或は暴飲暴食の爲め、又は氷の飲用の爲め胃散の分泌不充分にして且つ胃の中の食物の早く腸に送入せられたる場合に黴菌は胃の虎口を免れ、腸に於て盛んに繁殖する。初め大腸の局所を侵し、之より菌が増殖すれば病毒が菌の體内より遊離して吸收せられて血行に入り、遂に全身の中毒症狀を起す。然しながら菌は常に腸中に發見せらるゝのみ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にて、チフスの如く血液中或は他の臓器等に侵入することがない。

潜伏期 は一般に二乃至八日間

症候 初めは一二回乃至數回の加答兒樣下痢を發し、同時に多少の熱發がある。食氣減損、身體の疲勞を來たす。翌日に至れば便中に多量の粘液を混じ、更らに血液を混じ、之より進めば糞便の性質は全く變じて濃い葛湯に血液並びに膿の混じたるが如き狀態になつて糞便の色並びに臭氣を存せざるに至る。そして便通の數は一日十數回乃至數十回に至る。肛門に灼熱の感を覺えて便意の止む時がない。之より更らに進めば、便中に異常の組織片の如きものを混ずるに至り、時としては純粹の血液を排出するに至る。或は惡性の場合に於ては暗黑色の魚肉の腐敗せるが如き惡臭を放つ所の糞便を排出するやうになる。食氣は全く消失し、舌は乾燥して口渴甚しく、脉膊は漸次微弱となり、激性のものは往々心臟痲痺によつて斃るゝ。幸にして治癒に向ふ時は便性變じて漸次に通常に復し、食氣亢進し、營養も從て恢復する。或は慢性に陷り衰弱によつて斃るゝこともある。豫後死亡數は十六乃至三十パーセントなるを以て恐るべき疾患である。

病理 赤痢菌は胃中に繁殖すること出來ない。只腸内に入り大腸の粘膜に附着して繁殖する。そこに若し菌が崩潰する時には毒素が遊離する。遊離したる毒素が腸の粘膜に結合して粘膜をして壞死に陷らしめ、其部に粘膜剝離を生じ、小なる潰瘍を作る。そして其周圍が充血腫脹する。此時便は粘液並びに血液性となる。更らに黴菌が繁殖し毒素の遊離すること激烈となるに從て組織片の壞死に陷ること强く、終には厚き義膜を粘膜面に形成するに至る。義膜は漸次に剝離して深き大なる潰瘍となり出血を起す。是に於て便は腐肉樣となる。そして毒素が之より漸次に血液中に吸收せられ全身中毒症狀を起して心臟痲痺等に陷らしむる。之より治癒に向ふ時には潰瘍面に化膿を起し、膿が漸次に便中に排泄せられ、茲に瘢痕形成となり、それより治癒に向ふ。時としては瘢痕の爲めに治癒後

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に腸管狹窄を起すことがある。

經過 は輕症は一週間にして治し、中等症は・三週間、重症は一乃至數ヶ月にして治癒する。其間種々の合併症を伴ふ。

診斷 は便意の急にして且つ頻繁なると、便の性質が粘液並びに血液性となることであるが、尚詳細のことは醫師の診察を受けなくてはならぬ。診斷速かにして早く適當の治癒を施したる場合には經過良好なれども、之に反して其治療の時期を失したる場合に於ては治療困難なるか或は經過甚しく延長する。

治療 は一般に醫師に任ずべきものであるが、普通の注意となるべきことは、第一安靜並びに流動食を用ふべきこと、時としては絕食も必要である。藥用は初めに甘汞下劑を投じて腸の惡性內容物を排除し、後胃腸に適當なる消化藥を投じ、或は藥液の灌腸等を行ふ。又志賀博士の製造せる赤痢血淸といふものがあり、早期に於ては治療の効を奏する。恢復期に於ては患者の食氣非常に亢進するを以て時として之に任せて多量の食物を與ふる時は屢々再發する。又本病は一回罹るも長き免疫性を得ざるが爲めに一生中數回之に罹るもの故、年々の注意を要する。

豫防法 公衆豫防としては水道の整理、下水の敷設を以て最も必要とする。時機に應じて大消毒を勵行すること、河水並びに井水の飲用及び使用を禁ずること。個人としては流行時には飲食の攝制を謹み、暴飲暴食は勿論、氷、心太(ところてん)、生豆腐等を食せざること、胃腸の弱きものは適當の醫療を受くること、若し患者あれば之を隔離し、其周圍に充分なる消毒を行ふてと、蠅並びに鼠に、便所と臺所の媒介をなすことを防ぐべきことと等である。(完)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

近代小說と教育

左に掲ぐるはエール大學教授ウイリアム・レオン・ヘルプス氏の論文を抄譯したるものにして、仝教授がトルストイ等の小說を大學の科目に加へたる實驗と、それに對する世評とを綜合論究したるものなれば日本現代の教育家の好參考となるべきものたるを信ず。

安成貞雄

(上)大學の科目としての小說

十五年前、エールカレッヂの三年生及び四年生の科目を選むに方つて、予は、『近代小說』と稱する新科目を課程表に加へた。此の新科目と受持教師たる予とは、直ちに新聞の珍陳の題目と爲つた。予は合衆國各地から、自分の無害なる教育上の小計畫を論議した新聞の切拔を送られたが、其中には、革命的立案と云ふ恐ろしい題を冠して批難したものも有つた、又賞讃の辭を陳ねたものも有つた。然し兎に角是れが爲めに普く世間に知れ渡つて、其後六ケ月間一日平均三通の割合で以て、或は其小說の目錄を尋ね、或は其方法を問ひ合せる手紙を受け取つた。その上、此の騷動は太西洋を渡つて英國に達し、デーリー・テレグラフは爲めに其社說欄に於て、予の新科目を批難するに至り、遂にはポンチの材料とまで成つた。

然しながら、過去十年間に、世間の事情は一變した。其後予は一度も同一の科目を立案しなかつたが、今日また之を繰返しても、何等の批難を受けないだらうと信ずる。一方小說の出版が激增するに從つて、是を批評する著書も增加し、現在少なくとも二十種の批評が、予の書棚中に存して居る、其中でも、セルドン・エル・ウイットコム氏の『小說の研究』の如きは、『此の著は小說を教授したる實驗の結果にして、其目的は全く教育

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

學的なり」と大體に書き出して居る。

大學で小說を科するに方つて受ける反對說は、略々下の五箇條に分けられる。第一、小說の研究はアカデミックでない――卽ち重味が足らない。第二、學生は勸めなくとも小說を多くの小說を讀んで居る。故に、之に用ふる力を、他の文學上の諸形式を研究するに投じなければならぬではないか。第三、近代及び現代の小說は無價値である、若し小說が敎授されるとすれば、其小說は古典と認めらるるものに限るべきである。第四、今日の小說の多數は不道德である、故に、之を讀ませるのは、青年の精神を開發せずして、墮落せしむるに相違ない。第五、小說は、研究するには容易に過ぎ、面白きに過ぎ、之を一科目とするには、精神練磨に缺くる所がある。以上の反對說は、各々幾分の眞理を含んで居つて、眞面目の答解を要するものである。下に逐次之が答解を陳ねる。

小說の研究は、大學の科目としては、重味、貫目が足らないと云ふとは、一應尤もの議論ではあるが、其議論の重さは、習慣と先人の偏見の力でなつて、確固たる思索の根據を有するものではない。昔は、大學の科程其物が、實際生活と交涉することが少なかつたので、多くの學者及び有望な學生と云ふものは、隨分常識を缺いて居つた。眞に精神の獨立を有し、人生と、自己に關する思索とに興味を有する學生は、斯る古風な研究に飽き足らずして、其學科を輕視し、動もすれば、公然之に反抗するものである。トーマス・グレーが、ケンブリッヂ大學の課程に關して云つたとは、十八世紀の大學の死したる學問を敎へたとに對する、立派な罪の宣告である。一體歷史と云ひ、歐洲文學と云ひ、近代語と云ひ、財政學と云ひ、自然科學と云ひ、美術と云ふが如き諸種の科目が、大學の課程に加へられ、羅甸語、希臘語、數學等と同樣の重味、貫目を有するものと見做されたのは、僅か最近の事である。世間の堂々たる學者の中には、今なほ、ラテン、グリーク、數學が有する三位一體的權威は、他の諸學科を併せたものよりも逈かに上に居ると信じて居る人があ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。かゝる謬見を抱く人は姑く措き、大學の課程に歷史を加へ、自然科學を加へることを認める人は、小說を加へることをも怪しまぬであらう。今や小說は、近代文藝中最も重要な地位を占めて居る。若し近代文藝にして研究する價値あるものとすれば、小說は決して等閑視すべきものではない。大學の課程が受けた甚大の變化は、畢竟するに、學問と人生とを一層密なる關係に措かんとする世界の大勢の促進の結果であつて、又、青年學生の要する所は、近代の社會關係を了解し、其中に立つて活動的生活を營むべき一般的準備をなすことである。此の必要に應じ得る度合如何は、即ち其物の實目の有無を決すべき標準である。予は、尤も此の必要に應じ得る度合の高いものゝ一として小說を推すに躊躇せざるものである。

學生は、どのみち小說を多く讀んで居る。即ち、歷史傳記に比べて多く讀んで居ると云ふことは、恐らく實情であらう。然しながら、小說研究の當初の目的は、學生をして更に多くの小說を讀ましめんとするのでも無く、是を少なく仕樣と云ふのでもなく、其代りに他の書籍を讀ましめやうと云ふのでもない。眞の目的は、學生がどのみち多くの小說を讀むものと認めて於いて、それを賢く讀ましめ、善良な小說と、俗惡な小說とを甄別せしめ、以て、低級にして、衝動的なる愚作を厭はしめんとするにある。

當代の小說の多數が、無價值であるが故に、其科目用の小說は古典を擧げなければならぬと云ふのは、二重の叙述であつて、一方が立てば、一方は立たない論理である。現に大學で敎へる古代、中古の文學の中には、作其ものは無價值であるが、或は古い國語を研究する材料として、或は或る時代の或る文學上の形式を代表するものとして、或は其時代の思想、習慣等を知るべき便りとして讀まれて居るものが澤山ある。或る作が、二千二百年頃に出來たと云ふことは、それが、一千九百九年に出來たものに比して研究的價值があると云ふことの證據には成るものでない。今や、近代の小說は、日に日に、近代思想の反映たる實を現はして來て

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居る。されば、現代社會の人間が、如何なる思想を抱いて居るかと云ふことを知らんと欲する學生にとりては、トルストイ、ビョルンソン、ズーデルマン、トーマス・ハーデー等の作物は、最も絶好なる教科書ではあるまいか。又、他の科學に在つては、出來る限りラヂウムと云ひ、無線電信と云ふが如き、日新の研究を知悉せんとすることを目的とするのに、何故に現代の小說、現代の劇曲の研究のみは回避しなければならないのであるか。吾々は、科目中に、貧民窟を探査する社會狀態研究をすら有して居るではないか。玆で斷つて置かなければならぬが、予は、古來の不朽の大作を捨てゝまで近代小說を研究せよと云ふものではない、たゞ、近代小說も亦其正しき地位を占なければならぬ、眞面目な研究に價しないとして輕視さるべきものでないと云ふのである。小說を研究するに方つて、最も得心の行く二法は、先づ第一に、これを以て文藝の一形式と見做し、次に、精神生活の發現と見做すことである。此の見地に立てば、如何に現代の小說を輕く評價しやうとしても、出來るものでないことが會得される。

今日の小說が多くは不道德であると云ふことは、眞實である、然しながら、教育者が古典と尊んで居るものゝ不道德であることの方が、一層眞實である。出版額全體に比較する時は、不道德な作品は、今日よりは古代に多かつた。實際今日は、傑れた小說中に、全く汚點のないものが無數にあるが、かう云ふ現象は、古代の作品は勿論、十九世紀以前に出版された作品には殆んどないと云つていゝことである。若し不道德呼ばはりをするならば、希臘の劇聖と稱せらるゝアリストファーネスやユーリピデスを何んと呼んだらいゝのであらう。ドライデンの喜劇、ヘンリー、フィールデングの小說は、抑もどうすればいゝのであらう。云ふ迄もないが、近代小說を教授する場合の方が、古代の作品を講義する時よりも、其文學上の卓れた點と色調の純潔とが結合して居ることを發見し易いてあらう。

小說の研究は、精神の練馴に缺く所あつて、餘り容易てあると云ふことは、一に教師と、其方法の如何に依

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ることてある。若し準備に要する時間の長短を以て、精神馴練の度合を計るものとすれば、近代小説の準備は、古典の準備よりも、三乃至四倍の時間を要する。古典を調べるには、不幸にして優れた翻譯と云ふものがある、然して翻譯に依ると云ふことは、精神馴練に取つては致命傷てある。時間を離れて考えても、小説は、教師の手腕によつて、絶好の精神馴練を與ふる樣に教授し得られるものてある、即ち、第一には、生徒をして、自己一家の見解を立てしめ、次には、その見解を、妥當な言葉で言ひ現はすことを習はしめることが出來る。

(下)現代文學に對する教師の態度

予は、ホーマー、ヴージルの研究を捨てゝ、其代りに、ホール、ケンー、ハンフリー、ウワード、マリー、コレリを讀めと勸めるものてない、アーサー、ピネローは、ソフオークレス以上の戲曲家だと信ずるものてもない、又、シシクレーアの『藪』を讀めば、ユークリドを讀破したと同樣の精神馴練を得ると信ずるものてもない。

予の云はんとする所は、すべて思慮ある人間は、假令學校教師の如き、しかく卑小な人間であつても、此の聖代に生れてゐながら、苟も紀元前四百年に溯つて生活せんと企つべからずと云ふことてある。教師は學者てない、教師と云ふ字は、學者と云ふ言葉よりも、もつと廣い意義のある字てあつて、學者てあると云ふことは、「死んだ事物に關する智識」と云ふことよりももつと深い意義てあるから、教師たるものは、成るだけ現代の活きた智識を收得しなければならぬ。良教師たるものは、其教室に集まる男女の學生は、術語の研究に一生を終らんとしつゝあるものてないことを記憶しなければならぬ。男女學生を感化するのが教師の任務てある、而して、教師に、自己の時代の生活、思想に趣味を有し、其學生が處る境遇に趣味を有して居らなければ、決して大なる感化力を振ふことが出來るものてない。予の信ずる處では、現代神學教育の最大誤謬は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

牧師の候補者が、ヘブリウ語の研究に半生の時間と精力とを消耗するとてある。本來人を救はんとするものは、其同窓同學の興味を惹く問題よりも、其説教を聽問する者の心を動かす問題を研究すべきてある。『僧侶は五慾七情を學ぶべし、然らずして、いかてか、五慾七情の極まる時救ひを求むる人間を濟ふを得んや』と云ふ詩句は、萬古の眞理てある。僧侶が、よしやヘブリウ語を知り、希臘語を知り、神學に通じ、新約書の解義に明かであらうとも、文學を知らず、歴史に暗く、美術に昧く、人間の性情に疎ければ、其高貴な職務に對して、極めて不適當なものてある。

古今を通じて、其時代の文學的作物を嘲弄し、唾笑するのが常習てあつた。予の見る所ては、一千五百九十年から一千六百十六年間の英國こそは、世界に曾つて無い偉大な創造力の時代に會したものてあつた。然るに、ベン、ヂョンソンは、一千六百七年に、『今や劇詩、即ち彼等の謂ふ所の舞臺詩(ステーヂポエトリー)には、淫話、不敬、瀆神等すべて神と人とを蔑(ないがし)ろにするものが横行して居る』と云ひ、一千六百十年には、『今日の劇は、淫靡な舞踏と滑稽とを以て觀客をくすぐるのみを藝術とする』と云ひ、『厚く黒き無智が一代を蓋ふて居る』と云つた。而して、彼が罵つた時代こそは、世界中最も高い文藝の水準てあつた、罵られた沙翁こそは、其水準を高めたのてある。

物理學を教へる教師は、其科目の歴史に通ずるのみならず、其最近の研究、同代人の研究にも明るい筈てあると考へられて居る。財政學を教へ、社會學を教へる教師も亦、歐米に於ける斯學の新書を讀むに止まらず、日々の新聞を讀み、市場の變動を知らなければ、生徒に追ひ拔かるゝ恐れがある。又、繪畫を教へる教師は、藝術史に通曉するに止まらず、其最近の發達進歩をも知らなければならぬ。然るに獨り文學の教師のみが、其時間の一部を割いて、生徒をして現代の詩歌、小説、戯曲を研究せしむれば、世間の批難を受けなければならぬのみならず、現代の文學に暗き教師が、却つて傲然として其無智を慢つて居るの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、抑もどう云ふ理由てあらう。

無論教師は、有ゆる新刊書を讀めるわけてはない、又古典をも研究し、教授しなければならないのてあるが、然し、其同代の作家、作品に對する態度が、無頓着てあり、侮蔑てあるのは宜しくない。英文學を教授する教師が、全世界に喧傳されてのち始めて同代の作家を知ると云ふが如きは、不見識の甚だしいものと云はなければならぬ。

予の見る所では、總ての大學は、或る制限の下に、現代の劇、若しくは現代の小說、若しくは現代の文學の他の形式を研究する一科を有すべきものてある。獨逸人は、世界中の最も進步したる學者を以て目されて居るが、彼等は、現代著名の作家を認めることを以て、決して學者たる威權を下げるものだとは思つて居らないのてある。英國人が、英國人一流の遣り口て以て、讀みもしないイプセンを排斥しつゝあるに方つて、獨逸の大學は、イプセンのみを專門に研究する一講座を開いた。オクスフォードにイプセンの講座が出來たらばと、想像するだに英國人の憤激が眼に見えるては無いか！

教師は、既に定評ある同代の作家に趣味を有つに止まらず、常に注意して、無名の作家の作物から、其作家の前途をトすべきものを見付け出すべきてある。かう云つたからと云つて、何も、すべての新作の價値を誇耀して、すべての作家を擔つぎ上げよと云ふのてはない。寧ろ其反對に、意見を陳ずる機會が有るならば、淺薄、猥雜、愚劣と認めたものは、その市場の賣れ高に目を眩まされずに、之を擯斥すべく、若し又其作にして眞價ありと認めたならば、溫かなる同情を寄せて、其作家をして全力を盡すの機會を得しめ、以て、自國の文學を豐富にすべきてある。

現代の文學は、果して輕浮にして卑小なものてあらうか？『現代の文學』と云ふ言葉の內に、吾人は、略々現今三十歲前後の人々と同代に居つて、著作し、著作しつゝある作家を包括して差支ないとする。然る時は、劇に在つてはイプセン、ビョルンソン、ユーゴー、

アンリー、ベック、ロスタン、メーテルリンク、ズーデルマン、ハウプトマン、ピネロー、ヂョンス、バーナアド、ショウ其他、小説では、ツルゲネフ、トルストイ、ドストイエスキー、ビヨルンソン、ユーゴー、ドウデー、ゾラ、モーパッサン、ハイゼ、ズーデルマン、ハーデー、メレデス、ステヴンスン、キップリング、ホウエルス、マーク、トウエン其他、詩に在つては、英國人のみを擧ぐれば、テンズン、ブラウニング、アーノルド、スヰンバーン、モリス、キップリング、フイリップス、ワトスン、トムソン。其他は、みな現代作家の中に含まるゝわけである。今後百年を經なければ、此等の作家の著作の眞價は、或は定め難いかも知れない。然しながら、此等の名は、文學を以て其專問科目とし、之を子弟に敎へる人々にとつて、其人々が從來思惟した如く、しかく重味なく貫目なきものであらうか？

山縣副統監論

人物評論（七）



△山縣副統監

三宅雪嶺

新華族の子は何所かブッて居ると見える、ブッて居らなくても何だか普通と違ふ、少し間の抜けて可笑しい所がある、然るに若し全く普通と違はぬのが有るとすれば、是非共山縣伊三郎氏を其中に入れねばなら

ぬ、氏は新華族の子てあつて、剰へ新華族の隨一公爵の子てある、現に官僚派の首領として飛ぶ鳥をも落すかに目せらるゝ山縣公の子てある、養子てはあるが子は子てある、養子といへば長州の元勳木戸松菊の子、伊藤公の子、井上侯の子、皆養子てある、養子でも兎角貴公子然たるのが多く孰れかといへば養子の方がブリたがるらしく、藤公井侯の養子はぶる方てないが、何分にも貴公子然として居る、が山縣公の子は一向さうてない、普通の人と一緒に居れば少しも普通と違はぬ、柄の大きな餘りこせつかぬ男としか見えぬ、才能に於ても左程劣らぬ、如何なる所に在つても一と通りの事務を取ることが出來る、大臣となつても盲判を押す許りてない、盲判を押せば押しても差支ないと認めての事てある、其邊の差別は辯へて居る、物を知らなくても聞けば判る方てある、而して人に嫌がられることが無い、氣障て無い、多數の人に長たるの器を具へて居る、堂々たるものとして宜からう、所が單獨ても慥に働のある人物てあるが、併し今日迄進んて來たのは父の威光に依つて居るに相違ない、或る位置を與へらるれば相應に遣つてのけるが、官海游泳術に達して居る方てない、臺所口から出這入りする樣に出來て居らぬ、普通の生れなら昇進は遲かろう、先づ精々て知事位になつて居るかも知れぬ、遞信大臣となつたり、韓國副統監となつたりするのは背後の勢力に因るのてある、親の光てある、が親の光てあるにしても惰て昇進する無能力者流と違う、昇進すれば昇進するて結構其任に堪へる、孰れかといへば上に昇る程都合の好い性格てある、何處となく大きな所があつて、さうして左程盆槍てもない、決斷すべきには決斷する、副統監として伊藤公の下に於ける曾根子には優るてあらう、今日の處兎も角も副統監其人を得たと言はねばならぬ、が今後の事は事實に徴するの外ない、曾根子ももちつと働の仲びさうに想はれたが、病氣の爲とはいへ、何も見るべきものがなかつた、馬鹿か悧巧かとの疑があつたが、結果の上て餘り悧巧てないと言はれても仕方がない。山縣氏も亦希望を屬せられて居るほどの事が無いかも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知れぬ、

寺内統監の下に副統監たるは牧野男が故井上大臣の下に次官であつた樣な狀態である、山縣氏は寺内子の先輩山縣公の子である、して細かい仕事は寺内子の方が出來る、優容迫らずといふ所では山縣氏の方が寺内子よりも上級らしく見えるであらう、牧野男は細かいとの判らぬ方でないが、井上大臣の方がてきぱき捌く事が出來たのである、事務官上りの首領の下に名門の子を備へ付けた所は相ひ似て居る、次官としての牧野男は別段の事もなかつたが、父の後繼者として望を屬せられ、文部大臣となつた時働の伸びさうに待ち設けられたが左樣は行かなかつた、父は言語少く、容易に事を決せぬ、而も一度決すれば飽く迄貫く、何者も之を妨ぐることが出來なんだ、牧野男の言語少く容易に事を決せぬのも斯かるものであらうと察せられた、即ち一度決すれば飽く迄貫く方であるらしかつた、然るに之を事實に見るを得なかつた、山縣氏が鐵國問題の際辭表を懷にして居たのは侮る可からざる所がある、副統監として只位を偸む流と違うであらう、寺内子は愉快な所が無いが、仕事は出來る、韓國經營に就いても、何等か目的を着け、着々實行して行かうとするだろう、山縣氏の父は威望あり、陛下の御信用が厚い、して自らは物の判らぬ方でない、爲すべきことがあれば如何に之を爲すべきかを知る、此父と此子との間に仕事師の寺内があれば、韓國に對して事を爲すに甚だ都合の好い譯である、伊藤公は名望の上に統監たるに不足なく中外共に依賴する有樣であつたが、名望が勝つて居て實際の仕事は左程でなかつた、其點に於て兩山縣に寺内を加へた方が却つて効果の多い樣にも想はれる、長州化の弊が益々現れるにしても締めくゝりがあらう、が實際如何あるべきか、今日保證すべき限りで無い、

韓國は人口千數百萬を備へて居る一の國家である、少くとも一の社會である、其運命を支配するは一筋繩で行けぬ人口三百萬の臺灣でも敏腕の稱ある兒玉子及び後藤男の少からぬ努力を要した、寺内子及び山縣氏

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の韓國經營の任に當るも生ま優さしい事で無い、畢生の努力を要するのである、若し果して成績が好かつたならば、此二人の重んぜらるゝは兒玉後藤の上に出るであらう、して異日山縣氏が公爵を嗣ぎ、山縣公として皇族の次に位する樣になれば、名望は更に大に揚り、官僚系統初め其他の者も其配下に立たうとするかも知れぬ、すると首相と爲り元勳の後繼者と爲るは何の難いこともない、けれども買ひ被られた先例は既に曾根子に在る、甚しく山縣氏に希望を屬する譯に行かぬ、總務長官の選擇の如き、慊らず感ぜられて居る、伊藤公が鶴原氏を總務長官に拔擢したのは、成績の如何は兎も角、人をして刮目せしむる所があつた、今はさうでない、事知るべしと言はれて居るが從來統監府吏員は放蕩に流れ、不品行の有る限りを爲して平然たる有樣であつた、安重根が伊藤公を銃殺し、後我領事館の人に向つて曰ふには、君は眞に公を以て善き人物とするかと、然りと答へた所が、更に曰ふには、予は左樣は思はぬ、若し善き人物なら彼樣に放蕩到らざる無くなる筈がないと、一々品行の末を咎むべきでも無いが、餘りに甚しいのも民を治むるの道でない、特に保護國の民を治むる道でない、埒もない事務一方の事務官を擧げて總務長官にしたのは、どれだけか放蕩の風を改むる先鞭かも知れぬ、それならばそれで差支ない、日本人は左程行狀の惡いものでないといふ事を韓人及び外人に示し得るならば其れも一の必要條件である、が氣障風呂敷でこせつき過ぎるは兎角事務官の弊である、針の先の樣な事を業々しく言ひながら、大局に惑ひ大事を忘るゝは往々見る所である、新に任ぜられ、又任せられんとする人物は如何なものか、先づ之を見なければならぬ、一つだけで判斷するは早きに失するが山縣氏は元勳の子として最も望を屬せられ居る是迄人の望に副ふて來て居る、此先望に背く事なき樣に有りたい、けれども運命は屢次人の豫想に逆ふ、偏に伊三郎氏の努力を希ふ。

△山縣副統監

松井柏軒

山縣伊三郎氏は山縣公の養嗣子で、公百年の後は正さしく公爵たるべき人である、確か故品川子爵夫人の弟で、山縣公爵夫人(亡)の甥に當るやに聞て居る、爲人溫厚ではあるが、何處かに確乎した處もあるらしい、其の管船、地方等の諸局長として、次官として、而して竟に遞信大臣として、到る處甚だしく不評判で無つたのが其の證據であろう

素より今全盛の山縣系統に居て、然かも本家たる公爵の嗣子といふ點から、自然人、殊に同系統の政客間に重んぜられるといふ意味もあろうけれど、然かし凡才庸骨では、所詮局長、次官、大臣として惡名を受けずに居られる譯のもので無かろう

若し帷幕の裏に斬味の宜いものや、善く課り善く斷するものが有て、略々智勇辨力を網羅したなら、氏と雖も巨然として大名を成すとが出來やうと思ふ、氏は其の相貌の示す如く長者の骨相を具へて、自から將に將たる器度がある、殊に山縣系統の總本家たる公爵の嗣子といふ點で、門閥も高いから、多分成功するであろうが、自から一方面に當るとは寧ろ甚だ不得意であろう

副統監と爲てから、有吉氏を總務長官にしたり、宇佐美氏を參與官にしたりしたのは、無論氏の推薦に出たのであろう、有氏宇氏が所謂智勇辯力の幕僚たるに足るや否や、素より知らぬが、斯う思ひ切て、世間の意表外な薦拔を遣るのを看ると、氏も滿更の人物で無いらしい、若し桂侯寺内子や平田男大浦男の輔導忠言を受けて、善く人材を用ゆるに意を配つたならば、他年統監としても相當に成功もしやう、此の成功に基いて前途更に大なる發展も出來やう

若し韓國で失敗したならば、氏の運命も略々決定すると看て宜い、單に他年溫厚な公爵と成濟して、善夫慈父として終るであろう、氏が副統監と爲り、更らに統監たるべき使命を荷ふに至つたのは、氏の一生の運

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

命を決すべき分岐點に立つたので一國務大臣に任ぜられたのとは頗ぶる趣が違ふやうだ、是は山縣公の嗣子として、全盛なる同系統の寵兒として、而して又政界の未知數たる氏に發する世間の疑問を解決すべきものである、氏自身切に心すべきである

澁澤、大倉、豐川などいふ紳商連が、氏を招持すべく申込んだら、氏は平生未だ御馳走に爲たとがないのに今副統監に爲たからとて其の事あるは、聊か妙だといつて刎付けたそうだ、小いさいやうてはあるが、御歴々の紳商如きを眼中に措かぬ處は流石に何處となく大きい、此等が氏の貫目の在る所て。頗ぶる面白い、萬事此の調子て遣て貰ひたいものてある

△予が見たるまゝの山縣氏

中村彌六

山縣氏とは三十年來の親友だから、親友に向つての批評といふ事は絕對に御斷りします、併し折角の御出だから批評といふ事ては無しに、只見たるまゝの氏の平生だけを話すことにしませう。

人柄は大概其家に行つて見れば、座敷の體裁やら器物やら模樣て大凡そに想像の出來るもの、山縣氏の家へ行つて見ると直に亦氏の性格の一部分を知ることが出來る。

氏は一度大臣の位置を占めた、親は元老であり、元帥であり、陸軍大將であり、陛下の御親任最も厚い人である、それに財力も相應に有る、普通の人ならば邸宅の如きも出來る丈の體裁を飾るべきであろうが、氏は左樣てはない、行つて見ると、其一書生として歐羅巴から戻つた時ても、商務局長てあつた時ても、又大臣と爲つた時ても、家の中には更に變りがない。

又子供の教育の仕樣を見ても極めて平民的てある、現に氏の御嬢さんは、氏の位置といひ、又氏の父の勢力といひ、如何樣な富豪の處へても、如何樣な爵位ある人の處へても、婚儀を結ばうと思へば結べるのてある、然るに三井物產會社に居る、其名も今迄聞こえて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

居らぬ人物、實を言へば一三井の手代の處へやつて、それて誠に好い辭を得たといつて平然として居る所を見れば、今の世の富や父兄の權力を嵩に被て肩に風を切る輩とは自ら人物の選を異にして居る事が知れやう。私の友人として氏を尊崇する一點も亦實に此等の處に存するのです。

凡てが極めて平民的て位置が如何などいふことは噯程も前に出さず、何時會つても依然たる伊三郎て居る所が如何にも床しい、此間も私が丁度行つて居つた時に韓國皇帝の勅使が來ると云ふので、其趣を取次の老體の男が氏に告げて、「どちらへ御通ししませう」と氣遣はし相に尋ねるのを、氏は自若たるもので、「どちらと言つた所が、有りつ丈て是丈の家だから今更仕樣もない、此處へ案内せ、自分だけは是てゝ濟まされまい、着物だけても變へねばなるまい」といふ、「御供の人は如何しませう」と訊くと、「供の人?、それは一つ所にも爲るまいから次の室へ。見苦しくない樣に、取散してあるものてもあるなら始末する樣に言ひ附けて」。といつたきり、別段周章てて額や掛物に氣を配つて掛け變へるとか何とか騷ぐ事は少しもせぬ、故態依然として存する處に何と無く懷しい趣がある。

斯ゝる一面に氏は又田園趣味を持つ人て、自然を喜んて、想を塵外に馳せる點などは、實に氏の胸中に綽々たる餘裕の見える處だ、一概に田園趣味といつても、夫の漫に菊を作り朝顏を作り、自ら樂むのみては措かず、それが爲に家を建て客を招いて揚々として誇示するといふ輩ては無く、自ら自分の開墾地へ行つて百姓と伍を爲して耒耡を執り、樂むといふ方てある。眞に名聞を離れて全く自然の寵兒となり、其懷に抱かれる人てある。

氏は大山縣には非常に能く仕へる、從つて自己の主張を餘り世間に述べる樣な事はせぬ。大山縣の有る限りは決して左樣な事はせぬてあらうと思ふ。大概名家の子息などいふものは、親の議論の請賣をして迄威張りたがるものだが、氏はそれどころか、深く自ら抑損して鋒鋩を現はさゞる事を勉めて居る、といふのは大

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山縣の總を全うせしめんことをのみ思つて居るので、何かの事より非難を醸し、累を父に及ぼさんかと恐れて居るからなのだ、斯ういふ點は非常に謹愼である。是れが多少氏の胸に抱負があつても、未だ嘗て世に大に顯れぬ所以であらうと思ふ。要するに自己を抑制する力が非常に强いのである。是て見ると其他日大山縣百歳の後には、今日唯偉大なる體軀を持して漠然と見える氏も、一變して直に一見識を以て世に活動する事となるかとも想はれる。

氏は既に前述の如き人である、其體格の如く大きな人物で細事には局促せぬから、從つて人に任せることは能くやる、事細かには干渉せぬ、一體が一視平等で上に向つても下に對しても何等の懸隔の無い人だから人の和を破る憂はない。それ故今新に副統監として朝鮮に行つても、左右にさへ能く補佐する人があるなら十分に治績は舉がらうと想ふ。それに氏は平生容易に自己の意見を主張せぬ人だが、而かも一度し始むれば徹底せしめぬ限りは後へは引かぬ人である、容易に刀は拔かぬが、拔いた以上は血を見ぬ限り鞘へは收めぬ人である、其證は既に前内閣に於ける阪谷の確執の時にも存する事て、此點亦甚だ人意を强うする、私は友人として氏が滿足出來る丈の成績を舉ぐる事を希望し、又其希望の空しからざる事を確信して居る（談話筆記校閲濟）

△山縣副統監の人物

仲小路廉

一體人物の評論といふ事はなか／＼六つかしいものだ。どうかすると人間は己れの好惡によつて漫りに毀譽褒貶をすることがある。て、私が山縣副統監を褒めるといふと、人或は其好む所に阿ねて無暗に褒めたのだと疑ふかも知れない。然しながら私にはそんな考は毛頭無い。私は只自己の信ずる所を語るのである、世人如何に之を批評するとも、私に於ては其所信を明言するに何等の差支がない。又私の明言した所は斷じて

間違がない積である。

山縣伊三郎君のことについては、私は公私共によく知つて居る。一番久しく接近もし、又親しく交際もした。て話すことはいくらもあるが、極く簡單にいへば此人極めて大樣にして、よく事物の大體を捉むことの出來る人だ。そして其中に極めて細心にして周密なる思慮を包む人だ。嘗て鐵道國有實行の際などにはなかなかいふべからざる困難もあつたが、當時遞信大臣としてよく大體に眼を着け、そして其大局より打算して之を實行するに必要なる手段方法としてはなかなか細密なる思慮を以てした。之は私の親しく目擊したことで、よく注意の行屆く人だと感心したのである。又人に接することも極めて大樣であつて人に長たるべき度量を備へて居る。又情誼に厚く、涙のある人だ。又人を見ること極めて公平で細かしい事を尤め立てをせぬ。殊に其性格に於て最も面白いと思ふことは超然脱然として物に拘泥せず極めて無頓着なやうな狀態もあることである。毀譽褒貶などは全く度外に置いて顧みないこと或時は白鐵の如く、或時は標本の如く、全く人外に逸出した脫然たる風格を備へて居る。此點に見て、世人或は何事にも無頓着を以て臨む人だらうと思ふ向もあるが、又さうでない事もある。政治上の點、其外事務行政上の點については、苟も自分の說を主張したら毅然として動かぬといふ風もある。而かも思想は極めて進步して居る。これは幼少の頃から歐洲に長く居たことも一つの原因であらうが、なかなか西洋の大勢にも通じて居る。此等の事柄は私が長く一所に居つた時分によく見た所で決して間違はない。

今度韓國の副統監になられたのは極めて其所を得たもので、充分其責任を盡されるであらうと信じて居る。

△山縣伊三郎君

一知人

山縣君のことは餘り深くは知らんよ。內務省に居て一所になつたことはあるが、立入つて評する程の交際

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はないよ。兎に角あの人は小才子てはない。コセ〳〵しない。忌味がなくて、サッパリして居る。逢つて心持のよい人だ。あの通り身體も大きいし大飯も食ふから何となくドッシリして居る。小悧巧ではないが腹はある。又大事に臨めば腰も据るだらう。小事には拘泥しないが、人に擔がれるやうな馬鹿てはない。又やらうと思へば何てもやるし、厭なら誰が何といつたつてやらぬといふ所がある。今度韓國に行つたつて寺内君のいふ事を一々聽くといふ譯には行くまいと思ふ。あの人が今日の地位まて上つて行つたのは親父のお蔭ばかりてはない。矢張りあの人に備はつた見識だ。どつちかといへば人に長となつてやるやうに出來た人て、朝鮮にはあゝいふ穩やかな人は極くよからうと思ふ。少しも邊幅を飾らないし、又少しも私がない。極めて公平だ。然しそれ等の美點は總て正直といふ所から出て居るやうに私は見て居た。兎に角長州系では最も忌味の少い心持のよい人だ。内務省の吉原君はなか〳〵六つかしい人て、容易に深く人と交らない人だ。其吉原君が山縣君と深く交際して褒めて居る所を見れば、山縣君は人物に相違ない。追々總理大臣にてもなるかといふのか？、そんな事を知るもんか。人各々天分ありてあの人にさういふエライ天分あるかどうか私は知らんよ。

△新副統監について

石河幹明

私は山縣伊三郎氏をよく知らないから人物評は出來ない。然し山縣氏が副統監になつたことについては一寸思つて居ることを話してもよい。

今度統監が更迭して寺内子が陸相を以て統監を兼任し、山縣氏は副統監になつたのであるが、何故に副統監といふものを置いたのであるか。先きに伊藤公が統監となつた時に曾禰子は副統監となつた。曾禰子が統監となつた時には副統監といふものがなかつた。然るに今度寺内子が統監となつたら副統監を置いた。一體

どうする積であらう。曾禰子が病氣て統監が勤まらぬといふなら統監を更迭すれば、それて濟むのである。

朝鮮のことについては大問題が眼の前に控へて居る。即ち朝鮮合併——私は合邦といはずして特に合併といふ——此合併は是非やらなくちやなるまい。此問題か決着すれば、何れ總督府とか都督府とかを置くてあらうが、さうすれば、今日の統監は其都督府か總督府の長官になるといふ理屈になる。然しそれは實際誰がやるてあらうか。寺内子がなれば申分がないが、寺内子が兼任て居るのは思ふに朝鮮の事を専一にやらぬ爲めてあらうと思ふ。所て已に合併をやらなければならぬことが分つて居るのに、何故今日の如く兼任の統監と副統監を置くのか、私には一寸解されぬ。寺内子の外に適任者がないとすれば寺内子を専任にすればよろしい。別に副統監を置く必要がない。寺内子がどうしても内政の必要て、韓國専任が出來ぬ事情があるならば、副統監を置かずに山縣氏を統監にしたらよからうと思ふ。何てもない話だ。或は山縣氏は經歷も足らず又貫目がないといふ人があるかも知れぬ。けれどもそんな事は構はない。山縣氏を統監にすべきである。已に合併の時機に近いたにも拘らず、今日の如く妙なことをして居るのは私には解せない事である。

△山縣副統監

池邊吉太郎

私は山縣伊三郎といふ人をよく知らない。顔はあの人だといふ事を知つて居る。然し親しく交際つた事はない。聞いて居る所ていへば極く凡帳面の人だらうと思ふ。比較を取つていへば井上勝之助さんのやうな人らしく思はれる。或外交家が井勝さんを評していふには「あの人は受取つた丈けの訓令を少しも洩らすことなく、又少しも餘計の事を加ふることなく、其まゝ向ふに徹底するやうに任地の政府に申込む。又それについて向ふて答へたことを少しの誤解もなく又餘計に作爲を加へずに有りの儘に傳へる。さういふ外交家が電信

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

電話の開けた世の中には最も必要だとビスマルクが評したが、井上勝之助さんはそれに嵌つた人だ」と評した事がある。それは或意味からいへば無能といふ事になるてせう。然し又或意味からいへばこれ程六つかしい事がないともいへるだらうと思ふ。といふのは自分といふものがない、我といふものがない。長官といふものが上にある、それと協同一致してといふよりは寧ろ其れに服從してやるといふ事になる。決して容易な事てはない。小山縣氏も大使になれば同じやうな具合の人と思ふ。副統監としては多分統監の意志を殆んど統監と同じ樣に行ふてせう。若し統監がなくてあの人を統監としたら、日本政府が朝鮮を斯うしやうと思ふ通りにやるのてせう。さうすることについては、相當の用意もある人らしいし、又統監府といふのは隨分大きな機關だが、其機關〳〵の要處〳〵に適當な人を配置するやうな事にも餘りヌカル人でなさゝうである。遞信大臣てあつた時の事はまアいはゞ氣の毒な事になり行つたやうだ。隨分元老から叱られたてせう。尤も叱られもしたが、褒められもしたてせう。當時の事件は大藏大臣の阪谷との喧嘩といふよりはいはゞ元老との喧嘩だ。桂も無論叱つた方だ。尤も叱つたばかりてなく褒めもしたてせう。井上も同樣、松方も同樣、詰る所其時元老擧つて――桂が主となつて――今のやうな財政計畫を節減して財政の本を整理しなくてはならぬといふ事を西園寺内閣に提議して居た。て遞信省の豫算が大き過ぎる。といふ事を十月の末になつてから八釜しく言ひ出した。處が其時は鐵道國有の豫算が決議になつた時だ。然しどちらといへば、山縣は其案は固執しなかつた方てありませう。固執せぬが、已に內閣て決まつたものてあるし、二度の調査もやつたが阪谷も同意し、又寺內も同意した。それをとう〳〵やつてはいけないといふ方て押しつぶした。其れて山縣も據所なく阪谷と一所に辭表を出したのみならず寺內も出した。西園寺も出した。山縣の其時の擧動が素直て尋常てあつたといふべきてある。叱られたといふのは、さういふ豫算を作るといふのは不心得てあるといふ事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てあらうし、褒られたといふのは其やり方の素直な所てあらうと思ふ。西園寺さんも其時の事は多分わるくは見て居ないんてせう。若しか西園寺内閣が又出來るとしても、あの人が其邊りにブラ〳〵してゐたら又閣員にするかも知れない。が今度朝鮮に行つた以上、あゝいふ性質の人だから暫らく朝鮮から動かないてせう丸て兒玉などゝいふ人とは反對てあゝいふ人が存外成功するかも知れないし、成功したら面白いと思つて居る。

△山縣副統監

伯爵　大隈重信

山縣は能く知らぬ、が今度朝鮮へ行くのは頗る適任だと思ふ。何は扨て置いて先づ其謹嚴な點が宜い、顏の好いのは七難隱すといふが、其通り今の處朝鮮へ行くには他の點よりも一番謹嚴の人が欲しい。

今度の統監府は下に此人が居て上に寺内が居る、それ故威信主義て一致して大に治績を擧げる事と想ふ、寺内なども陸軍大臣の兼任などをよして專念に朝鮮の爲に盡すが宜い、そして熱心にやりさへすれば乾度甘く行く。何ても彼樣な半開國の民を率ゐるには簡易生活が肝要だ、朝鮮へ行く官吏は隨分澤山な俸給を貰ふが彼樣に必要な譯はない、でも何に要るかと實情を聞いて見ると、朝鮮は實に宴會の多い處て殆んど毎日の樣にある、それて交際費に皆落つるといふ、實に下らぬ事てある、それに其樣な事て酒色に近づくと、習何時しか性を爲して今度は一騎打ても出駈ける樣になる今迄の統監府の役人どもは皆放縱て勝手な眞似をして居たもの、そして何か有る時には儼然とユニフヲルムを着込んて肩て風を切つて民衆の前に現れる、其樣な事て威信を保たうとするが畢竟は何にもならぬ。今日の要は生活を簡易にし官紀を嚴肅にしてそれて民に臨むに在る、

金が無くて出來ぬとは常に言ふ處だが、右樣の弊竇に注意すれば其樣に金を掛けなくて出來る、政友會て

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は積極的方針などといふ、が積極的方針といふことは動もすれば浪費といふ事に陷る。金をのみ掛けたから宜いといふものではない、金を少く遣つても効果が多く擧れば宜い、金を多く遣つても効果が少く擧つては惡い、要は効果の多少に在るので費す金の多寡には存せぬ。此心得てやれば朝鮮などには其様に金を掛けなくても濟むと思ふ。

伊藤公の統監府?、あれは宛然酒呑童子の巢窟だつた、痛飲淋漓、聲色にも近づけば集つては賭博もするといつた様な體裁、內外の評判の善からう筈は無く、少くも民に臨むには此態度ではいかぬ、それだから今度山縣氏の様な謹嚴な人が行つて其風を一掃したならば、それのみでも多大の効果が有らうと想ふ。最早や重だつ役人の交迭があり、舊いのは地方に廻して知事にするとか何とかいふ様な處置をして居るから後は上の欲する處下之に從ふだ、自ら肅淸されて行かうと想ふ。

親爺の大山縣は背こそ高いが痩せ細つた人、體量は十四五貫目そこいらであらう。何處から見ても神經質に見えてならぬが、子息の小山縣は尨然たる偉大の體格、優に二十四五貫目も有らうと見える、堂々たるものだ、外觀の上からは何となく大きく見えるから朝鮮へなどいつて押出すには宜い、寺內も陸軍出身で極めて紀律を尊ぶ男、紀律といふと壓制の分子のあるらしく思ふが常だが、紀律はデシプリンである、壓制とは違う。デシプリンは必要な事である、兎に角此二人で統監府を率ゐることは極めて宜いと思ふ。我輩は今の處適任者を得たと信じて居る。

△山縣副統監

田川大吉郎

山縣副統監は加藤弘之博士の女婿にあたる。加藤弘之博士の緣者に私の緣者がある。從て私は山縣副統監の家の內事を折々聞いた事がある。之を褒むればさういふ近しい所に阿ねる嫌があるだらう。之を貶せばさ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ういふ近しい家から惡聲を出したとして其人に迷惑を及ぼす恐がある。故に私は副統監の性行に對して深き評論を試みぬ。

總務長官有吉氏は私の友人である。委しく其思想性格を知つて居るとはいへぬが、今日迄彼が順よく累進し來つた閲歷に對しては深き喜と淺からぬ興味を持つて居た。今日の異數の陞進に對しても私は中心より喜を表する一人であるが故に、是亦今日に於ては多言を謹みたい。

副統監と新總務長官との閲歷に照して私は些か物足らなく感ずる所は、兩人の經歷が餘りに順に過ぎて居ることである。但し副統監の今日までには多少の波瀾曲折があつたらしい。副統監の閲歷は有吉氏の閲歷程單調でない。そして相當の年をとつて居るから其間世故に馴れた所もあらうが、世間多くの官僚に比ぶれば順調の人である。それで社會の下層民の生活狀態などに對しては知る所淺いのみならず恐らくは其想像の及ばない所だらうと思ふ。朝鮮人の生活狀態は日本人以下である。日本人の貧しいものよりも、普通の朝鮮人の生活狀態は劣る。其極めて貧しいもの丶生活狀態は殆んど言語道斷である。此間に生活するもの丶境遇思想感情は恐らく兩君の推度し得ないものであらう。此點を兩君の爲めに物足らなく思ふ。

副統監或は總務長官に、朝鮮の新らしい局面に對する經綸の才幹あるや否やを世間で問題にして居るが、私は世間の議論の立場から離れて、平生朝鮮に於ける日本の代表者は、埃及に於ける英國の代表者の如く一個の總領事にて足れりと思ふ。日本が此場合に公爵を充て、子爵を充て、大臣を充て、大將を充てることを仰山過ぎると思ふ。道理を思はぬ仕打と考へる。從て私の理想とする所に照して考ふれば、兩君の力を必ずしも不足と思はない。又兩君が順調に育つた人として何となく上品な人格を養成して居る。此點の如きは從來朝鮮に渡つた日本人の下卑惡辣なものに對して一段のコントラストをなし、從て朝鮮人を一段信頼せしむるに足るだらうと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然し朝鮮の將來が如何に變遷するてあらうかは深き疑てある。一部の論者は合邦の事定る近きにあり、合邦の事決すれば朝鮮の運命そこに決すと考へて居る。それもさうてあらう。けれども統監及び總務長官として考ふべきことは、國と國との關係が、斯く一段落を告げたからそれて我事足れりと思うてはならぬ。其關係の改まつた後如何にすべきかは一段の考慮を要する其爲めに兩君に恐と注意とを抱く。局外者は之に疑問を置かざるを得ぬ。

思ふに寺内子の統監たるは所謂合邦計畫の爲めてあらう。合邦決行の結果萬一の變に備へん爲めに軍隊の出動を命令する最適者を選んだてあらう。それには今日の場合寺内子に超したものはない。此意味に於て現政府と寺内子の頭腦は所謂武斷思想てある。副統監は山縣公の嗣子てあるに拘らず、其頭腦は武斷てはあるまい。有吉氏は勿論武斷派てない。此兩君が武斷なる寺内子の下に、平和政治を行はふとするものてあらう。そこて如何にして平和思想を武斷思想に調和さして行くか。武斷派の同意を得た平和政治を如何なる手段を以てやるか。これはなか〱容易な事てなからう。

私の考ては合邦は不利益てある。私は今日の合邦計畫に反對する。飽くまても總領事制度の方針を抱いて靜かに焦らず朝鮮人民と日本人民との經濟的結合を計る。日本の朝鮮に對する關係は當分の間それより外にないと信ずる。私の見る所ては朝鮮合邦は朝鮮對日本の關係をいよ〱複雜ならしめ又困難ならしむるものだ。合邦の結果として陸軍擴張の實行せらるゝ、それも避け難きことてあらう。本來陸軍當局者は日露戰爭の後、我軍隊を二十五師團に增加したい計畫を立てたのてある。財政上其餘力なしとの理由によりて今日の程度に止めて居る。今日若し海軍擴張を行ふの餘力あるとならば、當時の計畫なりし二十五師團の擴張も是非行ひたいとは當然の結果てある。況んや朝鮮を合邦し、其人民に不穩の狀態あり、其隣境に不測の憂あり之に備ふる爲めには二十五師團に擴張すること勢の防ぐべからざる所だと主張し來るは止むを得ざることて

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

團說にあらう。然し議會に於ける政黨は其中軍備擴張論者なきにあらざるも其人々すら進んで廿五師團說に同意するや否や疑を免れない。況んや今日動もすれば獨り今日の師團すら多きに過ぐると唱ふる人があるさういふ人は絕對に贊成せぬさうすれば朝鮮合倂は朝鮮に種々なる波瀾を起す恐あるのみならず內國に於ても政治上の危岩に向て、向ふ見ずに船を進むる嫌がある。

此等の形勢の中一半は副統監等の荷ふべき運命てあらう。一半は必らずしも副統監等の運命てない。副統監等の之を負ふと負はざるとに拘らず、副統監等の現位置に從て此等の波瀾變化が伴ひ來るを恐れる。私は副統監等の行動、朝鮮の將來に深き興味を持て居る。

今日の政治家中て、對朝鮮の關係に私のやうな考を抱いて居る人は極めて少い。未だ名を知られざる政治家、有志家、讀書家の中には此考に同意する人は少くないと思つてゐる。已に名を成した政治家て此點に稍々同じ考を持つて居る人は竹越與三郎氏一人てないかと思ふ。竹越氏の考は察する所政友會中に重きを置かれて居ない。私の意見も國民黨中に重んぜらるゝの日はあるまい。私は國民黨には機會あらば此說を說いて見たいとは思つて居るけれども、それも私は此意見を抱いて居ることを明かにして又議會によつて運動するの端を求むるに止まつて、是非吾一人の力を盡して國民黨の意見を玆に歸一して貰ひたいとは考へてゐない。竹越氏の現在の位置斯くの如く、私の現在の考斯くの如しとすれば、朝鮮の合邦を不利益なりとする說は、到底政治上の實際問題とまでに進まないかも知れない。日韓合邦は殆んど朝野に一人の反對なく日本全國民の希望なるが如き形を以て形成せらるゝてあらう。玆に至つて私は竹越氏と共に日本の政治家に殖民に關する近世的思想の缺けて居るとを悲むのてある。私は自分の說が此際に行はれないとを遺憾とするに止らず、殖民に關する近世思想の意義が朝鮮合邦問題について研究せらるゝに至らんことを望む。副統監等は其に對してよかれあしかれ一大資料を供給する當の責任者てある。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夏十題

△夏の衛生

醫學博士　二木謙三

夏は外氣が暖かくなるから衣服は自然に薄くなる。然しながら餘りに薄過ぎるといふことはよくない。少しは厚目といふ方がよろしい。殊に夜分は小供などは身體をあらはさぬやうに寐卷を着せて寐かした方がよい。何故かといへば、夏は腎臓の働が休んで、皮膚の働きが盛んになり總ての新陳代謝は大部分は皮膚によつて行はれる。此場合に身體を冷やし過ぎると皮膚の血行が惡くなつて新陳代謝がとれなくなる。夫れが爲めに翌くる日は身體がだるくなる。汗は成るべく出る方がよい。汗を退かせる總ての事柄はよくない。だからして湯に入るのはよろしいが、冷氣を貪るが爲めに冷たい水に入るのはよろしくない。然し水浴又は冷水摩擦の習慣は此時から作るべきである。

食物は野菜とか菓物とかは此期の食物に適する。(但し過食してはいけない)。米よりは麥がよろしい。餘り大食してはいけない寧ろ少食を尊ぶ。清水は飲んでもよろしい。然し多量に飲むことはよろしくない。一般に清水の得難き場合には湯冷ましを用ふべきである。氷を飲むことはいけない。即ち皮膚の汗を退かせる害をなし、又胃酸の分泌が止んで胃の中にある黴菌を殺す力や消化の力が衰へる。又同時に胃の中の食物を消化しないまゝで早く腸に落す。て腸の方では加答兒を起す。それと共に惡るい黴菌が腸に落ちる。西瓜、心太を多量に食するのも氷を飲むと同樣にわるい。さしみ、或

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は生豆腐等は往々危險を持ち來す。湯は飲んでもよろしい。

住居は内よりは成るべく外に居る方がよろしい。然しながら日光に直射さるる爲めによく日射病等を起すから、直射日光は無論帽子、婦人ならば洋傘等で防ぐべきだが、最もよいのは樹木の下に居ることである。然し時々は暑い所に出て暑さに耐ゆることを學ぶべきである。山に登ること、海水浴をなすことと總てよろしい。但し海水浴には水の極く冷たい時及び日中の極く暑い間はよろしくない、殊に少年者及び壯年者には山野を跋渉することを勸むる。

身體は夏になると一般にだるくなつて呼吸は淺くなるもの故、常に多少の元氣を出して之に打勝つといふ態度が必要である。從て發聲、例へば詩吟、謠などは勸めてやるがよろしい。呼吸は成るべく腹式でやるがよろしい。運動は思ひ切て充分にする方がよい。晝寐は老人或は虚弱者には少しはよろしいが、若い人は絶對に謹むべきである。殊に風通しのよい部屋で肌を出して寐るのはよろしくない。夜は早く寐て朝は早く起きるべき時季である。勉強は朝と晩とに適して居る。晝は成るべく運動して汗を澤山に出すやうにするのが夏の衞生である。

△夏の讀物

幸田露伴

夏の讀物といつても、讀書は季節によつて必らず變ると限つた者でもないから一寸お話するに困る。若し強いて夏といふことと、讀書といふ事と關聯さして考へて見れば、夏は人の精神もいくらか秋や冬とは違ふから、讀物などもいくらか淡泊とか簡單とかいふやうなものが適する。然し食物とか娯樂とかいふものと違ひ外の季節との間に截然たる區分があるといふ譯ではない。夏と雖も複雜な、深奧な、或は幽遠な感情や理屈を書いたものが、いかぬといふ理由はない。只夏はいくらか休暇の時節となつてゐるから、自然多少の遊

ひは出て來ませう。それで强いて夏に調和する讀物といへば矢張り淡泊簡單な物と答へてよからうと思ふ。例へば詩ていつても長編よりも短かい分量の少い、よい味のものがよい、味からいつても濃厚なものよりも寧ろ清新といつたやうなものがよい。水滸傳を夏に讀んだ所で何も可笑しいことはないが、夫れよりも洒落れた短いものでも讀んだ方がよいといふ理屈である。歌とか詩とか俳句とか、さういふやうなものは一寸見た眼で、直ぐ心の中にとつて全體を味ふによいから、さういふものが夏の讀物としてよさゝうに思ふ。さういふと餘り倦怠して怠惰的になるやうですけれども矢張り自然炎熱の時はさういふやうになり易い。若し强いてやつたら多くの書籍を炎熱性と淸涼性とに分つことが出來ませう。例へば宗教家の文學などは、其主張に於ては大抵熱烈なるものであるが、其風致に於て自ら熱烈性のものと淸涼性のものとある。而して夏に於ては矢張り其淸涼性のものが適するやうに思はれる。詩は大概夏日的讀物といつてもよいが、其中には矢張り熱烈にして强いものもあり、瀟洒にして淡いものもある。陶淵明、韋蘇州、王摩詰などの詩は皆夏日的であるが、岑参とか高適とか杜甫とかの詩は寧ろ夏日的でない。又兩方を併せて居る人もある。東坡の如き或ものは夏日的で或ものは冬日的である。日本の文學などの中にも徳川末期などになると、暑くるしいものが多い。徳川も最初の方などには却て涼しげなものもある。時代からいつても恐ろしく暑くるしい時代がある。例へば足利時代の如きはそれだ。然しさういふ時には却て淸涼味の文學があるやうに思ふ。例へば徒然草趣味のものは極く夏に適したものだ。ずつと昔に遡つては伊勢物語などが極く夏日的だし、枕草紙なども少し量は多過ぎるが矢張り夏日的でよい。俳諧は槪して夏日的の者だが元祿期の者には殊に夏日的のものが量が多い、芭蕉、丈草などのものは最も淸涼の氣に富んで居る。歌は短かい所はよいが、槪してなまぬるい感じのものが多いから、夏の凉風的といふよりは春の朧夜的てもある。従て夏の讀物の勝れたものとはいへない、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小説に至ては夏の日を讀み暮らすといふ程のものは殆んど見當らない。多くは割合に倦みを來たす。殊に馬琴の小説などは夏の日永に讀むよりは秋の夜永に讀む方がよいやうな感じがする。禪僧の偈の類などは多く夏日的てある。寒山詩なども秋の淋しい時に見るもよいが、夏の暑い時に讀んでもよい。若し非常に趣味に富んだ短かいものを集めたものがあれば、夫れこそ本當の夏の讀物てあらうが、惜しいかなさういふものは見當らない。冗長蕪雜なものは、何時てもわるいに相違ないが、夏には殊に大禁物てある。支那には叢書類に夏の讀物として勝れたものが少くない。快書五十種とか七種爭奇とかいふものは何れも洒落れた面白い物てある。

又文學てなくても地理の本などは夏日の讀物によい。支那の名山勝槩記などは名山に關する文章を集めたもので夏に讀んで面白い。西洋にもアルプス山などに關した文學を一冊に集めたものがあるさうてある。日本ても名山大川などに關するものを集めたらよからうと思ふ。漢學者の作つた紀行文などは多く土語を記さず、地名なども漢字の宛字て書いたりして讀む人に迷惑を與ふることが多いが、安積艮齋の遊豆記勝などは和學者のものよりは夏讀んで面白い。支那の水經註などは左傳國語と共に柳々州の種本となつたもので、柳々州の水に關する形容などは多く此水經註から出て居るが、水の文學として上乘なるもので、頗る夏の讀物に適して居ると思ふ。別に纏つた話でないから、よいやうに書いて置いて下さい。

△夏の旅行

田山花袋

私は夏の旅行は嫌いだ。炎天を草鞋穿きてテク〳〵歩くなど眞平御免だ。汗はダク〳〵流れるし、夜は蚊がゐるし、夏の旅行は寧ろ苦痛が多い。それに海水浴場でも溫泉場でも避暑客が多くて閉口する。旅屋についても夏はどうも旅の面白味を充分に味はふことが出來にくい。それよりも却て市中に居て町の灯でも見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てブラ〳〵歩いた方がよいやうな氣がする。一體私は秋が好きて、九月の秋の雨の霽つた十月の月、此頃は最も私の好きな時て、夏は嫌だし夏の旅行は殊に嫌ひだ。

行くならば海がよいか山がよいか?、私は矢張り山の方がよいと思ふ。私ても若い頃は五月雨の晴れた眞蒼な空ても見ると無暗に飛び出したくなつたもので、登山した山の數も十や十五はある。然し今考へて見ると登山は苦しい。どうもずつとしてゐた方が益しだ樣に思ふ。

若し旅行するならどこがよい? どうも夏旅行してよいといふ所は見つからない。私も此頃脚氣を治す爲めにどこか面白い所へ行きたいといろ〳〵考へてゐるがどうもこれぞといふ處がないので困つて居る。人は輕井澤などをよいといふが私はどうも感心しない。湯河原? 湯河原などは詰らん。獨歩君などの褒めたのはあの人は餘り旅行などをしないからさ。どうも別に話すこともないから此れ位て御免蒙らう。

△夏の調味

齋藤鹿山

△ひやりとした物▽

冬は火のはた夏は川の端、何と云つても暑い時には水の事。

梅雨上りのヂリ〳〵と來る暑さに、いためつけられて、蟬よりも苦しさうな息をつかされる日ざしも西へと傾けば、さすがに何處からか涼いやうな風が吹込んて萎れた庭の草の葉が活を入れられたやうに戰ぐところへ水を打ち、自分も行水をして、聊か糊のこは目な浴衣に着替へて先づ椽鼻に臨む、是より晩餐の段取りとなると、膳の上には必ず何か水物の冷イやりとした物がなければ治らぬ。

△齒牙香▽

蛋白質が何程、脂肪が何程、澱粉が何程と一々藥局式に盛り出された日には、體はそれて養はれて行くものに相違ないとして處て、それは食物だか肥料だか分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らず、着物は體溫を保護するに足ればよいとて、大國呂敷の眞ン中へ穴を明けて頭を突き出したやうな理窟で、根ッから趣味といふことを棚に擧げて了つた話であるから、夏ならば夏のやうに何と無く涼しさうな趣味に食物の調理方を活なさなければなるまい、早い話が、胡瓜の皮を剝て瓤を去つて、よき程に切つて、淸冷な水に入れた水瓜を支那流に「齒牙香」といへば何となく涼しさうに思へる。

△勢ひ立ちたる葉蔭に紺瑠璃の卵▽

夏の食物として何となく涼しさうなものは瓜と茄子であらうと思ふ、別けても茄子は食べぬ先から旣に早や景氣のよいものだ、水晶を細末にして振かけたやうな夜の間の露を一杯に受けて、凜とばかり勢ひ立ちたる葉蔭に、紺瑠璃の漆を塗つた卵のやうなのが、露に活々して生つた姿などは、見るからに眼が覺めるやうな好い氣持がする。

△英一蝶と新茄子の漬物▽

去る大名衆が石屋に大石燈籠を注文して、愈々出來上りたる時、此代金二百兩を高いから負けろ、イヤ負け申す事は出來ませぬ、負けるとが罷成らぬとあらば引取り遣はさぬが苦しう無いか、御大名樣とも有らう者が一旦注文遊ばした物を高いから引取られぬとありやア差上げ申しますめエ、ヘイ江ッ子で御ぜいやすと此事を聽いた浮世繪師の英一蝶、ムラ〳〵と癪に障つて、二百兩金を工面し、右の石屋より其燈籠を引受け、二坪にも足りない自宅の庭に運ばせて、其所いら一面に水を打つて火袋に灯を入れ、一粒幾らといふ走り物の新茄子を糠漬にしたので、椽鼻で劍菱か何かを傾け是れで溜飲が落着いたなどは、明治の風俗畫には金の草鞋で探しても無い圖、何もかもさび〳〵する涼い話である。

△鉢植の香の物▽

今は伊勢平であるが、昔は平淸と云つて富岡八幡前で、山谷の八百善と桔抗する程鳴らした料理屋、其盛んであつた頃、此家で自慢の趣向の茄子漬といふのは、抑贅澤を乘越し馬鹿々々しい程、それは話であるから實際有つたか無かつたかは保證もし兼ねるが、只昔の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

噂を今の噂として傳へる分の事、そこで何か馬鹿々々しいかと云ふと、鉢植にして生らせた茄子を枝に着けた儘に一つ一つ少さな糠味噌瓶に入れ漬けて置いたものを、洗つて鉢の儘で出したといふ事、如何に物數寄でも斯うまでなつては、二の次には金魚の刺身などと言出し兼ねもしまいかと物凄い次第であるが、それにしても其趣向だけは涼しいらしいでは無いか。

△熱くて涼しいもの▽

蓮、河骨等水に寄る草花の涼く見えるもの同樣で、料理も鱸の洗ひ、鮑の水貝等は言ふまでも無い夏向のやり方であるが、妙なことには熱いものの極端として置く火も用ひどころによつては、たとへば兩國の空天に、闇を辟ざく爆聲と共に流星、星下りと閃めく花火などは、火とは云ひ條涼いもの。又十分に水を打つた庭の石燈籠に入れた灯は何となく涼意の動くものである、又水に落つる船の篝火、綠深き木立の中の瓦斯の光、夜更の電車の明りが御濠の水に映つるなど、矢張り涼いものの中へ入れることの出來るものと云つたところで火は食物にはならないけれども火を用ふる熱い料理でも、茄子の鴫燒などは如何にも夏らしき食物であるらしく思はる、勿論是は寒中に出來ることでないから、習慣で左樣に思はれる理窟でもあらうけれども、そんな議論は如何でも構はぬ、兎に角夏らしいものである、或人は名を假りた鴫は水に寄る鳥であるから、名が涼しく聞えるのだらうといつた、それにしても茄子を燒いて味噌をつけたものを鴫燒きとは可笑しいと思つたらば。昔は鴫壺燒とて本當に鴫の肉を用ひたものださうだ、

「しぎ壺の事、漬茄子の中をくりて、鴫の身を作り入るべし、柿の葉をふたにしてからぐることあり、わらのすべにてからぐるなり石堝に酒を入れ煮るべし、(以下畧) かはらげの上にあるは漬茄子なり、柿の葉二枚蓋にしたるなり、蓋の上に鴫の下嘴をさしたり云々」

などと武家調味故實に書いてある、「瓦礫雜考」に今の茄子の鴫燒といふものは、茄子壺燒といふことより誤

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れるなるべし、とあるから、後世壺の字を省き、單其製法をも改良か改惡か知らぬが、兎に角仕方が變つたものと見て差支がない。

△つんぼやき▽

鳴壺焼の總て今度は榮螺の壺焼が出る、是も熱いものだが、其の下物として惜くはないものであらう、榮螺を焼いて拔き出し、よく洗つて適宜に庖刀し、本の殼に入れ味淋、醬油などにて味をつけて又火にかけて之へ榮螺の肉と共に銀杏、蒲焼の小切りなどを入れて賣るのが小料理屋などてする仕方であるが、壺焼も斯うなつては最早壺焼の壺焼たる面白味がない、けれども、向島の土堤や靖國神社の境内に葭簀張りのそれと來ては風流も極端になつて、爺さんの鼻涕や、婆アさんの眼脂などが想ひやられる、只其中位を取つて、奇麗事てそして拵へ過ぎないところか所謂オツなのであらう。餘計なことだが、九段には聾老爺が壺焼の店を張つて居る、是ては宜しく「つんぼやき」と改稱すべしなどと無駄口を云つた事もあつたが、此爺さん今も健在だと云ふこと、お目出度い次第だ。

△鹿兒島式の冷索麪▽

冷たい物としての心太、水飯、冷し汁、冷麥等は、俳諧の季物にして句作の題にした方は本物よりは餘程うまさうである、殊に養生家の眼から見たら、水飯など折角の糊氣を洗ひ流して殘骸同然の滓斗り食ふやうな次第て、消化機から云ふと通り一扁のお客樣に過ぎない、冷し汁、心太なども差詰め衞生問題であるが、冷麥斗りは自分が好物の故斗りてない、慥かに滿更捨難いものに屬する、索麪などを冷して食べる「したぢ」は極上等の生醬油て藥味は青柚子を山葵おろしにておろしたるものを用ふるに限る。且贅澤のやうてはあるが一杯毎に醬油を更めなければ水臭くなる、是は鹿兒島式だと或人が云つて居つたが其邊はよく判らないが、蕎麥屋流のしたぢては甚だ妙てない。

△夏の色彩

中村不折

日常我々の感じて居ることは、所謂造化の妙用ともいふべきことで、夏と冬とによつて色の變化することである。自然の草木とか山とか地面とかいふやうなものは夏は寒色が多い。そして冬は其反對に熱色が多い。夏の方は見て涼しいといふ感じを起さす色が多い。夏には草木の葉が生え繁つて、緑の色が最も多く眼に映る夏冬には其緑がなくなつて、其れに代つて樺色の如きものが多くなる。樺色といふやうな色を見ると、非常に暖かな感じが起る。若し造化が今日と反對の色を夏と冬とに與へたならば、隨分苦しい感じを與へるだらうと思ふ。即ち夏には樺色の如き熱色が多く、冬には緑の如き寒色が多いとしたならば、夏も冬も一層其苦痛を増したてあらうと思ふ。今日の如く夏は緑多くして涼しい感を與へ、冬は樺色多くして温かな感を與へて居るのは全く造化の妙用といふの外はない。

吾々繪を書く方ていふと秋頃から春の初め頃までが一番面白い時季て、夏は餘り面白くない時季だ。といふのは繪は熱色の多い方が面白く見られ、寒色の多い方は引立たないからてある。人の好みも夏はどうしても水色のやうな、緑色のやうな涼しげなものを特に選ぶ。

それから熱色寒色の外に冬は一體密閉されたやうな色が多くて、夏は明朗な色が多い。土地でも兩極に至るに從て陰欝な色が多く、赤道に近くに從て明るい色が多い。空の色でも海の色でも夏と冬とによつて皆明快となり或は陰欝となる。

△夏の南國

竹越與三郎

凡そ旅行は其土地の特徵が最もよく顯はるゝ時季を選んて旅行するのが一番愉快てあると思ふ。て露西亞に行かんと欲すれば冬を可なりとし、熱帶に行かんと欲すれば夏を可なりとする。幸にして私は昨年の夏、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蘭領諸島佛領印度支那より雲南まで南國一帶を旅行して、夏の熱帶の風光を充分に觀賞することを得た。一言にしていへば夏の熱帶はグローリアスである。

朝に起き出てゝ窓を開けば、露點々として芭蕉の葉上に滴り、朝の光之に映じて其美觀いふばかりない。僅かに一枝の芭蕉の葉すら猶且つ然り、彼の安南より雲南に入る途中に於ては紅河の左右數町の間悉く芭蕉にして、億萬の芭蕉皆朝露を享け、太陽の光之に宿りて人目を眩するの壯麗、只グローリアスといふより外はないのである。

又晝になれば、厚い光澤のある椰子の葉に中天に上れる太陽の光が反射し、實に熱烈なる自然の力を發揮する。如何に身は三層樓上に在つて、下に溪流の流るゝありと雖も、此椰子の葉に太陽の反射するのを見ると、如何にも自然の力の偉大なるを感ずる。

扨夜となれば、熱帶地方の樂は殆んど夜にあるだろうと思ふ。溫帶などに於ては家は明りを取り暖氣をとる爲めに作つたものだが、熱帶地方に於ては、家は日光を遮る爲めに作つたやうな感があつて、家は成るべく厚く、高く、暗くする。夜は即ち自然の作つた熱帶の理想の家ともいふべきもので、靜かにして風なく響なくドンヨリとして居る。騷ぐにはよくないが、靜かに語るには趣がある。

更らに面白さは熱帶の海の明方と夜て、夜、船を河若くは海に浮べるに、熱帶の海は多く風少くして波なく、大海原を行くも恰かも池や沼を走ると異ならぬ、船の足、水を切て小波を起し、其小波の響は一種の催眠歌の如く、人を夢現の境に誘つて油然たる詩情を起さしむる。

熱帶地方は素より暑いに違ひないが、大抵午後には急雨淋漓として來り、燬くが如き炎熱を洗ひ去つて、ホッと蘇生するの思あらしむる。そして其涼しさは午後六時頃まで空中に微かに殘つて居る。

熱帶の夏は徹頭徹尾グローリアスで自然の力が極めて旺盛偉大である。是に於て人の力若し偉大にして此偉大なる自然の力を利用すれば極めて面白いと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

只今迄の多くの人民は自然の力に負けて來たのである。今後之に打勝つべき人民が行けば餘程面白い事が出來ることを疑はない。

△夏の伯林

巖谷小波

僕の獨逸に行つたのは彼是十年程も前だから餘り新らしい話もないが、折角のお尋てすから思ひついた事を二つ三つ喋舌つて見ませう。

僕は伯林には二夏居ました。伯林は夏は一體淋しい筈である。然るべき紳士連は大抵海岸とか山とかに遊びに行くから社交的のことは少ない。其代りに町のものは近郊に遊びに出かけるが、伯林の近郊にはよい遊び場所が隨分ある。日本人から見て、之は甚だ羨ましい事と思ふ。例へばグリユーネワルドといふ廣い松林などは絶好の遊び場所て、森もあり、山もあり、湖水もある。湖水は延びてポツタムといふ有名な離宮のある所までも續いて居る。電車の便もあり、船の便もある。日曜などには人が盛んに遊びに行く。池の傍には料理屋の如きものが澤山にあり、飲食の樂も充分取ることが出來る。又草の上に横になつて辨當を食べるといふやうな人も多い。(獨逸人は一般に儉約だから辯當持參の遊客が多い)眞白なものを着た男女が遊び歩く樣はなか〳〵美しい。此處は山の方て夏に最もよい遊び場所て別荘なども澤山ある。

水の方てはスプレー河といふ伯林の町を横ぎつて居る河が夏のよき遊び場所て、東京ならば隅田川といふやうな河てある。上流には湖水もあり、森もあり、島もある。就中トレプトーといふ所は向島といふやうな所て、料理屋も多く、遊船も澤山にある。伯林は歐洲ても有數の交通の便の開けた所て、船も電車も思ふまゝに利用することが出來る。

市中にはチーアガルテンといふ公園がある。こゝにも池があり、森があり、殊に有名な動物園がある。動物園では、夏は夜、花火を上げ、音樂を奏し、又一寸

した舞踏のやうなものもやる。又各區にも夫々小公園があつて、夜は噴水に色電氣をつけ、又水曜とか日曜とか人の大勢出る日には水道に仕掛をして瀧を造り之にも色電氣等をつけてなか〳〵の美觀である。

伯林は東京などから見れば、ずつと涼しく、堪らなく暑いといふやうな事がない。又料理屋などは綠蔭に椅子を置いてあるが、羨ましい事には木の下には日本のやうに蟲が居ない。蚊もゐない。木の下で涼みながらゆつくり飯を食ふことが出來る。之は氣候や空氣のせいもあらうが、又一つは衞生のよく行屆いた爲めてあらうと思ふ。

△夏の瑞西

ファーデル

私が本國を去て日本に來てからもう二十三年も經つそして三年程前に只一回四週間ばかり國に歸つた事がある丈けてすから餘り新らしい話は澤山ない。

一言にしていへば、瑞西の夏は恰度日本の四月のよい天氣の日のやうだ。晝の極く暑い時でも八十四度を超ゆることは殆んどない。七八九の最も暑い時でも其平均溫度は六十度以下、五十度に近い事もある。そして夏の間は二ヶ月程雨が降らぬ。であるから、空も地も晴れて明るい。尤も晝、五分か十分の夕立と雷がある。そして其夕立と雷の過ぎたあとの天地は一層爽やかにして心持がよい。

四方の山は日本の山などに比べると、鋭くして強い感じを與へるものが多い。そして四時雪を頂いて居る。夕映の光が此白雪を桃色に彩る具合などは畫工が到底書けない。湖水は黑ずんて、瑠璃色に見える。そして水が殆んと氷の如く冷たいのだから、入る人は稀てあり、又船を浮べる人も寒い位てあるから餘りない。

夏は大抵山に登る人が多い。鐵道が大變發達して山の麓又は半腹を屈折自在に通じて居るのみならず馬車道ても人道ても、大變よく出來て居るので大抵の所へ樂に行ける。山道ても世界第一の山道である。そして

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山道にも牧場にも芝生が一ぱいに生えて、それにいろ〳〵の花が美しく咲いて居る。眞白な水仙などの一ぱいに咲いた所もある。冬は氷滑りが盛んで、獨逸の皇太子などは毎冬來られる。瑞西に入り込んで來るは多くは英、佛、獨等の人であるが、英獨などの人は冬になか〳〵多く來る。

宿屋は大變發達したもので、之などは日本の模範にするに足ると思ふ。日本の旅屋の主人は金を貰ふこと丈けを心得て居るが、些とも金を出さない。眼が餘程近いと思ふ。瑞西の大きな旅屋の儲けは資本金に對して僅かに四分である。ホテルの建物、其れに通ずる道、そして其の取扱――日本の帝國ホテルなどは瑞西の旅館に比して二等或は三等であらう――そして上等が一日四圓位である。普通は二圓五十錢から三圓である。尤も九月は人が大勢入り込むからいくらか高いが、通常今いつたやうなものである。大きな旅館な皆番頭のシステムがあつて秩序整然たるものだ。私の聞く所では日本の旅館では二合とつた牛乳が六合となつてゐて殆んど三倍位の支拂を請求さるゝことも珍らしくないといふ。之は番頭のシステムが整はない爲めである。今少しマネージメントをよくすれば日本の旅屋もずつと安く出來やうと思ふ。瑞西も昔は決して宿賃が安くなかつたが、今は十人の金持を呼ぶよりも千人のたゞのお客を呼ぶといふ方針でやつて居る。そして益々好評を博し、又繁昌するのである。此點は最も日本の旅館等の注意すべきことゝ思ふ。

△夏の伊太利

池邊吉太郎

私は夏の伊太利を一寸素通りして、ベニスに二晩ばかり泊つた丈けであるから詳しい事は一向知らない。が、今でも忘れ難く思つて居るのは、ベニスの月花の景色である。水も空も朗かに晴れて、英語の所謂クリーアと形容するより辭はない。其空の下水の上をゴンドラが靜かに〳〵行く。一幅の畫、一篇の詩、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一寸話してもあの時の情趣を盡せない。

一體伊太利は溫帶地で、日本などゝ同じだから、矢張り好んで米の飯を食ふ。リゾットといふ生煑ひの米私等にはまづいものだが大變賞美して喰ふ。魚は喰べて見たがなかなか旨かつた。又ベエニスの人はマカロニーを食ひ、キャンチーといふ葡萄酒を飲み、ゴロゴンゾラといふ乾酪(チース)を食ひ、又何とかいふ長い葉卷煙草を燻らして居る。

伊太利も南部の方に行けば寧ろ熱帶的の風光を帶びて居て、風俗なども却て熱帶國に近似して居るらしい。例へば羅馬ですらも、昔の人の着たトーガなどは熱帶地に適した着物である。又羅馬人はよく裸かになつた。裸自慢であつた。然しベエニスあたりになると全く溫帶的で、日本などと大した相違がない。ベエニスは春が最もよいといふことであるが、夏でも米國人や北歐の人が可なり入込む。兎に角ベエニスの月夜は私に最も深き印象を與へたもの丶一つである。

△夏の樣々

文學博士　姉崎嘲風

夏といへば一番暑い時、冬といへば一番寒い時、これはいふまでもない事であるが、然し今迄に隨分暑い冬を過したこともあり、涼しい夏を暮らした事もある一番涼しかつたのは、スコットランドの夏で、日本ならは秋の涼風(すゞかぜ)の立つた頃、日中暫らくは外套を脱いでも朝夕は重ね着もしなければならぬ程であつた。然しそれでも夏は夏で、朝早く起き出て、五時頃には已に日が高く、夕暮には九時過ぎても尚明るい。其朝の日光が青々とした野山を照らし、野に咲く桔梗や原草(はらぐさ)に露の滴つた樣は矢張り夏の朝の爽やかさである。夕暮に薄明りが何時までも殘り、山々湖面は灰色になつて、天地が一幅の墨繪になつても、空には夕燒の黄金色が滿ちて、夜の來る步みは遲い。食後椽側などで何時までも語りつゞけては矢張り夏の夕の樂しさがある。

其反對に暑い冬を印度で過したが、朝から外出する

には大きなヘルメットを被り靑眼鏡をかけなければ眼がギラ〳〵する。日中には長く步行するのは危險な位てある。野山は水氣のない爲めに枯れ果てゝ、木枯の吹いたあとの如くてあつても時候は夏の溫度、夫れ故日が西に入つて稍々涼風の立つ頃、馬車を驅つて菩提樹や榕樹の並木の下を行けば、僅かに車の驅ける丈けの風が面を打つ。それても天地は靑々と霞んで、夕燒の熱りも漸く去り、東の空に月ても出ては涼しい月の雫を浴びるにも似て、日本の夏の夕に比して劣らない淸爽の感がある。

　印度本土とは違つてシーロン島に行けば、年中木は綠て欝陶しい程茂り、年中花が咲いて盛夏の如くてある。朝早く車を驅つて森の間、湖水のあたりを行けば鰐が道に横はる。孔雀が驚いて飛び出す。猿は木の上に遊び躍る。大きな蜥蜴は足音を聞いて水に逃げ込む。熱帶の動物界は朝早くにのみ見らるゝ。午後になれば大抵每日夕立が來て强く雷が鳴り、其晴れた後には夕方が蒸暑く呼吸も苦しいやうな心地がする。然し到る處螢が群飛して切めてもの慰となる。印度洋には冬と夏との區別があつて、冬は東北の風が吹き續け、海は蒼く氣は爽やかてあるが、夏になつては西南の風て、空も海も黃ばんて泥り、吹く風は湯氣を浴びる如き感がする。其中間に靜穩の時はあるが、此靜穩の暑さは却て苦しく、見渡す限り、海は油を流したよりも靜かにそよ吹く風もない、時々午後に龍卷の上る時などは一時風は吹いても、あとは又靜かて五體は空や海と共に油の如く融けたかと思ふくらゐだるい。それても全く無風の時には船の進行丈けの風が面を打つが、後ろから風が吹いて船の速力と同じ位の場合には船上は全くの無風となり、煙突から出る煙は眞直に上に上つて何物も皆靜止し人間も船も共に暑さの中に溶け去るかと思へる。暑いといへば暑いに違ないが、それても忍耐の力はある程度まて之に打勝ち得る。一昨年の航海には西南の熱風が吹き初めた頃て、時々は隨分暑い風も吹いたが、それても夕飯の食卓にはスモーキングを着て通した（これは偶然から航海中皆の客がスモーキ

ングを着初めたのて、互に忍耐比べをしたのてはあつたが）今考へては殆んど耐へられないやうてあるが、思ひ様次第ては其暑さにもさへ廿日の印度洋航海中それて通した。

隨分今迄暑い氣候も經たが、大抵は暑さを苦にしないやうにして心て制するやうにして勤めて來た。夏の登山などは暑さは暑くとも、汗はいくら出ても、前途頂上に登る望を抱いて、それて暑さの苦を忘れることも多い。然し今迄に暑さに苦しめられた最も嫌やな追懐は印度の山中て蜂に追駈けられた時てある。行く先に大きな蜂の巣があることは知つてゐたから、用意をして、自分は外套を頭から被り、友人は毛布を被つて出かけたが、被物の穴を透かして見て一二疋蜂が來たと思ふ間もなく、忽ちに四方からブン／＼と襲はれ、外套の外から刺す音はもう中に入られたかと思ふやうてある。下や横の隙間から入られる恐れがある。そこて二人は思ひ／＼に駈け出して岩窟の中に入り、こゝならば暗いから蜂は來まいと思つて居ると、一旦襲ひ初めた敵のある以上、岩窟の中へ數千の蜂が群がつて來る。到底防ぎ切れないから、そこを出て山道を駈け出して、いひ合はないが二人ながら同じ道を逃げ出した。連れの男が先きに行くのを透して見ると、初めの間は幾百となく群がつてゐた蜂も段々少くなり、半里ばかりも駈け拔けた頃には僅か二三疋になつた。そこて後ろからもうよからうといつて外套や毛布を脱いで蜂をたゝきふせ、ヤットの事て蘇生の思をした。其間の暑さに加へて蜂の刺す音。全身は固より汗、眼には汗が流れ込み、鼻の尖からは汗が滴り（友人は其鼻の尖を一疋に刺された）そして被物を着ながら山道を駈け下りた苦しさは今考へれば可笑しいやうてあるが暑さの苦しみて最も苦しい經驗てあつた。それから少し行つて荷物のある處て殘つてゐた曹達水を一瓶二人て飲み、寳丹を口に入れた時は今迄の暑さの苦しみが夢てあつたかと思ふ位てあつた。

其外いろ／＼の國の夏にさま／＼の趣はあるが、苦しいのは日本の濕氣の多い夏、伊太利て砂漠から來る

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

砂を交ぜた熱風シロッコの吹く時、快いのは一體に北歐の夏、綠は滴るが如く、柔かい草の上に寢ころんで讀書をしても蛇の憂もなければ蚊にもさゝれない。さうして婦人や小供は白い着物を着て蝶々の如く綠陰を飛んで歩るいて居る。

人物評論家風聞記

鐵拳禪

（上）

●一夜、水道橋畔に立ちてハレー彗星を西天に望む。雨後の空鏡の如く澄み、二等星大の星が曳く薄明の麥より淡き光芒よ。斯くして肉眼の觀察は、天文學者の想像し驚喜せしが如き彗星ならずとせり。

◉衆愚の批評は如何なる世にありても、當時の人氣に投ず。橋上に歩を停めて暫らく觀望せる印袢纒の壯者、大聲に怒鳴つて曰く『何てえ、あれが彗星かよ、學者が馬鹿を言つてらア』と。三四忽ち此の聲に應じ、罵り得て痛快なりとす。

●人物を評論する、又往々斯の如きもの無くんば非ず。遠く望んで小なるもの、近く接すれば大なるあり。過去の經歷より觀察して偉大とせしもの、實際は思つた程の人物ならざるあり。一人に對する。甲乙の評論は必ずしも一致せず、廬山も見やうに因つて異なる也。

◉人物の評論家の評論と云ふもの、畢竟するに此の廬山觀に過ぎず。創作界の評論と云ふものも亦、此の廬山觀に過ぎず。然るに文藝評論家と稱するの輩、己れの廬山觀を以て他に強ひんとす。笑ふべきかな。

◉『評論は或意味に於て一種の創作也。――然り、眞面目なる創作也。』とは、近時文藝評論家の呼號する所也。いかさま御尤もの道理に候也。

●文藝評論を以て生命となし、飯櫃となすものに於ては、評論が的確に眞面目なる創作也。眞劍なる創作也。殊に現代人物評論の如きに至りては、人生殺活の權その筆端にあり。最も大膽にして、最も眞面目なる創作ならずんばあらず。

●塚原澁柿園の歴史小說と、山路愛山の史傳物と、講談師の義士銘々傳とが讀者にうける時に方つて、人物評論を續き物となしたるは黑頭巾其人也。

●彼れ始めて讀賣新聞に『現代人物競』を載せ、次て『新人國記』を執筆す。『新人國記』は北條時頼の作ならんとも傳へらるゝ『人國記』より思ひ付きたる名なるべけれど、內容に至りては全然その趣を異にす。『新人國記』は故ありて讀賣の續載を中止し、今は日本及日本人に連載しつゝあり。

●現時讀賣に連載する彼れが作に、『舊藩と新人物』あり。仙臺篇を終へて金澤篇に及べり。『新人國記』に於ては史上の人物を評隲し、『舊藩と新人物』に於ては現代の人材を品評せんとするもの、是れ姉妹篇なるなからんや。

●『舊藩と新人物』は、『新人國記』に比して劣惡也。仙臺篇の如きは、材料貧小にして誤謬に豊か也。評論の花は麗はしくして事實の菓は蝕めり。

●自然を說き、人物を論じ、史實に溯りて現下の趨勢を斷ず。斯くして彼れの評論は、始めて生彩あり、趣味あるべき也。自然を閑却せるの一事、多大の面白味を減殺せしものなくんば非ず。

●廣瀨川の詩歌を訪ね、北上川の文明を究めたるからは、必ずや阿武隈川の文化をも併せ說かざる可からず。林子平を論じたるの筆は進んで支倉常長と時世とを解剖し、東北の海岸線を研究し、硫黄島發見者橫尾東作、石濱王白石廣造等を擧げ、而して海外に發展しつゝある東北人に及ばざるべからざりし也。

●博士志賀の名を推して、炭疽病菌發見の犧牲たらんとせる博士須藤を忘れたるが如きは、現下の學界を論ずるに忠なるものと云ふ可からざる也。人物評論家の觀察は深く、趣味は廣からざる可からざる也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◉黒頭巾は赤門の出、國史專攻の文學士にして、横山達三と云ひ、健堂と號す、長州系の政治家を論ずるが如きは、最も彼れの得意とする所なるべし。

◉同姓に源之助あり。曾て天涯茫々生としては毎日新聞に社會の暗黒面を描き、有磯逸郎としては中央公論に『明治闇黒史』を書き、『怪物傳』を公にし、夢蝶閑人としては太平洋に執筆し、礫川隱士としては趣味に『怪人』を載せ、近く『明治富豪史』を刊行せんとす。彼れは人物評論家としては、夙に名を知られたる者の一人也。

◉彼れは同一の雅號に執着せず、隨時隨所に好い加減な雅號を散布す。然れども、彼れとしては何等かの所存あるやも知れず。原稿稼ぎには都合宜しかるべきも、人氣役者たるには甚だ得策ならず。

◉吾人は便宜上爰に天涯と呼ばん、源之助と呼ぶの役者臭きを厭ひて也。夫れ天涯の評論は、黒頭巾に比しくろうと也。黒頭巾の才氣と文彩とは無きも、内容の充實と奇警の觀察とはあり。

◉天涯は飽くまでも觀察し、描盡せずんば歇まず。黒頭巾は好んで列擧し、評論し、文飾せんと欲す。天涯の人物評には强き印象あり、黒頭巾の人物論には讀過の興味を感ず。これ二人者の異なる所以。

◉社會の暗黒面を描き、市井の怪傑を紹介するは、天涯が從來の嗜好なりしが、近時力めて富豪を研究せんとする者の如し。彼れが實業界に連載しつゝある『明治富豪の史的解剖』の如きは、正に這般の消息を證す。

◉『現代金權史』の著者山路愛山は、史論界の旗將にして、又人物評論家として知らる。獨立評論と太陽とは、彼れが得意の筆鋒を閃かすの壇場也。

◉愛山の文は一種の特色と厭味とを有す。筆路暢達にして些の晦澁なく、かゆき所に手の屆くやうなるは天下一品也。此の點に於て愛山と比肩すべきもの、大町桂月あるのみ。

◉輕妙は愛山の長所にして、又短所ならずんば非ず。而して、何とも云へぬ厭味おのづから這裡より生ず。吾人は愛山の人物評に於て、輕き皮肉と無力なる揶揄

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とを發見す。獨立評論紙上の「片岡直温氏と仙石貢氏」の如きは、其の好適例也。

●太陽の人物月旦は、鳥谷部春汀時代に比して遜色あり。人氣に於ても亦然るもの丶如し。春汀は足の人にして、愛山は机の人也。机の人たるに由りて、事實の眞相に徹せず、徒らに舞文を以て人目を眩せんとす。これ彼れが月旦の、政界の耳目を惹くに足らざる所以也。

●帝國の學府を論じ、宗教家を月旦し、社會主義者を評するが如きは、愛山の最も誇りとする所ならん。然れども、政治界の一人を提げ來りて表裏より之が觀察を下し、縱横に之を解剖するが如きは、彼れの能くする所に非ず。

●彼れは到底時代人物の批評家也。史論家也。狂熱なき明治の頼山陽也。唯彼れに偏見の少きを取るべしとなす。

●現下人物評論界を三分して其一を保ち得るは、以上の三者也。而して黑頭巾は地理的に、愛山は時代的に、天理人は社會的に人物を評論し、各其の特長を發揮するに於て、斯界は此處暫くの間天下の視聽を集め得べき也。

（中）

●愛山の本名を彌吉と云ふ。吾人は彌吉の名を見る毎に、民友社派の文士を想起せずんば非ず。

●當時彌吉と名を等しうせし者に、竹越與三郎（三叉）あり、塚越芳太郎（停春樓主人）あり、人見一太郎あり。何れも文明史論家として、國民之友の花形役者なりき。今や愛山を外にして、纔かに餘命を保つ者は三叉也。

●是等の花形役者を率ゐて、文名を一世に馳せたる民友社の首領は蘇峰德富猪一郎也。彼れは國民新聞紙上に、當代の人物を評論して、擒縱殺活自在を極めたりき。實にや蘇峰は、人物評論家の元祖なりける。

●『人物管見』は蘇峰の著也。これ彼れが隨時新聞雜誌に公にせるを、後に一冊子となせるもの。當時の人物評を覗ふ好個の記念ならずんば非ず。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◉量に於て多かざるも、尾崎愕堂(行雄)は朝野新聞に評論を試みたるを以て、茲に記念すべき人物の一人也。

◉三宅雪嶺(雄二郎)も亦、斯界に忘るべからざるの一人也。彼れは對手と同等以上の地歩を占めて、おほどかに評論す。其太刀打の鮮かなる、有段の士たるを失はず。

◉論客としての雪嶺は、訥皮肉の雄辯也。前辯士の説を皮肉るに於て、最も巧妙を極む。彼れは此の巧妙なる皮肉を以て人物評に臨まば、獨り蘇峰をして名を成さしめず。

◉今日に於ては、人物を知り、政界の情僞に通ずる、蘇峰或は雪嶺の上にあらん。忌憚なき評論を下すに於て、雪嶺豈蘇峰に遜るものならんや。さはれ、二者は今人物に關して多く口を開かず。

◉蘇峰は洋學系に對して、當時大に振ひたるは漢學系の川崎紫山(三郎)也。明治二十三四年の頃活世界に執筆し、後渡邊國武を説いて經世新報を發刊す。同紙は片假名新聞として、當時の新聞界に異彩を放てり。之れ、紫山の全盛時代也。

◉紫山の『西郷南洲』及び『西南戰史』と時を同じうして、好評嘖々たりしは松井柏軒(廣吉)の『日本帝國史』及び『日本百傑傳』なりき。

◉柏軒は努力の人也。紫山は豪傑氣取の男也。今や此れは新時代より葬られ、彼れは時代と相呼應して進み、政治經濟の方面に其の健筆を揮ひつゝあり。

◉漢學系に屬すべきものに、鈴木天眼(力)あり、佃斗南(信夫)あり、長田偶得(權次郎)あり。天眼は天仙子の號を以て『寸鐵』に評論を試み、禪味を帶びたる靈活の筆は、當時の論壇の平調を破れり。

◉斗南は二六新聞に隱れ、偶得は成功に中譯的の人物評をなす。蓋し偶得は史傳家也。愛山より新し味を引き去りたるは、偶得の史論なるべし。

◉天眼と並び稱せられたるものに、日南(福本誠)あり。共に地方新聞の主筆となり、代議士となり、政界に一花咲かせんとす。

◉日南の『元祿快擧錄』は大した物に非ずとの評あれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ど、兎に角出版界の人氣を引立てたるの快著也。國民黨の宣言及び主義綱領等は、多く彼れの筆に成ると云ふ。又、黨中無用の材には非ず。

●彼れの皮肉はふぐり以上に出でず。きんたまを本位として、人物を評するが如きは其の最も喜ぶ所ならん。辛辣の筆、痛快の論、一方の將たるを失はず。

◉日本に古一念（古島一雄）あり、日本人に香川魁庵（或は怪庵）あり、當時日南等と轡を並べて論壇に馳騁せり。古一念は舊式なれども、魁庵の風聞記は侮る可からざるの觀察眼を有す。

◉緑庵内田貢は文士中の皮肉家也。舌頭の皮肉を弄するは國木田獨歩にして、通がつた皮肉を筆にするは齋藤緑雨也、緑雨逝き、獨歩くたばりて、魯庵安閑として丸善にあり。

◉魯庵は不知庵の名に匿れて、明治二十七八年の交盛んに文壇の人物を評論す。痛罵、皮肉、揶揄、殆んど文士を撫斬りにするの慨あり。彼れ之が爲に硯友派に睨まれ、一時こッぴどい目に遭ひたりき。

●今日文壇の人物を風聞するは日本及日本人の『文藝風聞記』にして、狙擊するは諸雜誌の六號子也。此の六號子中にありて稍異彩を放つ者は、新潮の佐藤橘香也。

（下）

◉現代人物評論は、方今新聞雜誌の呼物となれり。如何なる風の吹き廻しかは知らねど、恐らく史傳物の流行に伴へる現象ならん。

◉毎日電報に鷲（鵜澤一畝？）あり、日本及日本人に健依別（和田三郎）あり、新公論に幕村隱士（久津見蕨村）あり、やまと新聞に山本龜城あり、讀賣に黑頭巾あり、實業界に横山源之助あり、太陽に山路愛山あり。一時の盛觀を呈す。

◉報知新聞は熊田葦城の『日本史蹟』に依りて客を呼び、暫く人物評論を載せずと雖も、同紙は由來人物評論家と淺からぬ因縁を有す。

◉明治三十年頃儘世翁なる者あり、同紙に『當世活人畫』を連載す。これ名士の生活を描き、抉り、評して、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

面白く讀まするを主とせしもの。蘇峰、紫山等の人物評と其の行き方を異にせり。

●『當世活人書』は、確かに人物評論界の新紀元を劃せるものとして、永久に記念せらるべきの書也。此の書出てゝ、斯界の調子は變り、從來に比して數段の進歩をなせるを見る。

●天涯は能く『當世活人書』の型を活用せるもの也。鑑城の行き方も亦然らざるに非ざれど、その標題が『現代之風雲兒』そつくりなるを以て多少の厭味を感ず。何とか一工夫あるべし。

●『現代之風雲兒』は、南木性海及び和井内喜德の合作に係る。文に囚はれ好惡に偏したるも、『日曜御前正毅』の如きは鑑城の『野心家彌太郎』と共に出色の文字とす。此の三者は新進評論家として、侮り難き筆力を有す。

●鳥谷部春汀(銑太郎)は人物月旦を大成したる人也。初め公近衞に知られ、明治評論(精神の改題)を主宰し、後報知に入り、又太陽に入りて專ら人物を月旦せり。

●春汀が月旦せる政治方面の材料は、多く子濤浦より出てたるもの丶如し。春汀の筆温健にし圭角なく、皮肉なく、委曲周到の批判をなす。時に不得要領の弊に陷るも、何人の感觸をも害せず、成程と首肯せしむるに於て獨特の魅力を有す。

●彼れは人物の短所を見るよりも、長所を長所として稱揚せり。臺閣の諸公より、文藝家、宗教家、軍人、苟も一技一藝の採るべき者は、之を一個の人物として江湖に紹介せり。公伊藤の彼れが評論に推服せるも、亦宜なりと云ふべき也。

●春汀の兩翼として働ける記者に、淺田江村あり、鈴木西湖あり。西湖は未だ甚だ聞えずと雖も、一種の才筆也。春汀が最後の月旦たる『西本願寺法主大谷光瑞』は、病床に侍して彼れの筆記せる所のもの也。

●村上政亮は岩手の人、最も人物評論を好む。報知に多く此の種の文を載するは、彼れの方針に因ると云ふ。生駒跡翔の『澁澤榮一傳』も亦、報知に連載せるも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の也。

●石川半山（安次郎）は、城北隱士の匿名を以て東京毎日に人物評をなす。彼れ嚢に『當世人物評』の著あり。筆鋒犀利。

●正岡藝陽は辛辣、罵倒に次ぐに罵倒を以てす。暮村隱士は到底敎育評論家也。政治家月旦の如きはガラになき所也。近時新公論所載の如き、オホンと氣取りたるのみにして、陳套は依然として陳套也。伊藤銀月の史論と相距る事遠からざるを覺ゆ。

●健依別は明治學院の出、臆病な癖に謀叛好の男也。又の號を懷仁と云ふ。革命評論に社會主義を鼓吹し、近時『自由黨史』を編す。

●日本及日本人の『土佐人物評論』（健依別）と『八百八街一町二人』（默州）とは、中央公論の『人物評論』と共に雜誌界の讀物たるを失はず。

●大庭柯公は『人物分布觀』の著者也。『關西研究』『南瀛一瞥』等、人國記風の評論をなす。黑頭巾の人物を列擧するに比して、是れは又地理に囚はる。されど觀察は鋭く、筆は中々に達者也。

●健依別の『伊勢風聞記』、又此の種の文字也。印象的の筆致、或は黑頭巾、柯公の上に出づ。青柳有美の『名古屋女論』は、寧ろ名古屋女よりも彼れ自身がよく紙表に活躍す。

●坂井久良岐（辨）『明治畸人傳』の續篇を作るの時、宜しく有美を之に加ふべし。彼れは正に評論家俎上の魚也。

●敢て論評せず、紹介を主とする者に河岡嘲風あり。博文館の諸雜誌及び雄辯紙上に、その名を曝す。原稿稼ぎの雄なるもの也。轉じて人物評をなさば、或はやまとの鑑城の向ふを張るを得ん乎。

●鑑城は未成品也、望ある將來を有す。健依別は既成品也、將に老境に入らんとす。然れども今時人物評壇の花たるもの、天下三分の諸子を外にしては此の二人者を推さゞるを得ず。（五月三日稿）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

露國通過の感想

(西比利亞線經由者に露都漫遊を勸む)

在伯林　中島半次郎

余は去る三月三十日の夕、新橋を發し、三十一日の夕、敦賀にて露國義勇艦隊の汽船ペンザ號に乗り、四月二日の午前十時、浦鹽斯徳に着し、此夜は此所に一泊し、翌四月三日、神武天皇祭の日の夕刻四時半、露國國有鐵道の急行車に乗り、西比利亞を經由し、烏拉爾山を踰え、十三日に、モスカウに着し、終日此舊都を見、此夜の十一時發の汽車にて露都セント、ペテルスブルグに向ひ、翌朝十一時露都に着き、此日と翌十五日の兩日、露都を見、十五日の夜行汽車にてウイルナ及ヴイルバルレンを經て伯林に向ひ、十七日の早朝六時伯林フリーリッヒド街停車場に着き、當地の客となれり。

西比利亞鐵道列車内の究屈にして、鐵道沿線の風光人情の單調無味なるは、人傳てに聞きし如くなるも、飜りて考ふれば、露國が東方に其翼を延ばさんとして經營したる浦鹽斯徳港及び西比利亞線の工事は、其一街、其一線、盡く其苦心の跡を語るものといふべく、西比利亞線に沿ひて大小の停車場を造り、停車場のある所必ず宏壯の寺院を建て、之を以て其地方開發の中心とせるは、以て露國政教の方針の一端を伺ふべく、而して西比利亞地方は、一概に荒漠砂塵の地と言ひ去るを得ず、殆んど半年は雪に埋まれるも、猶農業に適する所あり、又森林帶には松柏の鬱葱として茂れるあり、川あり、湖水あり、牧場ありて、若し之が開發誘導其宜しきを得ば、人力は以て天然を征し、茲に一大農業地、一大牧場を現出し、滿州を相連りて、世界の一大市場たるに至るべき豫想を起さしむべし。余は車中、加奈太の旅行家フラーサー氏著はせる所の「西比利亞其儘」(John Foster Fraser's The Real Siberia)を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

讀みしが、之は千九百二年に、氏が西比利亞を旅行し、成るべく徒歩にて西比利亞の各都府を訪ひ、親しく風俗人情を觀察し、獄舍に流罪人を訪ひ、村落に移住民を尋ね、汽車に乘れは必ず三等車を選びて下民の間に伍し、務めて西比利亞其儘を視察せんと企てたる記錄にして、氏は語を强めて、西比利亞は最早罪人の流竄地にあらず、無垢なる露國農民の働き場所となれり、其場所は世の想像と違ひて十分農作に適し、行く〳〵は世界の一大農業地、一大商業地一大商業市場たるに至べし、此點に着眼して今西比利亞に漸次其經濟的地歩を占めつゝあるは獨逸と米國となり、英人は此西比利亞の實際を知らざるにあらずやと言ひ、西比利亞の將來に注目せざるべからざる旨を警告せり、西比利亞が果して氏が言ふ如く一大農業地となり、從ひて滿州と並びて世界の大市場たるに至る資質を有するか否かは猶十分なる調査を要すべく、之には又露國政府の政策も與るべきを以て、輕々には斷言し得べからざるも、露國が西比利亞線を復線と爲し、西比利亞開發に多大の努力を爲すに至らば、此豫言の當らずとも言ひ得べからず。余は今少し露國の東方經營史、或は西比利亞の地理に就き、幾分知る所ありて旅行したらんには、此冊究至極と稱せらるゝ汽車旅行の相當に興味ありたるべきを感じ、此線經由者に對し、西比利亞に就き、歷史上より、地理上より、農工業上より、或は又商業上より、多少の調査を爲して後旅行せられんことを勸む。

汽車バイカル湖を過ぎ、イルクーツダにて乘換へを爲し、烏拉爾山を指して進めば、五日にして烏拉爾山中のチエリヤビンスクに着く。驛に歐亞の境を劃せる大理石の石表立てり。振り返りて東の方を望めば、遙る〳〵來ぬる旅をしぞ思ふの感起らざるを得ず。歐州に入る線路は、此所より二つに分れ、一は直ちに露都に向つて走り、一はモスカウ、ワルシャウを經て中歐に達す。余が乘れる列車はモスカウ行なれば、是よりヴオルガの平野を望みて直下し、走ること二晝夜にして三日目の早朝に、モスカウに着けり第一に目に着くものは寺院の尖塔の林立して天を摩せることとなり。支

那の金陵、南北朝の時、佛寺の盛んなりし樣を詩人は詠じて、「南朝四百八十寺」と言ひしが、モスカウの寺院は今日四百五十寺ありといふ。昔ながらの信仰を持續せる狀態、露國ならでは見ることを得ず、此舊都ならでは見ることを得ず。モスカウは露西亞人に依りて神聖の町と呼ばる。而して此神聖の町の冠と言ふべきはクレムリン城なり。露西亞の昔の諺に、モスカウにての願はクレムリンに行くにあり、クレムリンに入りての願は天國に行くにありといひしと聞く。宮城內に寺院ありて、能く政敎一致の國柄たる實を伺ふことを得べく、其舊風を存せる建築を見れば、明に支那及び中央亞細亞の影響を認むべし。東西の文明が如何に此地に錯綜せるかを見るも頗る趣味あり。人は船路、印度洋を經、紅海を過ぎ、地中海に入るに依りて、西力東漸の經路を如實に見るを得、又此間に盛衰興廢せる國々の歷史に就きて深き感懷を起すことを得ると言ふも、陸地汽車に依るも、又同樣の經路を辿り、東洋より西洋に入る文明の彩色を幾段にも認むるを得べし。モスカウの舊都にありては、支那及び中央亞細亞の影響の認めらるゝのみならず、更に深く辿れば希臘羅馬の文明の初めの形を存せる點を認むべし。

歐州に入る多くの旅客は、モスカウより露都に廻らず、直ちにワルシャウに出づ。然れども余の實際に見たる所に依れば、道は久しく迂回し、日數は兩三日多くなり、費用は少しく嵩むも、（一日二十留あれば足る）露都は是等の不便に打ち勝ちて十分に視察すべき價値あり。モスカウを以て古き露西亞を伺ふことを得べしとせば、セントペテルスブルグを以て新らしき露西亞を伺ふことを得べし。西比利亞を以て亞細亞魯西亞を見、モスカウを以て半亞半歐の魯西亞を見ることを得べしとせば、露都を以て純歐州の魯西亞を見ることを得べし。露西亞を經て露都を見ざるは、其尾を踏んで其首を見ざるに等しと言ふべし。

露都にては、寺院の宏壯、先づ人の目を惹く。其數はモスカウほど多からざるも、其建築、其裝飾の壯大華麗なるに至りては、流石に政敎一致の國の首都ぞと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

領かる。中にもカザン寺は、千八百一年より十一年に亘りて建築し、四百萬ルーブルを費し、イサック寺は千八百十九年より五十八年に亘りて建築し、二千三百萬ルーブルを費したりと言はる。露國の宗教は一見すれば、偶像禮拜に陷り、形式に囚はれ居る如くなるも、猶我を投げ棄てゝ神の前に跪づき、宗教を命とする樣の看取せられざるにあらず。而して此神に歸依するの心、引きては種々雜多の種族を統一して一國家を爲せる國家的團結の一の力となれるにあらずやと見らる。今日の歐露に來りて、昔の希臘教其儘の行はれ居るを見ては我も亦昔に返り、現世を離れたる一種神々しき境に遊べる心地す。而も振り返りて此古代其儘の宗教が、近世思想と戰ひて猶之を統轄する力を有することを得るかと、現世の問題に立ち入れば、玆に露國今後の政教の大問題の伏在するを認むべし。英佛獨等に於ける基督教は、西羅馬化したるもの、而して此羅馬教が更に宗教改革に依りて近世化せられたるものなるが、此近世化せられたる宗教が、猶近世思想に對抗し得ざらんとする時勢に、露國の希臘教が、近世思想、今日の國家生活に觸れて、之を調和し、之に生命を附與することを得るか。これ露都に遊び、寺院を見る者をして、直ちに切實に思ひ浮べしむる所の問題なり。

カザン、イサック二寺の外、ネバ右岸のセント。ポール寺には、露國皇室代々の墓あり。又復活寺には、アレキサンドル二世が革命黨の少女の爆烈彈に殪れらたる時の遺跡を存在せり。此等は先年同帝紀念の爲め、其仆れらたる跡につきて作りし者の由にて、建築裝飾兩つながら華麗を極む。

露都にて最も觀る者の感興を牽くは、ピートル大帝の遺せる假小屋なり。此假小屋は、帝が千七百三年に、此新都を經營する爲め、ネバ右岸荒涼の地に假住居として自ら建築し、此所より毎日小舟にて對岸に渡り、新都の經營を爲しゝ者の由にて、其日常の調度も帝の自ら製し自ら用ひし者殘り居れり、小舟も亦帝の自ら製せし者と傳ふ。小屋は長さ十九米突、幅六米突に過ぎざるも、此小屋の中にて、新都の經營の爲され、露國近世史の幕の開かれしと思へば、一人の力、斯くも國家の興るに與りて力あるかを感ぜしめ、無限の感懷を起さしむ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若し夫れ露國美術の華美なるものに接せんとせば、カザリン第二世女帝紀念の「エレミタージ」に行くべし。此博物館は、露國近世の美術の外、埃及、アッシリヤの古器物、希臘、羅馬の彫刻、露國古代の器物調度を始めとし、繪畫は中世及び文藝復興時代より始め、近世歐洲名家各流の逸品を藏し、其繪畫の中には、天下一品と稱せらるゝ者四五種ありと聞く。其露國純粹の美術の中にも、繪畫彫刻の中には素人目を驚かす者あり。此博物館と並び、アレキサンドル三世紀念の博物館には、又少からず露國畫家の名畫を藏せり。余は伯林に來り、直ちに各種の博物館を訪ひしも、是等に比して、露國のは勝るとも劣ることあらじと感ぜり。

猶漫遊の客は、我國大使館の紹介を得ば、各宮を拜觀することを得べし。露帝は日露戰爭後、宮城に住はせられずといふ。其アレキサンドル二世の居間たりし室には、帝が日常用ひられしといふ調度の外、爆烈彈に殪れられし時の衣服、卷煙草の吸殼等をも存せり。クレムリン城にては往古の宮城を觀ることを得、各宮にては今の宮城を伺ふことを得べし。

一兩日の觀察、露國の民情風俗に通ずることを得ざるは勿論なるも、猶何處となく其人生觀、其國民性に觸ることを得べし。而して露人の我等に對する態度につきては、日露戰爭の宿怨は何處にか藏めて、今は却りて相親しまんとするか如き傾向あるを感ぜること二三回に止まらざりき。

之を要するに、露國は〔第一〕今の中歐若しくは南歐諸國が、西羅馬の文明を繼げるに對して寧ろ東羅馬の文明を受け、之を今日に保存せる點に於て、〔第二〕歐洲中にありて、過去に於て東洋の文明、東洋の精神を取り入れ、現在に於て、又東洋にも領地を有し、東西文明の融合を計らんとしつゝある點に於て、〔第三〕歐洲中にありて北部に偏せる爲め、却りて固有の政教、學術、文學、美術を有せる點に於て、〔第四〕日露戰爭に敗れたるも、猶大國としての面目を存し、各種の人種を統一にして國家を起さんと力めつゝある點に於て、十分の研究を要すべく、殊に我國とは、各種の關係に於て、交渉日に繁多に成り行くを以て、深く之を研究すれば猶の事、一時の漫遊にても、少からず彼我を知るの助と爲るべし。是故に余は余の經驗に依り、西比利亞線に由るの旅客は、日本よりする方と、歐洲より日本に歸る方とを問はず、モスコウを見るに止めず、是非更に露都を見られんことを勸む。(五月二十日)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

梅雨季の惰氣を一掃すべき大快著

福本日南君著

新刊

直江山城守

菊版全一冊
總クロース頗莊麗
美術版コロタイプ口繪貳葉挿入
正價壹圓廿錢
(郵税)内地八錢 臺灣韓淸卅錢

豐太閤をして『出でて天下の政道に當り、之が燮理に任ずべきは其れ直江山城か』と嘆ぜしめ、德川家康をして『寡兵を以て恐動せず、功名を讓りて爭進せず、最後の必勝を期する者は、山城に非れば爲す能はず』と畏れしめたる直江兼續は、嗚呼如何なる俊傑ぞ?!　一片耿々の志禁せず『繼絶扶傾』の四字を藤原惺窩に問ひて遠く石田三成と相應じ、景勝を扶けて義を會津に詢ふるや、軍容堂々、奇謀縱横、老雄家康をして屢々其膽を寒からしむ。實に彼は曠古の大戰、關ヶ原役に於ける隱れたる原動力なりき。而かも事志と違ひて、軍を收むの已むを得ざるに到れるも且つ家康をして害を宗家に加ふること能はざらしめ身も亦優悠、山水吟詠に托興して、顯晦時に從ひ克く一世の侯伯が敬重を一身に萃めて、以て其高邁活達の雄心を產業の振興、文運の興隆に委ぬ。豈尋常漢の能くし得べき所ならむや。今福本日南先生其靈犀の史筆を揮ひて此大英雄が活風丰を描き、配するに秀吉、家康、三成、氏鄉、正宗等の諸雄を以てす名は兼續一人を題すと雖も實は戰國當時の英雄論にして、又た關ヶ原役の一大別錄たり。如之も卷首に敍して曰く『幸にして男子たらば其れ爲す所なかる可けんや。自ら視てコンマ以上と爲し、及コンマ以上たらんと欲する者は男兒中の異男兒兼續其人の行實に察せよ』と。以て著者の抱負を知れ

(中付の一)

發兌　東京本鄉一丁目　振替東京壹七壹　東亞堂書房

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

兒童訓話の絕好資料

四十七士譚は少年少女諸君
武士的精神修養の寶典たり

學校家庭必備之書

巖谷小波先生校閲　沼田笠峰先生編述

大好評

兒童教訓 赤穗四十七士譚

洋裝頗美本
舶來紙刷美麗寫眞版六拾餘挿入
定價六拾五錢
郵送料八錢

少年少女に讀ませる目的で四十七士の傳を委しく述べた書物は未だ發行された事がない。本書は少年少女の教養に經驗ある編者が元祿義擧の顚末を平易なる文章で述べると共に六拾餘の鮮明なる繪畫を加へて四十七士の個々の行動をも鮮細にあらはし、少年文學の泰斗たる小波先生の校閲を經たるものゝ少年少女の士氣を養ふには最も適當なる讀みものと信ず

大好評　大歡迎　續編發行

西川三五郎編

學校家庭 續兒童百話

新刊　洋裝全壹册　正價卌錢　郵稅四錢

學校家庭 兒童百話

拾版　洋裝全壹册　正價廿八錢　郵稅四錢

今回更に最も嶄新にして趣味ある童話百餘種を蒐め續編を刊行せり乞ふ一讀あらん事を。

發行　東京神田松下町　文盛館・東京神田美土代町　振替東京二〇一四六　博文書院

（中付の二）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

圖書と雜誌

▲陳列場、各種類新刊物等、數多蒐集有之候間御來觀願上候

△圖書の配達、東京市内の御注文は多少に不拘御届け可仕候

▲地方讀書家諸賢には懇切を旨とし迅速便利に御取扱可仕候

△特別割引、多數に取纏め御注文の節は卸同様御取扱可仕候

▲御照會は郵券封入、又は往復端書にて詳細、明瞭に願上候

何れの出版を不問

勉強販賣

東京神田區表神保町

東京堂書店

電話本局 二五五二番 二二三番 二四八番 振替東京口座 二七〇番

▲御注文は總て前金の事、郵券代用は必ず一割増にて願上候

△圖書切手、御便利の爲め御進物用として美麗に調進可仕候

▲地方御同業者の取引は薄利に發送は非常の敏速に勉勵可仕候

△書籍雜誌の委托一手販賣は獨特の擴張法を以て勉强可仕候

▲圖書出版發賣等に就き御相談の節は御便利に御取扱可仕候

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士 中島力造先生編

讀書會印行

倫理心理宗教 教育社會學哲學 新著梗概

第四輯下卷（新刊）

第一輯上下 第二輯上下 第三輯上卷 定價各金五拾錢

第三輯下卷 第四輯上卷 第四輯下卷 定價各金六拾錢 郵稅各金八錢

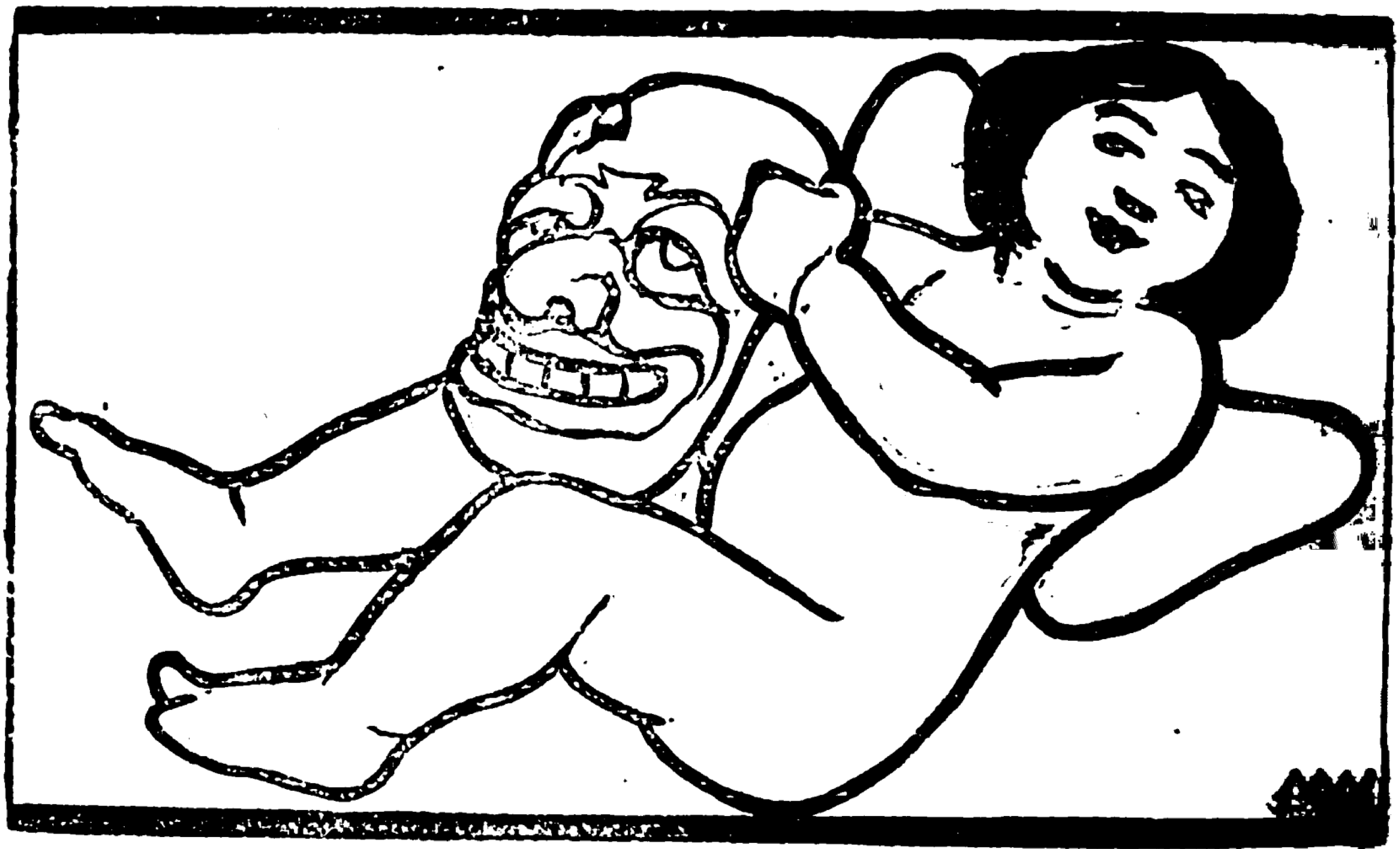
泰西思想界の津梁として推奬せらるゝ本書は、益々其の材料を精選して第四輯下卷を發行せり。解說の鄭重なると、批評の妥當なるとは本書の特色にして夙に讀書界の歡迎するところなり。苟くも日進月歩の泰西思想界の趨勢を知らんと欲するの士は是非とも之れを一讀せざるべからず請ふ一本を座右に備へられんことを。第四輯下卷收むる所を擧ぐれば左の如し。

倫理學　宗教學　教育學　社會學　哲學

目次進呈……第一輯より第四輯上卷迄の總目錄御入用の方は御申越次第送呈

發行所 東京京橋區南傳馬町二丁目 振替貯金口座第二八〇九番 目黑書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



紐

眞山青果

一

離屋では又老人の怒鳴り立てる聲が聞える。物ても放り付けたやうだ。おえなはボヤケた顔付して蝶足のお膳を下げて來た。

こちらの隱居は袋戸棚の塗箱から役者の似顔を描いた黒表紙の小本を出して、日和に向いて讀みながら、田舍の弟子から到來の新茶を淹れて居た。

「何うしたのさ、又。」

背骨の丸るくなつた隱居は病身さうな白い顔を上げた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何んてすかねえ、こんな猫の茶碗ぢや喰べられないんですツて。憤るだけ憤らせて置く方が好御座んすよ。」

「お前また布巾を粗相に使つたんだらう。どッちもどッちさ。本當に爲やうのない人だちだね。」

隱居は又讀み續きの小本に節を付けて、「上部をつゝむ袢纒に、去りし昔を包んでも、何時しかボロの出る小袖、薩陲峠の頂上に……。」何んとか云ふ役者の眞似をして頸を振り〳〵讀んで居る。離屋の老人がガタビシそこらへ當り散らして、朴齒の日和下駄を自分て出して出て行くのをも、知らぬ顏して小本を讀んで居た。

これが八代目、これが田之大夫、これが仲鶴、彥三と、御隱居が來た娘の時代、江戶詰めに居た頃の人氣役者を一々聞かせられたこともあるが、今の芝居てさへ然う見やうとは思はぬおえなには、鼻が恐ろしく尖つたり、眉と目の馬鹿〳〵しく離れた人達だと思ふぐらゐのものてあつた。

冷々として好い心持の板の間へ坐つて、おえなが生溫るいお湯てお晝飯を濟ますと、もう奥の時計が二つ打つた。

日は流し元の窓の方へ廻つて、掛下げ建の低い臺所も一次りカッと明るくなつた。肉と皮の間をモヤ〳〵虫でも這ふやうな、懈るい睡むい心持て皿小鉢をコリ〳〵洗つて居ると、もう蔓の伸びた碗豆豆の裏畠から、青々しい風が髮の毛の粘り付いた顏を撫てゝ行つた。

もう三時だよ、三時半だよ、時々思ひ出したやうに隱居が茶の間から聲掛けても、おえなは未だ流し

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

節を撓めやうとしなかつた。

「御隱居樣、唯今。」

「はい〳〵、お歸んなさい。」

「御隱居樣、先生は。」

「今日は分校の方に教員會議があると云ひました。少し遲御坐んせうよ。」

裏の弓坐敷を修繕してそこに寄宿して居る女生徒が女學校から下つて來た。庭の木戸から茶の間へ挨拶して、臺所前の梨子の木の下を部屋へ通つて行つた。そして、その序に臺所へ寄つて、派手な色の小風呂敷につゝんだ小さな辨當箱を上り口の閾へ並べて行く。

「おえなさん、毎度お世話さまです。」などと、お世辭を云つて行く年上の女學生も仲にはあつた。

その中に腋窩へ袂をはさんだ當番の女學生どもが、白キャラコの前掛を結びながら賑かに臺所へ出て來た。煤煙つた砂壁に貼り出してある一週間の献立表を見て、馬鈴薯の皮を剝くものは剝き、刻むものは刻み、何んでもないことにキャッ〳〵騷ぎながら晩飯の用意にかゝつた。

其邊中を水だらけにしたり炭斗を顚覆したりするのを、後から立づて一々始末するのがおえなの役であつた。いつそ一人て稼ぐ方が好いとは思ふけれど、又然うもならなかつた。中には又、然も困つたやうに頸をかしげて、煮物の鹽加減なぞを相談する生徒もあつた。おえなはフッ〳〵と沸え立つ鍋の中から、百姓が煙草の吹殼をころがすやうに、煮物を掌へ受けてピシャ〳〵指で嘗べながら、

「まアこれて大抵は好御座んせう。皆さん辛目な方が御好きですから。」と他の人へ話す時よりは決つて丁寧に云つて聞かせる。

「あらおえなさんが、大抵だつて。」

「大抵てすとも。大抵ぢやありませんか。」

女の生徒どもはおえなの眞面目腐つた顔付に噴出させられる時が多かつた。冷かされても、おえなは賑かな女生徒どもと一所に居るのが好きだつた。

二

中學校の二年生、長男の時彦はこの春あたりから始終機嫌が惡るかつた。又身體も妙に祟つて、蒼い顔をして居た。虫齒ては一月以上も醫者へ通ふし、心臟が好くないと云はれて飴色の水藥を飲んて居た。可愛さに目の無い隱居やおえなに當り散らして居る中は未だ好いが、何うかすると疲れ切つて學校から歸つて來る虛弱な母親へまて氣むづかしい難題を云つた。

母親は一家五人の活計を張るために、瘦せた額を揉みながら三つの學校や私塾に裁縫を掛け持ちして居た。散々母親を困らせ泣かせて置いて、終には十七になる男の見得も無く、自分も袖口を噛んて止度も無く泣き立てるのてあつた。

離屋の老人が憤つて來て、時彦の腑甲斐無さを時々甚く折檻した。その時は恐れて小さくなつて居るが、陰に居ては女隱居の前ても何んても關はず、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「何んだ、馬鹿祖父○皆んな知つてるぞ。」と頭から馬鹿にして居た。おえななぞは始終癇癪的に取られて、膳を蹴つたり、髻を引掠り廻されたりした。

そんな時には人の好いおえなもムキになつて、「なんぼ和子様でも然うはさせない。」と憤り立てるけれど、直ぐ又悄れ返つて蒼い顔して部屋に引込んで居る時彦を見ると、ツイ可哀さうになつて強いことも云はれなかつた。

おえなは未だ時彦の四つ五つぐらゐからこの家に奉公して居る。中頃世話する人あつて、越後から來た鋳掛師の女房になつたが、酒飲みて怠け者の亭主は、おえなをスッカリ裸體に剝いた上て、乳飲兒と二人を置去りに姿をかくして了つた。八幡堂の宮下に何うすることも出來ないて困つて居るのを、今の隠居の方から探して連れて來た。兒童は山根の百姓家へ親知らずの條約てくれて了つた。

初めてこゝへ奉公に寄來された時、丁度おえなが十六てあつた。秋の末の雨が風に鳴つた晩て、裏の竹籔に栗の毬がバサリ〳〵落ちるのを聞いた。時彦は裁判官てあつた死んだ父の膝に抱かれて、一心に火鉢の灰を弄つて居た。目に蒼味のある、軟かな髮の毛の小兒てあつた。

「そら、フウやぢやない別な姉やが來るよ。姉やと云つて御覧。」とその頃は母親も未だ若かつた。

「姉や、これトッ、トッ、トッ。」と括れて肥つた掌に唾して見せて、小兒は反り返つてキャッ〳〵可笑しがッた。

その頃は綺麗好きな隠居も身體が丈夫てあつたから、おえなは臺所より重と時彦の子守をした。それ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

から時彦が腦膜炎にかゝつて、長らく病院に入院して居た頃は、おえなは妹娘のたけ子を背中へ受取つて、雪の降る夜中を一晩中病院の長い廊下を行つたり來たりして明かした事もある。たけ子の方でも母の懷をあきらめて、始終おえなの後を追ふて居たが、何う云ふものかおえなにはたけ子より時彦の方が最惜しくて、根もない兄弟喧嘩にも兄の方の肩ばかり持つた。

「姉や、馬鹿だ。坊をヒヱした。」たけ子は薄す唇を返して、好く母親に訴ひたものだ。

「お前、小兒を可愛がつてくれるのは好いけれど、餘り別け隔てをしておくれてないよ。たけ子に偏癖ても出ると惡るいから。」と見かねて母親が時々こんなことをおえなに云ふと、

「だッて、私はお孃樣が嫌ひさ。兄さんが穩和しいものだから、好いやうな我儘をなさるんですもの。それや兄さんを隨分ひどくなさいますよ。」と誰の前でもツケ〳〵云つて何うしても聞かなかつた。

時彦は病氣から此方、何うしても俯向きたがる大きな頭を据えて、惡戯ざかりの外の友達を探がすよりも、家に居て隱和しく遊んで居る方が多かつた。離屋の老人は又小さい時からたけ子が秘藏て、毎晩少しづゝの晩酌にも必らず妹娘を傍へ引付けて、大人のやうなことを喋らせて喜んだ。

その頃は女隱居も矢張り一所に離屋の方に居た。

中學校へ行くやうになつてから、母親が學校〳〵とその方ばかり氣を揉んで居るのに、時彦はこの頃制服の懷ろへ小說本など忍ばせて、學校とは全るで反對な方向の、草野原のある練兵場の方へ出て行くこともあつた。おえなが井戸傍から見て居るとも知らないでそちらの方へ出て行く後姿が急にヒヨロ

〳〵と伸び、女のやうに肩がスベリと落ちて、額から頬のあたりに光澤が出て來た。

三

ある日。學校の保證人の所へ行つた時彦はひどく勝れない顏してションボリ歸つて來た。頭が痛むとて、直ぐ蒲團を敷かせて寢た。その癖、耳も目も恐ろしく過敏になつて、茶の間の小さな話聲にまで直ぐ顏色を變へて、畏怖えるやうな動悸を波打たした。

それからと云ふもの、毎朝起されて學校へ行くにも妙に元氣がなく、傍が注意しなければ出て行く時間も忘れて居るやうに見える。

この樣子に一番早く氣の付いたのがおえなであつた。

外から歸つて來ても先づ窃つと臺所口からおえなを呼出して、「お母さんは。」「何所からか手紙が來やしなかつたか。」「お母さんが何か云つてやしないか。」と心配さうに確かめた上でなければ茶の間へは姿も見せないやうにして居た。

青葉が日に〳〵深かくなつて、その青葉が夕暮の濕りを招ぶやうに見えるこの頃の晩方なぞ、時彦は好く裏へ出て悲しさうに空を見上げて居る。遠くの田圃からカラ〳〵と蛙の啼聲が靜かに搖ふて來るのを聞き締めながら、物にはぐれたやうな寂しい顏して居る時もあつた。大事に飼つて居る鳥籠を內に取り込みに出た序に、おえなが聲を掛けて見ても、時彦は前のやうに素直らしい返事もしなかつた。

「何うしたの、和子樣。」

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

汗臭い顔を寄せると、時彦の大きな目は涙が一杯溜つて居た。

「こんな所に立つて居るからさ。魔が射しますよ。さア〳〵。」

おえなはツブの小兒でも扱ふやうに無理に手を引張つて家へ連れて來た。未だ小兒の時、母親に聞いた話に、北ヒチ(枝の事)の張つた大木には魔神が巣をかけると云ふ昔話など思ひ出したのであつた。

そればかりでは無い。時彦は近頃妙に鬱ぎ込んで了つて、何時も人を避けるやうにして居る。寄宿に居る生徒どもが阿彌陀籤を引いて、

「時彦さんも被來いよ。この頃は些つともお出てなさいませんのね。土曜日だから面白い事して遊びませう。」と態々呼びに來ても、時彦は何んだとか彼んだとか云つて、大抵行かなかつた。獨り居る部屋を突然になぞあけると、飛び上がるほど驚いて、顏を眞赤にして憤ることもあつた。

「何うしたんてせうね、御隱居樣、和子樣の樣子が餘程變てすよ。」とおえなは時々氣にして隱居へ話して見るのだが、

「あのぐらゐの時には色ンな事があるもんだよ。陽氣が定まると何んでもないことさ。」と事もなげに云つて居るが、おえなにはそれが何うも氣になつてならなかつた。

何日なぞもおえなが一人臺所で雜巾をさして居る所へ、時彦は茶の間に人の居ないのを見濟して、さも云ひ憎くさうに四角に包んだ新聞包を持つて來た。

「おえな。御苦勞だけれど、これを大町の本屋へ持つて行つてくれないか。手紙さへ出せば直ぐ解かる

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んだから。」と云つて、西洋紙へ書いた手紙を添えて渡した。

「これは御本てせう。」

「好いんだよ、その手紙さへ出すと直ぐ解かるんだから。」

何所か小兒〳〵した調子の殘つてる甘えるやうな言葉付きてオド〳〵しながら頼まれると、おえなは無下に斷はることも出來なかつた。晩の後仕舞を濟ましてから、鬢付油を買つて來ると茶の間へ斷つて、物置の木鉢の下へ隱して置いたその包を持つて本屋へ行つた。薄痘のある番頭がその本の表紙を返して見たり、所々の樂書を調べたりして、大きな銀貨を五六枚渡した。時彦はその中の一枚をおえなに遣らうとしたが、

「大丈夫てすよ。云つて惡るい事ならえなは屹度他へ云ひませんから。」と斯う云つて何うしても受取らなかつた。

そして、後になつてから時彦が何に使ふ錢だらうと色々考へて見たが、何うも思ひ付かない。母親へ内所て芝居を見たり、又卷煙草なぞ喫ふやうてはあるが、それぐらゐの小使は始終隱居をせびつて貰つて居る。この頃も部屋を掃除すると、机の抽斗から妙な寫眞が出た。裸體の女が青い木陰の草原へ寝轉んて居る繪てあつた。

四

五月の十九日は父の日てあつた。この父はおえなを白痴か癡り者のやうに云つて、一度も優しい言葉

をかけたことが無い。それでも祥月忌には寺詣りもした。その歸り路久し振りに、筆屋へ嫁付いて居る幼友達の家を訪ねると、九年前に別れた良人の噂を友達から聞いた。この頃また北海道邊から戻つて來て、もとの商賣をして居る。捨てゝ行つた娘の事を氣にして、是非一度は探しても會ひたいと云つて居たと云ふ。

おゑなはその話を聞いて、長く思ひ出しもしなかつた娘の事を思ひ出した。好く目を吊し上げてヒイ〳〵泣く兒であつた。

今年はもう九つ。どの位大きくなつたか、些いと見たいやうな氣もしたけれど、長い半日を筆屋の店下に飽々するほど晝寢して、家へ歸る頃にはもうスッカリ娘の事など忘れて居た。

それよりは離屋の老人の昨今が心にかゝつた。今日も出掛けに大聲して隱居と爭ふのを見た。常に穩和しい女隱居も、老人と爭ひさへすると三四年前にあつた事を思ひ出して、誰の居る前でも口穢なくおゑなを罵るのであつた。

「私は御覽の通りの病身。自分の身體さへ持て餘して居るのですから、トテも他のお世話など出來ません。あの時の御相談づくで斯うして居るのです。貴方の事は一切おゑなが致す譯ぢやありませんか。」

と取澄ました強味になつて老人を云ひ込めるのであつた。

斯う云はれると老人は一言も無い。一徹らしい口をモガ〳〵させて、唯無闇に家中を罵り散らすより外は無い。

「學者、學者。大學者のお嫁樣。」默つて居る時彦の母親にまで男年寄の頑固な嘲弄を浴びせて離屋へ引込んで行く。

老人もその順序を好く承知して居ながら、良人と離れて輕るく涼しさうに暮して居る隱居さへ見ると、何彼に就けて氣が興つて來るらしかつた。時彦の事ばかりでも幾度爭ふたか知れない。何時か警察本部の仕合會から醉つて歸つた時などは、友達と二三人て畫[illegible]肩を組んで出て來た孫の姿を見たとて、傍に居れば短刀で突き殺してもしさうな事を云つて憤つた。何時もたけ子と二人だけでコツソリ離屋で喰べるのを樂しみにしてる土産の折詰までそこらへ投げ出して、木綿縞の稽古袴のまゝ茶の間へ座つて動かなかつた。

「そんぢや一體和子樣を何うすれば好いんですね。」

隱居も老人の劍幕に恐れて默つて居るのを齒痒がつて、おえなは横合から口惜しさうに口を出した。

「主が何んだ、モッコ擔ぎの娘の癖にして。」

「モッコ擔ぎでも何んでも好い。默つてれば限なく勝手な事ばかり云ふ。」

老人が齒嚙みしながら散々踏み蹴しても、おえなは何所までも屈しなかつた。眞蒼になつて顫えながら口下手な老人を云ひ込めた。

氣の弱い隱居は幾ら止めても聞かないのに唯オロオロして了つて、寄宿の女生徒どもが恐々窺きに來るのをばかり障子際から癇癪聲して叱り付けて居た。

五

雨あがりの空が桐の花の紫を濃く染めた。濡れた土から青紫蘚の若芽が青々と萌え出して淺い匂をそこらへ浮かした。おえなは風の涼しい木の蔭に跼んで朝飯后から洗ひ物して居た。隱居はたけ子に新しい袷を着せて親戚の法事に行き母親は學校の試驗調べに行つて誰も居なかつた。

時彥が一人長々と茶の間に寢轉んで小說本らしいものを讀んで居たが、正午の時、飯の用意に行つて見るとそこに居なかつた。若し離屋かと思つて呼びに行つたが、そこにも居ない。日の當る火鉢へ膠の土鍋を掛けて、太い緣の眼鏡をかけた老人が胡座を搔いて私得金取りの弓弦を卷いて居た。

「和子さんは。」

「來なかつたよ。裏かな。」

おえなだけ一人で晝飯を濟まして、又井戸傍で洗濯物して居る所へ、ヒヨックリ時彥が裏口から顏を見せた。

「おえな」

「何んです。」

「おえな。」

時彥は呼吸の窘つたやうな聲で斯う呼んで、何か後を云ひたさうにソワ〳〵してそこに立つて居た。

「何うしたんです晝飯も喰べないで。何所へ行つてたんです。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「おえな。」と云ひ掛けて、急に時彦は火のやうに眞赤になつて裏の方へ驅つて行つた。

暫くして時彦が又出て來たが、何か探し物でもするやうに、周圍にばかり氣を取られて落付かない素振りであつた。おえなに顏を見られると、逃げるやうにして弓座敷の方へ引込んで行つた。

行つても尙ほ思ひ切り惡るく、興奮した顏に眞蒼な入つ手の照り返しを浴びながら、上り口の戸の蔭にかくれておえなの洗濯して居る姿を窺いて見て居た。

近頃メッキリと光りを持つた白雲は、凝固りながらカラリと晴れた靑空を靜かに動いた。おえなは肘の上までシャボンの泡に濡らして、小聲に唄を唄ひながら洗濯して居た。髮際から流れ出る汗を時々着物の肩でぬぐつた。

拔けさうなほど懶るい腰骨を伸しながら、餘り音がしないのを不思議さうに弓坐敷を窺いて見に來ると、薄暗らい隅から時彦が飛んで來た。脅されてもしたやうな眞蒼な顏をしておえなの前に塞がつた。目を痙攣らしてワナ／＼顫えて居る。

おえなは大人にも見ない恐ろしさをこの病身な少年の顏から見た。

寄宿生は春休暇で一人も居なかつた。空な机が壁際に重ねてあつた。押入の中から行李の蓋が外へ轉び出て、赤や黄や濃い色の女の肌に付けるものがそこへ出て居た。

六

その事あつて以來、時彦の目は唯おえなの跡ばかり追つて始終不安さうに落着かなかつた。誰と話し

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て居るのを見ても、直ぐ顔色を變へて喚ぎ出しに來る。

傍に人の姿の見えない所ではいつも、「なァおえな。勘忍してくれ、誰にも云つてくれるな、なァおえな。」と煩さいほど付き纏つて謝りに來る。

「那地へ行つて下さい。貴方のやうな穢れた人ァ見たくも無い。他を何んだと思つてる。傍へ來ちや不可ません。」とキツパリ云はれて少年は何時も悄々と涙含んだ。

「他へ云つたら、僕ァ死ぬぞ。本當に。」と思ひ詰めた少年の目が顫えて居た。

小兒の時から一心に思ひ詰める時彥の性質を知つて居るから、時には氣の毒になつて慰めてやらうとは思ふけれど、人の前では然も小兒〱して素直らしく、振舞ふ姿を見ると面憎くもあつた。

何時か腹の立つた時、あるだけの智慧を搾つてそれと無く隱居だけへは話して見たが、隱居は却つておえなの顔を見詰めて、「お前馬鹿な事を云つて。」と受付けもしなかつた。

五月も過ぎて、もう六月。日に伸びる梅の青葉に塞がれて、屋敷内が急に狹く小暗く見える頃、時彥は惡るい〱と云つて居た腸が本當に惡るくなつて、醫者を呼んで見て貰ふやうになつた。寢床を隱居の部屋へ移して、食物も牛乳と鷄卵だけに限られた。

それでもおえなの顔さへ見るとその事を氣にして、力なく沈んだ目で始終哀願して居た。

夏近い強雨が、振り撒けるやうに青葉にそゝぐ晩であつた。癖になつて撫てゝ貰はなければ眠り付かれない背中を、おえなは隱居の代りに撫てゝやつて居ると、時彥は枕へ顔を當てゝシク〱泣いて居る。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

隱居が心配して色々聞いて見ても何も云はなかつた。

突伏すのを無理に引起してランプを寄せると、眉の軟かい、肌の軟かい少年の顏は涙に片頰がひたつて居た。

「おゑなを那方へ遣つて、お祖母さん。」と時彥は俯伏しながら手先きを振つて居る。

おゑなは蒼い顏して自分の部屋へ退つた。そしてピシャ／＼と穢なく土の上に降る雨を聞きながら色々の事を考へた。

まだ十四五の時、金魚賣りに來た上方の若者に、暗らい田圃を引き廻されて、笑ひながらまた明日と云つて梨子を貰つて別れた事もあつた。その明日も、その明日も、若者は姿を見せなかつた。然しその後暫くの間は、夕方撥釣瓶の下に鬼茸草が白い小花を付けてるのを見ると妙に涙がこぼれて爲方が無かつた。

翌朝。火も燃し付けない中におゑなは隱居の部屋を明けて見た。病人は軟かさうな口許をゆるめてスヤ／＼鼾して寢て居る。長目に延びた軟かい髮の毛が何んとなく顏色を透通るやうに見せた。

窃つと搖り起すと少し目を明いた。

「和子樣。心配しなくとも好御坐んすよ。ゑなは憤つちやゐませんよ。」

「うゝ。」と云つて、覺め切らない時彥は塵埃腐い髮油の匂に寢返りした。

「和子樣。本當だから早く好くおなんなさいよ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時彦は夢中て居ながら舌を鳴らして返事した。

「和子様。早く好くなるんてすよ。」と最一度念を押して臺所へ來ると、もう早起きの生徒どもは井戸傍へ出て、唱歌を唄ひながら顔を洗つて居た。

朝日が眞直に流れて來て、カラリと晴れ上つた朝てあつた。

「おえなさん、お早う。」

「皆さん、お早う。」

おえなは何んとなく人を許るした輕るい美しい心持になつて斯う生徒どもへ挨拶した。

七

離屋の老人の癇癖はこの頃特に募つたやうだ。酔つた時は素より、酒氣の無い時ても何彼に就けてたゞ女隱居に喰つてかゝつた。

「お前は妻だ。女房が良人の世話に飽きたと云ふ事が何所の國にある。」

など憤り立てゝ、何年となく斯う暮して來た約束を破らうとする事もあつた。又たけ子を連れて自分だけ他に別居するなぞと云ひ募る時もあつた。

然し女隱居はたゞその時ばかりて別に氣にも留めなかつた。矢張り孫どもや女生徒どもの世話にかゝけて居た。以前居た女生徒が小兒ても連れて田舎から泊りがけに出て來ると、隱居はそれと一緒になつて芝居だ寄席だと嫁に小使を貰つては出歩いて居る。そして、歸つて來ても當分二三日はその話て持ち

切つて居た。

「お母さん、若い人達ばかり預つて居るんですから、餘りそんな遊び事の話などなさらない方が好御坐んすよ。學校ぢやもう堅く禁じてあるんですから。」と苦勞性な嫁にいくら禁められても、矢張り外を出歩るく方が多かつた。

「お母さんにも困るのねえ。好い方だけれど、餘り氣樂過ぎて。」時彦の母は時々こんな愚痴をおえなに聞かせた。おえなはこの人の身を思ふと氣の毒になつた。膝の上に幼兒を二人殘されて、旦那に死なれてこの方の苦勞は普通や一通りぢやない。矢張り亭主など持たない方が好かつたのだと、鈍な頭のおえなにも、時々思出したやうに考へる時があつた。

然う云ふ時には唯小兒だちの事を云つて慰めるより外はなかつた。

「だッて奥樣、最う少しの辛抱ですよ。今五六年も經つて御覽なさい。それこそ立派な御隱居樣です。」

「私もたゞそれだけに引かされて居るんだけれどね、何日一度面白いと云ふ日があつたてはなし、詰らないものさねえ、私など餘ッ程割の惡るい籤を引いたんだらうよ。」と瘦せた頤で寂しく笑つて居た。

然し斯うして將來を見的に話合ふ時には、決つて母親は時彦のこの頃の危い行狀に心を曇らして居た。おえなもそれは知り拔いて居る。

「まアそんなに心配したものでも御坐いませんよ。その中には何うかなりませう。」

「本當だねえ。この頃は先方を考へるのが恐ろしいやうになつた。小兒に乳を吸はせながら二十年も三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十年も遠い將來を考へて居た頃の方が未だ樂みだつたよ。」と云つて居た。

一日の立ち續けに凝つて來る肩を少しづゝ揉みほぐしてやるのがおゑなの務めであるが、厚い綿入の上から肩胛骨の薄く痩せたのが掌に觸る。

梅雨が過ぎて、爽かな夏の夜が續いた。時彥は友人の家へ數學の復習に行くと云つて、夜家を出掛ける事が多かつた。初めは母親も心配しておゑなに樣子を見せにやつたりしたが、全く友人の家に勉强して居ると云ふ返事を聞いて幾らか安心して居た。遲く歸つて來る少年をいたわつて、隱居は甘いものなぞ要意して待つて居た。

何うかすると、この頃、臺所に居たと思つて居るおゑなの肥つた姿もそこに見えない時があつた。

「何うしたのさ、あれほど呼んで居るのにお前聞えないのかい。」と入口から隱居に口を尖らされても、

「あんまり夜が好いもんですから、裏の畠の方をブラ〳〵して居ました。」

「噓をお吐き。私ア裏の方もスッカリ見たんだよ。」

「いゝえ、居りましたよ。」

「又この强情ッ張り。私が出て探して來たんだよ。」

「いゝえ。裏に居ました。」

何んと云はれてもおゑなは强情を張つた。ウッソリして居て顏色も變へなかつた。然しその小言を聞

く度に時彦は兩手で耳を蓋して、自分の部屋に小さく竦みながら、目ばかり鋭くその方へ振り向けて居た。

「サッサとたけ子のお床を敷かないかね。先刻から斯うして蚊に喰はれて居るぢやないかね。本當に、お利口な癖に强情ばかり强い。」些いと立ては直ぐ傍にある搔卷を取るにも不精な隱居は小言を云つて居る。

晝間の時彦は、なるべくおゑなの目を避けるやうに氣を痛めて居た。顏を見るのが厭だと云ふより、寧ろ恐ろしいやうに心を縮めて居た。以前よりも酷くおゑなに當り散らして、人の前で物を放り付けたり足を揚げたり、隨分思ひ切つた手暴い事をした。

獨り居る所へおゑなに寄られて、たゞ普通の話をしかけられても、時彦は周圍を怖さうにキヨト〳〵聞いて居て、迷惑さうな返事ばかりして居る。

「那方へお出てよ。おゑな。」時彦は黄色ばんで大きなおゑなの顏を見まいとして外方を向きながら、頼むやうに云つて居た。

それでもおゑなが傍を去らない時は、突然に用も無いたけ子を遠くから呼び掛けて見たり、又は何所からでも聞えるやうな大聲で不意と唱歌を唄ひ出したりする。

然し又、土の香の搖れる夕暮などは、ハアモニカを持つた白地を着た時彦の姿が、窃つと井戸端を廻つて、蚊いぶしの杉葉が洩れて來る臺所口から窺いて見て居る事もあつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

八

夏休暇中いろ〳〵の友達が時彦の家へ寄り集つた。職人などのやうに指先に鹿揉皮の細い鼻緒を穿ッ掛けて肩を揺つて歩るく今西さんや、頭髪を角刈にして居る太田、縁無しの眼鏡ばかり磨いてる筑前琵琶の上手な戸田なぞ。多くは私立中學の生徒が多かつた。東京から歸つて來て居る坂本は中ても好く來て居た。

坂本は襟の立つた夏シャツの袖口を派手なリボンて結んて、何時も分不相應な香の好い西洋烟草をふかして居た。時々茶の間へ來ても、隱居や母親にもの馴れた挨拶なぞして居た。

おえなは何んと云ふ譯がなく、坂本の粘つたやうな低く笑ふ聲がいやてあつた。

離屋の老人はこの友達どもが大嫌ひて、麥喰ひ馬のやうな奴等ばかり集めて居ると始終時彦に小言が絶えなかつた。又態々書生どもの集つて居る所へ行つて、ガタピシ押入を明けたり何かして居る。書生ども丶老人の姿を見ると皆急に怠けた坐勢を直して居た。

「夏休暇中の事だもの、も少し樂に遊ばせてお遣んなさい。貴方のやうにしては、時彦だッて友達に耻を掻くぢやありませんか。」と隱居が見かねて注意しても、

「時彦の奴の面を見なさい。イヤに生白くなつて腐り切つて居やがる。」と一徹に憤り立て丶居た。

坂本はおえなの顏を見る度に、妙にニヤ〳〵して冷嘲むやうな笑ひ方をするので、おえなも時々氣に掛ける事があるが、又考へて見ると誰が見て居た事てなしと思つて安心して居た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これまで最上から來た米搗きの男でも、直ぐ下町の社家の家に居る下男でも、一度も他から氣取られた事がないと離屋の老人の事も默つて居れば知れずに濟んだものを、例の頑固な一徹から氣が咎めて、然も隱居が務め足らぬ面當てでもあるらしく自分から狂氣立つて喋つて了つた。

梅の實が黄色く熟して、長雨の上にボト〳〵腐れ落ちる頃から、おえなは、妙に身體が懶かつた。夏は好く板の間でも物置小屋の陰でも、日かげに手足を投げて晝寢ばかりして居た。隱居に注意されても、毎年の夏負けだと云つた。又自分でも然うばかり思つて居た。

然し、自分でも怪しいと思ふほど氣の興つ日もあつた。そんな時には誰にでも遠慮なく當り散らした。隱居の前で時彦にツケ〳〵云つて、氣の小さい少年をヒヤ〳〵さした事もあつた。時彦は唯もうおえなを恐れて、蒼味持つた沈んだ目の底からオド〳〵しておえなの擧動を窺つて居た。

或る晩遲く時彦が歸つて來て、おえなの寢て居る出窓を叩いた。その日は坂本と一所に松島に行くと云つて、辨當まで用意して家を出て行つた。

暗らい玄關に躓きながら戸を明けると、月光が降るやうに蒼く流れ込んで、ションボリ外に立つて居る時彦の肩を薄すく見せた。

「何うしたんだね、今頃歸つて來て、坂本さんと喧嘩でもしやしないか。」と隱居も白い寢間着のまゝ起きて來たが、時彦は默つて小さくなつて居た。

「さア〳〵、お祖母さんの蚊帳へ入つてお伏み。もう餘程遲いよ。」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時彥はそれても自分で蚊帳を釣つて、仆れるやうにそこへ寢た。

次の朝、珍らしく早く坂本がニコ〳〵訪ねて來ると、時彥は濡手拭をもつて隱居に額を冷して貰つて居た。

目縁がボッと腫れ上つたやうに見えた。

「何うしたんですね、坂本さん。貴方が付いて行つて下さるから大丈夫だと思つて居ましたのに、何しろもう二時てしたよ。ビックラシたんですよ、本當に。着物なんか夜露でグッショリなんですものね。」

「イヤ、私が惡る御座んした。いゝえ、時彥も短氣なんですよ。」と坂本は時彥の顏を窺ひ〳〵その時のパッを合はせるやうな事ばかり云つて居た。

「もう遠足なんても出す事ぢやない。今朝見ると貴方、顏が眞赤になつてるほどの熱なんですもの。」

と隱居は坂本の所爲ばかりに怨んて居た。

その後暫くの間坂本は姿を見せなかつた。時彥も穩和しく家に籠つて居た。けれども、舊曆七月の頃から又些い〳〵坂本やその他の友達が遊びに來た。もうソロ〳〵九月の學校が初まらうと云ふのに坂本は東京へ急ぐ風も無く、ブラ〳〵遊んてばかり居た。

時彥の家を宿に一晩琵琶會を開らきたいなぞと、時彥から母親へ申し出させて見たが、母親は考へて見る迄も無く、

「若い娘さんだちが居ますから。」キッパリ自分から斷つた。

濕氣の多い浴衣が肌に粘りついて、心の奥から寒さを覺えるやうな或雨の夜であつた。おえなは雨の降る中を或る暖かな嚴丈な格子造りをたゝいた。

二三日恐ろしく腰が痛かつて、その上嘔氣はあり、仕舞つて置いた蒲團を押入から引出して寝て居る所へ、時彥の友達の一人が他の用ある振りしておえなを外へ呼び出した。そして、繁吹の吹き掛ける門外でやゝ暫らく話して行つた。

「何んですつて、和子様が。」斯う聞返したおえなの聲は恐ろしく驚いて居た。そして、直ぐ、「あゝあの坂本だ。あれが惡るいんだ。」と獨りで附加へた。

フテ〳〵といきまく女どもや坂本のかげに時彥は小さくなつて居た。おえなは用意して來た自分の財布から云ふだけの錢を出して時彥を受取つた。おえなは時彥の手頸をつかむやうにして雨の中を家へ歸つた。

門口まで來ると、又急に譴り出して何うしても家へ入らぬと云ふのを、おえなは漸つと臺所から廻して、他に氣が付かないやうに時彥の部屋へ入れた。

ビシヤ〳〵と泥をはね上げながら、小さくなつて傘にかゝんで居る青年の唇ばかり赤い顏を見ると、おえなは何んとも云はれぬ不快な心が出て、酷らしい痛い目に遇はせて見たいやうな氣もするが、又何んとなく他を憫れむと云ふ、物足りない中にも美しいやうな心持にもなるのであつた。

拂つてやつた金にしても、滿更惜しくない事も無かつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

九

九月の學校が初まつても、時彦は氣がソワ付いて眞面目に通ふ風も無い。何の彼のと名を付けては學校を休んだ。神經質な女親が一層氣を揉んで、泣きながら意見しても、その時は身を入れて聞いて居るが、矢張り精出す模樣がない。學校を止めて繪書きになるの、彫刻を稽古したいのと、そんな事も云つて居た。

「そんな事を云つて、お前お父樣に濟みますか。好く考へて御覽。お前この頃はお父樣も見えなくなつたね。」

　母親は佛壇の長押に揭けてある、檢事服を着た良人の肖像の前に時彦を何時までも座らせて置いた。母親の心では何所までも良人の歩いた道をその子にも歩るかせやうと思つたのだ。

「僕ア駄目なんだよ。お母さんは……僕と云ふ者を知らないて、無理だ無理だ。僕ア駄目なんだよ。」

「いゝえ、何が駄目てす。人間に駄目と云ふ事はありません。」

「何んにも知らないからだ。」

「お前、何時もそんな事を云つて私を嚇かすけれど、一體何が駄目なんてす。何も駄目な事はありません。」

　時彦は何んにも云はず、唯無上に泣き立てるより外は無つた。そして、始終口癖の樣に東京へ行く〳〵とそればかりを云つて母を責め立てた。この頃は離屋をさへ然う恐れず、年寄に向つても隨分ツケ〳〵

と言ひ散らした。老人は口惜しがつて、好く弓の折杖など持つて時彦を追ひ廻した事もあつた。

「何んだ、馬鹿爺イ。知らないと思つてるか。何んだ。」と時彦は逃げながらも、蒼褪めた顔から毒口を吐いた。

「不孝者。何を知つてる、さア云つて見ろ。」

「知つてるとも。僕ア知つてる。」

「それ、だから云つて見ろ。」

「云ふ。」

斯うは爭ひながら、流石に口へは出せなかつた。憎むと云ふよりは、根のある毒のある目付て老人を睨み付けて居る。そこへ、拍子ておえなでも顔を出すと、又爭ひが大きくなつた。時彦は少しの事からおえなを撲つたり蹴つたり、隨分思ひ切つた事をして老人の目に見せた。

「何をなさる。」

おえなも然う／＼は默つて居なかつた。時彦と取組(とつくみ)合ふて泣き喚いて居る時が多くあつた。母親や隱居は唯ハラ／＼して見て居るより外は無つた。

二百廿日の前の日。この年は意外に平穩に九日餅をすました。離屋の老人は袴を穿いて、供餅を屋敷の四神樣や穀神樣に納めて廻つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

次下りをおえなに勤めさせやうと思つても、おえなは今年ばかりは何うしてもと斷りした。隱居は内々に月の日を繰つて見て、

「何うしたんだね、今年に限つて、何か障りのある頃ぢやなし、何うしたんだよ、本當にさ。」

おえなは少し唇の色を顫はせたが、唯さりげ無く斷つた。

「おえな、何うした、早く番竹を持つて來ないか。」老人は明神樣の祠に踞つて切りに呼んで居た。

次ぎ下りは寄宿に居る生徒の一人に、いやがるのを無理に頼んですました。

明るい日であつた。梨の葉はゴソ／＼筋張つて、白い秋の風に葉裏を返した。弱い日がそれを漉つて、黑い土の上に顫えながら落ちて居る。乾してある白いものや、垣根の先に尾の赤い蜻蛉が來てとまつた。ヂッとして居てスイと飛ぶ。

おえなは物置小屋の薪の前に立つて、ボンヤリ瀬戸裏を眺めて居た。地が波打つて自分へ薄つて來るやうにも見えた。

おえなの額際が氣を付けて見ると、光りを持つて髮の毛も薄すくなつてる。

「厭ね、おえなさんのお陰で、トンだ大役を云ひ付かつたよ。」女生徒は三寶を持つて、眞赤になつて戻つて來た。

「何うしたんだよ、おえな、氣分でも惡るいんぢやないか。」

隱居は心配して聲を掛けたが、おえなは、「いゝえ」と云つて矢張り喪神したやうにクルメく日射を見

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て居た。

「可笑しな人だ。」

「可笑しな、おゑなさん。」と女生徒も三寶を置いて笑つた。

その時、庭のドウタン森から出て來たのは時彦であつた。年役にやはり袴を穿いて、拂ひ竹を持つて來た。そして、初めは皆と一所になつて笑つて居たが、それでもおゑなが默つて居るので、女を見る目が見て居る中に不安さうに光つた。

家へ入つて一通りの宣命を濟して、再び裏口から出て來た時には、おゑなは井戸側にもたれてボンヤり井戸の水を見て居た。時彦も中を窺くと深い黒い底に人の顔が二つカッキリと映つた。

「何うしたの、おゑな。氣分惡るいんぢやないの、おゑな。」

少年の目はブル／＼顫えて居る。

おゑなはそれを振り拂ふやうにして、急にそこを歩るき出して臺所へ入つた。そして、冷たい板の間へ腰を下した。

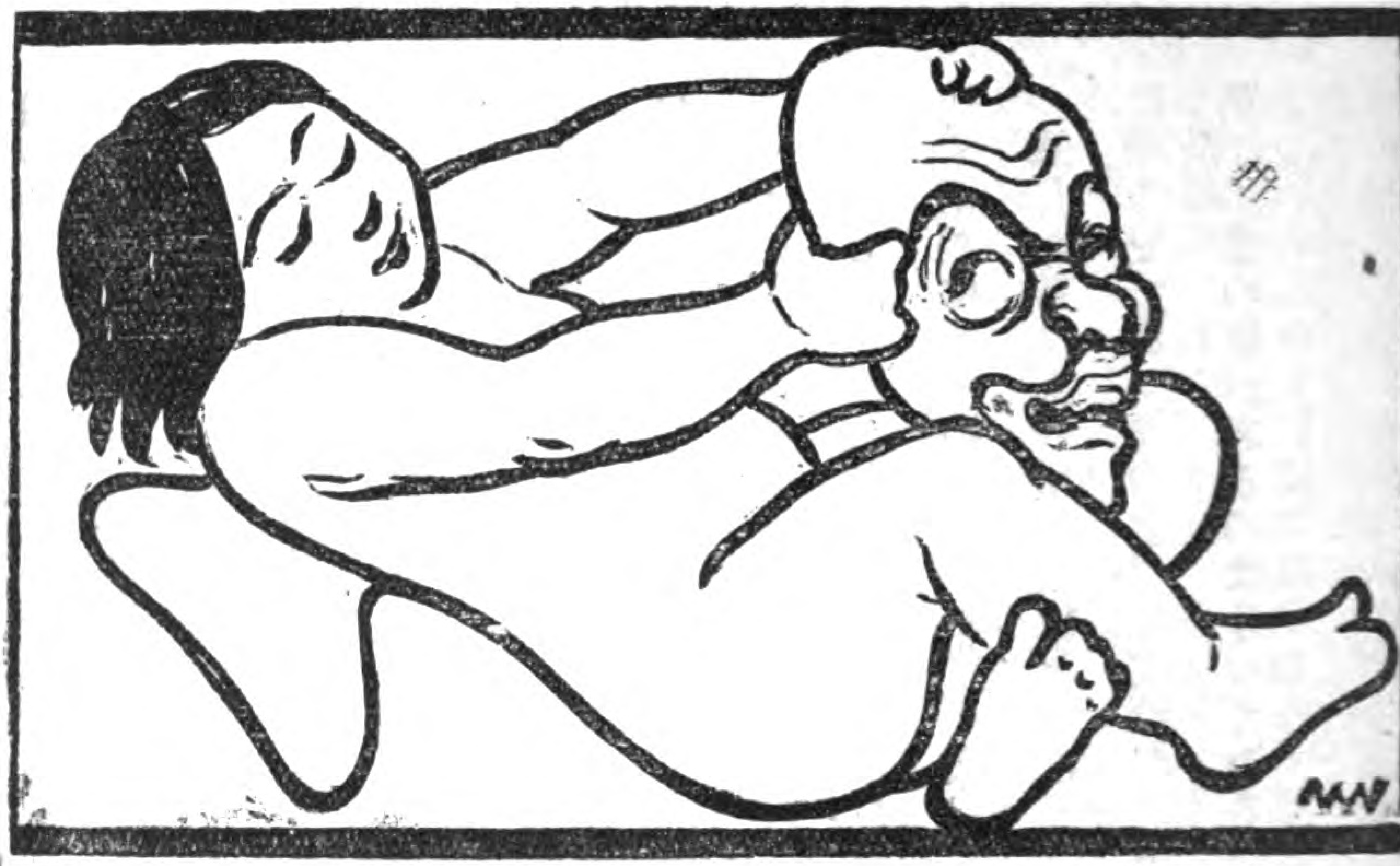
少年は默つて門の方へ驅出して行つた。おゑなは默つて遠ざかり行くその足音を聞いて居た。（完）

次號小說豫告

長篇小說 **舊痕**…………波山不規夫作

觸れなば絶えなんとするデリケートなる情緒と近つく一切を燬き盡さんとする火の如き感情と相集つて此一篇を成す暗き過去を有する自意識強き現代青年の戀の苦悶描き盡して紙に聲あり「裏道」を草して其力量の凡ならざるを示したる著者の自信ある此作文壇に貢獻する所少からじ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



藝者になつた女

岩野泡鳴

一

雷門からの電車が淺草橋の方へ一丁ばかり來た茶屋町の右がはに、鳥渡立派なけんざん屋がある。

間口三間の店さきには、鰹節やら、玉子やら、海苔やらを見場よくかざり付け、眞ン中にはおほきな島臺を据ゑてある。兩脇のがらす棚には、品物を入れる桐の箱、ボール箱、鑵などを綺麗に並べ立ててある。

そこのおかみさんは年中樂に座わる暇もないと云はれる。と云ふのは、店が繁盛するからばかりではない。眉を剃り落

したおかみさんが出てゐなければ、その日のお客の數が少いのである。

名をお常と云ふが、客に對して愛嬌があり、なか〳〵氣前がよく、その上、美人だ。仲店の紅梅焼店のおくめほどは評判がないが、——おくめは店の看板に貰はれてゐたのだ、——家つきの美人として、人々には大野屋の小町娘と歌はれてゐた。

町家のことだから、子供の時に、三味線や踊りの稽古にやられたが、性來好きであつたかして、隨分上達した。して、獨り娘の器量自慢の兩親がお世辭上手の師匠におだてられ、娘を淺草の三社祭りに踊らせた時などには、若い衆どもにやんやと云はれたものである。十二三の頃からして、もう、評判になつてゐたのだ。

そこの事情を知らないものは、他に先んずるつもりで、早くから仲人を入れたり、直接に申し込みをしたりして、お常を嫁に貰はうとした。然しこの女は『家つきの獨り娘だから』と云ふ口實を以つて、いつも兩親はことわるのがお定り文句であつた。家には、實際、かの女より外に子はなかつたのである。

然しお常は大野屋の血統を受けてはゐなかつた。內狀を知つてゐる人々の話に據ると、觀音堂のそばに棄て兒てあつたのを、先代の大野屋夫婦が拾つて來て、育てたと云ふうわさもある。それは兎も角、別に本當の親があるのは分つてゐる。實父は今も落語家の古株であるし、實母はまた大きな某酒屋の隱居の女房だ。

實父はもと道樂者で仕かたがなかつた。それが爲めに、一家の困窮がひどくなつて行くばかりであつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。餘り辛抱し切れないので、實母は自分から進んで離縁をして貰つた。すると、實父はどう云ふつてがあつたのか、道樂の結果にあり勝ちな落語家になつてしまつた。

落語家になつてから、直ぐ父は多少かねも儲かる樣になつた。すると母の方ではまだ未練があつた上に、樂に暮せる樣になつたらしいのを見たので、再び父と同棲することを申し込んだ。然し既に別な女が出來てゐて、その申し込みは退けられてしまつた。

その頃のことだらう、母は乳呑み兒をかかへては人仕事もしてゐられないし、また多少の燒け氣味もまじつて、その兒を棄てたか、遣つたかした。そのどちらであるとも、お常は子供の時には知らなかつた。養父母に當る先代夫婦はかの女に實際を語らなかつたばかりか、本當の獨り娘として可愛がつてゐた。

『あたい、棄て兒だつて、さう？』とは、お常が子供の時から不斷大野屋夫婦に根問ひした言葉だ。隣り近處のおばさん達がいつもさう云つて聽かすからである。

その度毎に、養父母はお常を眞面目な顏つきで叱る樣な、なだめる樣な返事をした。殊に、かの女を可愛がつたのは養母の方であるから、養母はいつも同じ樣な云ひまぎらしを云つた――

『馬鹿をお云ひでないよ、お常！棄て兒の樣なものなら、何でこんなに可愛がられようぞ？』

『だつて、けふ、また隣りのおばさんもさう云つたもの。』

『隣り近處の人は、お前が美しい兒であるので、何か難癖をつけようとするのです。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「だつて、ね、お母さん、あたい、幾度鏡を見てゐても、どこもお母さんにも、お父さんにも似てゐるところがない、わ。」

「そりやア、お前、世間にはよく似ない兒があるものです。」

「そんな兒はきつと親不孝よ。」

お常はこんな心持ちて、暇さへあれば、鏡を見てばかり子供の時代を暮した。どこか兩親に似てゐるところが發見されないか知らんと思つてのことだが、兩親のおもかげはどこにも見付からなかつた。親はどちらも不の字付きの顔だが、自分はどの點に於ても缺點と云ふ缺點がない。

割合ひに色の白い顔は下ぶくれて、さう長い方ではなく、その全體を引き締める目は鈴の樣に圓く、ぱッちりとして、黒目勝ちの光があり、小鼻が開き氣味であるのも、鼻筋の格恰がいい高まり方で整へてゐる。その上、口は、笑つて見ると、どうしても、江戸ッ兒らしい愛嬌が兩方のゑくぼにまてよくあらはれる。また怒つた眞似をしても、どこかにぴんとした心意氣が出る。

「へん、何だ、べらんめえ！」と、かう、われながらきやしやな腕てもまくつて見たくもなる。

お常は自分自身が最も可愛がつた。養父母はまたそのお常を可愛くつて、可愛くつてたまらなかつたのてある。

店には、お常より十四五才も年上の勝さんと云ふ番頭がゐた。勝次郎と云ふのだ。もとは醫者の子て、學問も可なり教へ込まれたのだが、父の醫者が失敗してから、この店に住み込むことになつた。商賣の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

道にかけても、なか〳〵巧者であり、また男振りも十人並み以上であるから、大野屋夫婦は、お常の十二三才の頃から、勝次郎の叔父に證文を入れて、勝次郎を養子にして置いた。して、お常も渠を「兄さん、兄さん」と呼んでゐた。二人の間に最初の兒――女だ――が出來たのは、お常の十六才の時だ。それでも、「兄さん」の呼び名はやめない。

「なぜおれをあなたとか、何とか、亭主らしく呼ばないんだ」と、勝次郎がなじることもある。すると、

「あなたなんて云へるもんですか？呼び慣れて來たものを急に直すと、却つてをかしい。」

「何がをかしい？夫婦になつてしまつた以上は、さう直すのが本當だ。」

「さうお直しよ」と、養母もはたから口を出し、

「勝の云ふのが尤もだから。」

「夫婦の樣な關係が出來た上で、なほ兄さんなんて云ふのは、それこそ却つてをかしい。そら〳〵しい。まさか、勤めの身ぢやアあるまいし。」

「兄さんでもいいぢやアないか？藝者の樣で」と、お常は微笑するばかりで、一向それを直さないのである。

柳橋が近いので、かの女はその社會の流行などにはよく注意した。餘りお白粉などは付けないで、身なりを意氣に、意氣にとばかり苦心した。して、洗ひ髮のまゝ、横縞のお召の單衣を素肌に着込んでゐるなどは、近處の人々の度々見たところだ。して、また、勝次郎の前で、三味線の意氣な爪彈きをする

ことも度々ある。

『あのかみさんはきつと浮氣者だよ』と云ふ評判は廣まつてゐたから、近處の若い衆や出入りの職の者などが小當りに當つて見るが、振ひつきたい樣な愛嬌にただ魅せられるばかりて、何等の手ごたへもない。

二

勝次郎との間は至極圓滿て、いさかひ一つしたのを見たものがない。無論、勝次郎の方から、ぞッこん、まいつてゐたのは事實だ。兩親と亭主として、お常には仕たい放題にさして置いたからでもあらう。芝居に行きたいと云へば芝居にやり、花見に行きたいと云へば花見にやり、衣物を買ひたいと云へば衣物を買つてやつた。衣物などは、流行を、流行をと追ふて行くので、いくら高い代價を拂つても、一年しか持たない。二年目には、それを賣り拂つて、また別なのに買ひ換へてしまう。

大野屋はさうおほきな金持ちではなかつた。然し店の株とお常の評判と勝次郎の勉强とによつて、一家の女王を思ふままにさすくらゐのことは出來た。かの女は實際貧乏といふことを知らない。然し人の貧乏くさいのを見ると、それが非常に嫌ひてならないのだ。して、成るべくそんなところへは近づかない。

勝次郎には、その父が失敗した時、大變世話になつた須藤吉則といふ叔父がある。或小學校の校長で、いくら年を取つても、若いものに負けん氣の、極く磊落な男だ。この人だけには、お常も一歩ゆづつてゐ

て、餘り奇麗でもない實だが、そこへは度々遊びにも行き、叔父さん、叔母さんと云つて、よく親しんでゐる。

然しそれも、だ、自分の店や自分自身のことに就ては、いつもわれから愛嬌を振りまく樣に見えてゐるかの女が、一般の人には勿論、親類つき合をしてゐるものに對しても、少しもお世辭と云ふものを云はない。ただぺら／＼と自分の云ひたいことを云ひ、自分の聽きたいことを聽いて、それでいつも話はおしまひになるのだ。

『氣まま一方に育つた女だが、ひねくれないで面白い子だ』と云つて、叔父の吉則は自分の小い娘（芳子と云ふ）よりも多く可愛がつてゐる。渠にはお常が亭主持ち、また子持ちであると云ふことを思ひ浮べさせないほど、お常の言葉振りや態度に若々しい愛嬌があつた。かの女が度々須藤の家へ遊びに行くのも、一つには、吉則が

『お常、お常』と云つて、子の樣にもてなすからである。すると、或日のこと、かの女は吉則が校長會議があると云つて出かかつてゐるところへ行き合はした。渠は出來立ての七子の羽織を着てゐる。

『叔父さん、いい羽織が出來たの、ね』と、お常は直ぐそばへ寄つて見る。縫ひ方に變なところがあると思つたら、果して變なのだ。絹絲が足りなかつたかして、足りないだけを木綿絲で縫つてある。『このざまツたら、ない！なぜこんなしみツたれなことをしたんだらう？叔母さんも叔母さんだ、ねえ、こんないい物はうちで縫はないで、仕立屋へやつたらいいぢやアないか？』

「そんなおあしがないから、ね」と、叔母の返事。
「なけりやア、いッそ、羽織も買はない方がいい、丸で臺なしだ。」
「それも尤もだ」と云つて、吉則はお常の來たのをほく〳〵喜んでゐたが、時間が迫つたので、「ゆッくり遊んで行け」と命じて、出て行つた。その跡で、叔母が
「お常さん、お前の樣に何でもつけ〳〵云ふものぢやないよ。うちだからいいものの、若し他人なら、直ぐおこつてしまう」とたしなめると、
「誰れだッていいぢやアありませんか、しみッたれはしみッたれだもの。」
叔母もこれには閉口して、ただ笑つてしまつた。お常の我を押し通すが、然し無邪氣な愛嬌には、女でも魅せられてしまうのだ。然し叔母は、所天吉則がわが子よりもお常を愛するのだけは、いつも遺憾に思つてゐる。
「あなたはなぜわが子の芳子をもつと可愛がつてやりません？お常はよその家の子ではありませんか？よその子を可愛がるのもよろしい。けれど、それはもつと芳子を可愛がつた上のことになさいまし。」
「それも尤もだ」と、吉則は決して反對はしない。然し矢つ張りお常の方が何となく可愛い樣だ。芳子はまだ小學校へ這入れない小娘だ。それから見ると、お常は、年の割りには若い意氣を持つてゐる吉則に取つて。まだしも話し相手になる。それがかの女の方を愛する一つの原因であらうとは、渠自身でも考へないことはない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

栗は然し自分の妻をも滿足さしてやらなければならないと思ひ、丁度わが子が七つの祝ひに當つたのを幸ひ、芳子の母に芳子の新衣を拵へさした。母はおほよろこびで、格子縞の八丈を見立てて來た。それが二枚重ねに仕立てあがると、直ぐ芳子にそれを着せて、母と共に大野屋へ行かした。

「お母さん、二枚重ねだ、ねえ」と、芳子は嬉しがつた。

「ああ、これなら、お常さんもけちはつけまいよ」と、母は調子を合はした。

然し大野屋へ行くと、襟つきの絹物を着たお常が出て來て、直ぐそのけちをつけたのである。

「けち臭い、ねえ——子供には、もツと派手ながらを着せたらいいでしよう？こんなじみな物ぢやア、田舍ッ兒の樣だ、わ。」

それからと云ふもの、お常の叔母がお常に對する惡感はます〱根がはびこる樣になつた。

三

お常と勝次郎との間に出來た女の子お竹が五歲になつた時、大野屋の主人が亡くなつた。おふくろと勝次郎とは歎くだけ歎いた。然しお常は左ほど悲しくもなかつたらしい。かの女は、物心がついて以來、泣くことが殆どなかつたのである。して、そんな悲しい時でも、自分ばかりは

「あれが本當のお父さんであつたのか知らん」と云ふ樣なことを考へた。若しか違つてゐたら、跡に殘つてゐるお母さんも自分のお母さんではなくなる。して、かう思ふと、何だか知らん、おふくろに對する感情も、以前とは違つて、うとましくなつて來た。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

然しそんなこともかの女には大したことではなかつた。勝次郎との間は、表面では、ますく親密になるばかりなのを見て、おふくろは蔭で獨り心細く思ひ出した。

『家名の儀は、常二十歳に相成候はば、前約の通り相讓り申すべく候』と云ふ約定を勝次郎の叔父須藤吉則に入れてあつたが、その二十歳の時、丁度養父が亡くなつたので、一言の苦情もなく、店は全くお常と勝次郎との思ふままにやつて行けるから、お常も一層張り合が出來たのである。

勝次郎は相場にも手を出してゐるが、幸ひにも、さう損をしたことがない。して、渠の留守には、お常が獨りで店の小僧等をあつかひ、相變らず甲斐ぐしく客に對してゐる。子供には乳母をつけてあり、臺どころには氣の利いた女中がゐて、おふくろが渠等を監督してゐるから、その方にも心配はない。

お常の胸の空には、暗い雲の一片だも浮かんだことは殆どないのである。かねが儲かるのが樂しみない、儲かつたかねで仕たい放題が出來るのが樂しみなのだ。且、器量はよし、かねもあるし、一廉のかみさんになり澄ましてからは、近處隣りのものらも、お常が子供であつた時に云つた樣なけちも云はず、尊敬こそすれ、少しもおろそかにする樣な態度がない。男も女も、その店さきを通りすがつて、お常に苦勞の苦の字もない樣な聲を以つて言葉をかけられるのを名譽の樣に思つてゐる。店の直ぐ奥は六疊敷きの茶の間で、店との間はがらす障子を以つて仕切つてある。それと並んで、椽かはを境に、臺ところがある。茶の間の奥に、鳥渡した庭をはさんで、土藏が建つてゐる。この土藏と兩隣りが建て込んでゐるとの爲めに、茶の間が薄暗いので、天井を四角に切り拔いて、あかり取りが出來てゐる。そこは、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夜になれば、小僧等を寢かすところて、おふくろと女中と乳母と子供とは土藏の二階が寢間になつてゐる。して、主人夫婦は店の二階に寢るのてある。

雨など降つて、店を早くしまはした時などは、勝次郎はお常と二人、店の二階て、ひッそりと小酒宴を開くことがある。して、お常の爪彈きに乘つて、勝次郎の歌ふ聲がそとを通る人に聽える時もある。勝次郎もなか〳〵隅へは置けない人間て、藝者の出る席ては、男振りがいいのと話上手なのとて隨分もてるのてある。

柳橋に好きなのがあると云ふことも分つてゐるし、たまには、とまつて來ることもあるが、お常は平氣て燒く樣なことはしない、男としては、當り前だぐらゐに思つてゐるらしい。

『こんないいおかみさんがあるのに、ねえ、勝さんも浮氣な──』と云ふ樣なことをお世辭かた〳〵聽かせるものがあつても、勝次郎はただ笑つてゐるし、お常はまたよそごとの樣に聽き流す。二人の樣子をはたで見てゐるものが、却つて、この餘り淡白なのをもどかしく思ふのだ。

『然しまた、云ふに云はれない樂みが二人の間にあるのだらう』と、かげては云ひ合つてゐるものがある。然し、實際に於ては、そんな秘密な樂しみが特別に存在してゐる樣てもないのだ。それを最初に感づいたのはさすがに、身づから心細く思つてゐるおふくろてある。かの女は自分がお常の餘り淡白な態度に飽き足らなく思ふ心持ちを勝次郎にも移して見たのだ。或日、お常が子供を連れて上野の、花見から須藤へまわつた留守に、勝次郎に向ひ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「あの子は子供の時からあッさりし過ぎてゐたが、今でもその氣性はそのまゝの樣に見える。お前、少し立ち入つたことを聽く樣だが、夫婦の仲はよく行つてゐるのかい？」

「さア」と、勝次郎はあたまに手を乘せたが、「わたしにも本當はよく分らないのです。よく行つてゐるとも申されますし、またよく行かないとも云へます。あの子は、第一、二人の仲に出來た子供を少しも可愛がりません。それから、わたしとの仲で御坐いますが、わたしを本當に思つて呉れるのか、どうかそこが鳥渡判然致しません。お母さんには申し兼ますが、實は、わたし」と、また兩手をあたまへ持つて行つたが、直ぐ膝の上におろして、「お母さんには濟みませんが、時々とまつて來ることも御坐います。」

「そりやア、男の働きだから、わたしも知つてゐるが、默つてゐます。」

「どうも濟みません」と、勝次郎はあたまを下げた。「それを、若し夫婦の情が充分あるとすりやア、お常はもッと燒くなり、何なりする筈ですが、一向そんな樣子が見えません。そりやア、商賣の方にはなか／＼働いてくれます。また十露盤上のことなどもよく分つてゐます。利口で、はき／＼して、愛嬌のある、いいおかみさんです。然し自分の子に對し、亭主に對して、本當の情愛があるか、どうかどうも分らないところが御坐います。」

「さう云はれると、こちらにも、思ひ當ることがあります。子供の時から、あの子は、こちらで可愛がつてやるばかりで、――それも可愛いのだから、いくら可愛がつても、こちらの損になるわけぢやアな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いが、——あの子の方から、親しんで來たことは、これまでにさうない。お父さんが死んだ時にも、お前は却つてよく泣いて呉れたが、あの子は餘り悲しさうな風も見せなかつた。ただすら〳〵と育つて、ただすら〳〵と延びて行くばかりだ。』

『お母さんもさう思はれましよう——ただ氣まゝ、と申しても惡い氣まゝでは御坐いませんが、それが增長して、自分ばかりのことしか思はない樣です。わたしもこちらからばかり可愛がつてゐて、向ふからは少しもその報酬が取れない氣が致してなりませんのです。』

『お互ひにさうか、ねえ——』

『現に、けふは子供を連れて、須藤さんへまわりました。然し子供が可愛いのではない——生きた人形を持て遊ぶてな樣な心持ちで、いい衣物を着せたり、脱がしたりするのか面白いのです。』

この對話は茶の間てこッそりあつたことだ。その間、小僧は店て忙しさうに客の買つた海苔や玉子の鑵やら、桐箱に、家號を印刷した紙を張つて、客の出す風呂敷などに包んてやつてゐた。そとを往來する電車の上には、春だから、花見の客が多く乘つてゐた。

そこへ、お常は子供の手を引いて歸つて來た。博多に繻子の晝夜帶を締め、絲織の衣物の上には、縫ひ紋の黑縮緬の半纏を引ッかけ、紹縮緬の前掛けには甲斐絹の裏がついてゐる。

『ただ今』と云つてかの女があがつて來る後ろから、お竹は母をかけ拔けて先づ茶の間に這入り、

『おばアちやん、これ買つて貰つた』と、京人形に縮緬の衣物を着せたのをさし出す。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『おう、いいのだ、ねえ』と、おふくろが手に取つて見るのを子供は嬉しさうに見てゐる。

『人形にされてる子がまた人形をおもちやにするんだ』と、勝次郎は皮肉な顔を、然し笑ひながら、お常の方に向ける。

『また同じ樣なお箱が初まつた』と、お常は鳥渡亭主を見返つた切り、うるさいと云はないばかりて、紙入と煙草入れとをほうり出し、おふくろと勝次郎とがさし挿んでゐる長火鉢の脇へ坐わる。『竹ちやん、その人形を持つて、婆やの方へお行き。』

『もう、お前のおもちやは入らないんか』と、勝次郎はまたお常に皮肉くる。

お常は、然し、それには返事もしない。

『須藤さんては、皆達者か』と、おふくろに問はれ、

『ああ、皆達者てす』と、答へる。『だけど、相變らずくすんてゐて、ねえ――あれては、叔父さんが可愛さうだ、わ。』

『また、叔母さんの惡口か』と、勝次郎。

『叔母さんはあたいを嫌ひなんだ。だから、あたい、わざと行つてやるんだ。叔父さんが面白い人だから――！』

叔父の吉則も亦お常に引かれて大野屋へ度々やつて來る。して、御馳走にてもなつて歸宅し、

『お常は煮物が上手だよ』と話すと、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『そりやア、おかねのあるにまかせて、出しを惜しまないからです』と、叔母は自分の所天の迂濶を冷笑したこともある。

『叔母さんは一向、近頃、來て呉れない、ね』と、おふくろが云ふ。未亡人になつたおふくろは、家ては、近頃、何だか自分ばかりが疎外されてゐる樣な氣になつて來て、そとの人を話相手に欲しいのてある。ところが、お常はそんなことには少しも氣がつかない。

『なアに、いやな者は來なくッていい、さ』と、鼻てあしらふ樣にして、勝次郎の持つてゐる煙管をひッたくる樣に取つて、それに煙草をついて喫ふ。そこへ、

『おかみさんに鳥渡顏を貸して貰ひたい』と、勝手口から臺どころへ這入つて來たものがある。先代から火事の時の用意に手なつけてある鳶仲間の一人だ。お常が出て行くと、少しかねを貸して貰ひたいと云ふのだ。

『また博打に負けたのだらう』と、あたまからけなしつける。

『どうも、度々濟みませんが』と、もみ手をしてゐる。

『現金なんか、しみッたれに、とッとく樣なことアうちぢやアしないよ』と、少し考へてゐたが、板の間に羽織を脱ぎ、帶をしう〳〵云はせて解き出した。面倒臭いと云ふ樣に、手早く解いて、それをもかたわらにうッちやり、また衣物を脱いて、白縮緬に墨繪を書いた長繻絆一つになつた。して、脱いだ衣物をまるめて、鳶の者の鼻さきへほうり出し、『これても曲げて、間に合して置く、さ。』

「どうも濟みません」と云つてそれを受け取り、歸つて行くものの後ろ姿を見送りながら、いま〳〵しさうに、

「意久地なしだ、ねえ——さきのから返すんだよ」と、あびせかけた。それから、そのまゝで、もとの坐にもどり、わざとちやんと坐わつて、自分の身を見まわし、

「このざまッたら、ない、ね」と微笑する。して、ほうり出してある紙入れを引き寄せ、それから懐中鏡を出して、じッとのぞいてゐる。

こんなことは珍らしくないので、うちのものは何とも云はないのだ。然し、けふは、立ち入つた問題が起つてゐたところであるから、勝次郎はそれとなく子供にかこつけて聽いて見た、

「お前は、實際、可愛いと思ふことがあるか、たとへば、お竹に對してもだ？」

『可愛い時は可愛い、さ。可愛くない時は、厭だ。』かう答へた切り、つと立ちあがり、ぬぎ棄てた羽織と帶とを持つて來いと女中に命じて、自分は二階へあがつて行く。

四

お常は東京に生れて、東京に育つた女だ。東京以外には、横濱へ鳥渡行つたことがある切り、どこも知らない。無論、郊外の菖蒲とか、桃とか、櫻とか、つゝじとか云ふものを見に行つたことはある。然し人の姿や衣物などばかりに氣がついてしまつて、花や風景などの記憶を殘して來ない。

かの女は旅行などには全く趣味を持たない。よしんば持つてゐたとしても、店のことと芝居のことと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が氣になつて、してゐることが出來ない性分だ。かの女が年々待ち受ける屋外の樂しみは、上野や向島の花見、隅田川の舟遊びぐらゐだ。然しそれもだ、花を見ようが、月を見ようが、人が「いい、ね」と云へば、自分も「いい、ね」と云ふに過ぎない。

かの女の趣味もしくは生活の範圍は、不斷、淺草觀音、上野公園、三越、白木屋、伊豫紋、鑑濟、歌舞伎座、明治座などに限られてゐる。して、家にゐては、かねの儲かるのが樂しみだ。して、また、人に「おかみさん、おかみさん」と云つて、拜み倒され、泣き付かれると、また何でもそのものにしてやるのが、餘ほどえらい樣に思つてゐる。

かの女には、あたまを惱まして考へると云ふ樣なことは殆どなかつた。衣物を拵へるにしても、柳橋の意氣なのがちやんと流行の標準になつてゐるから、あれをあゝして、これをかうしてと云ふ樣な心配は入らないで出來る。盆、暮のおつかひ物も、つき合ひさきの格式に從つて、そこに相當な年々の家例があるので、それを行つて行けばいい。習慣と流行とを追ふのは、かの女には、特色のない模倣ではなく、寧ろそれが、かの女の樣なあかるい、故障のない性格を、そのまゝに活躍さす生命であつた。かの女には、洗練された習慣と流行とがその性格にぴッたりと添つてゐたのだ。

若しかの女をしてこと更らに考へさす動機もしくは材料があつたとすれば、それは自分が棄て兒か、本當の家つきかと云ふことだ。

「あたい、棄て兒だッて、さう?」この疑問に思ひ及ぶと、いつもかの女の心には、一片の暗雲が浮ば

ないてはゐられなかつた。而も、自分に子供が出來たり、病氣をしたり、おやぢが死んだり、所天に愛情の如何を聽かれたりする毎に、その暗雲が密になつて來た。つまり、年の進むに從つて、この疑問が根を張つて來たのだ。

『あたい、棄て見だッて――』と、おふくろに尋ねても云つて呉れないので、段々勝次郎にばかり聽く樣になつた。それが丁度子供が母に物をねだる樣にうるさい時もあつた。そんな時には、勝次郎もたまり切れず、

『おれに聽いたッて、分るものか、うるさいと』と云ひ放つのだ。すると、

『ぢやア、あたいにも、「お前はおれに本當の愛情があるか、どう」なんてお聽きてないよ』と、お常はさも憎らしさうに所天の口眞似までして云ひ返す。

『は、は、は』と、勝次郎は笑つてしまう。して、大した衝突もなく濟んで來た。

ところが、或日、冬のことであつた。みぞれの降る寒い晝間、見すぼらしい婆アさんが獨り尋ねて來た。破れた傘を提げて、低い下駄をべた〳〵引きずつてゐるが、衣物に羽織りだけは、木綿は木綿だが破れてもゐないのを着てゐる。

『いらッしやい』と、お常が丁度店に出てゐたので云つたが、お客さんではなかつたので、そんな貧乏臭い風を見るのはいやだと云はないばかりにして、引ッ込んでしまつた。

來た婆アさんはおふくろを呼び出し、何かこそ〳〵話をしてゐたが、やがて裏口へまわつて、茶の間

へあがつた。

すると、茶の間に引ッ込んでゐたお常はまたそこを逃げ出し、二階へあがらうとするので、おふくろは

『鳥渡お待ち』と呼びとめ、お常を火鉢のそばに坐わらした、して、『實は、これまでお前には何も云はなかつたが、これが』と、ずッと下座におづ〳〵控へてゐる婆アさんをゆび指し、『お前の實のお母さんだよ。』

『へい！』から、お常は云つて、驚いた樣にじろ〳〵その方を見てゐたが、『ぢやア、お前さんがあたいを觀音さんへ棄てたの？』と、こんな見すぼらしいお婆アさんでは、自分を棄てたのも當り前であつたらうと思ふ。かの女には、遠い過去と現在との區別がない。自分が一圖に棄て兒だと思へば、きのふにも棄てられた樣な氣持になるのだ。

『飛んでもない』と、婆アさんが答へたのを受け取り、おふくろが實にこれ〳〵だと說明した。それに據ると、お常の生れた年に、一生つき合はない約束で、お常を貰ひ受けた。その後、かの女の實母は、今うち明けた話によると、いろんな浮沈があつた。して、今は非常に困つてゐる。かうやつて來たのを貧乏だから助けて貰ひたいと云ふ樣に取られては困るが、今一度娘に名のらして貰ひたいのだ。

先代が死んだのを聽き知つて、もしまた未亡人にもしものことがあつたら、もう、自分から名のつて出ても、娘だけては信じて呉れまいと思ふので、今のうちに會はして置いて呉れろと賴むのだ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

最初の約束とは違ふが、大きくなつた娘に會ひたいのは尤ものことだし、また大野屋のおふくろ自身も、この頃、特に自分の年相應の話相手がなく、寂しがつてゐるところだから、お常が却つて進まない樣な風があるにも拘らず、おふくろから進んで名乘り合はした。して、おふくろとお常とが一緒になつて、お常の實母が火鉢のそばに來させる。して、お常と實母との問答になる。

『何て云ふの、名は？』

『時と云ひます。』

『お時さん？——して、お父さんもゐるの？』

『話し家をしてるさうです。』

『さうですて、一緒にゐないの？』と、顏をしがめる。お常は芝居好きだが、落語は嫌ひだ。

『はい。お前さんを手離す鳥渡前に別れた切りです。』

『お前さんは今何をしてて？』

『人仕事をしたり、ボール箱を張つたりしてゐます。』

『ぢやア、うちのも張つて貰つたらいい』と、お常は養母の顏を見る。お時に對しては、まだ母だと云ふ感じが出ないのだ。

『お母さんにそんなことが賴めるものか、ね』と、養母は遠慮した樣子。

『どう致しまして』と、實母。『何でも、御用をさして下されば、致します。』

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よく見ると、如何にも、お時の顏には、お常が自分で鏡に寫す顏と似たところがある。目つきや口もとや、品のあるところは全くそツくりだ。然し鳥渡惡巧みでもしさうな相があるのは、思想の單純なお常には分らない、然しお時は顏の形が少し長い、してお常はどちらかと云ふと圓い方だ。そんな違つたところはお父さんの方に似てゐるのだ、な、と思ふ。

父にも會つて見たい樣な氣が直ぐ起つたが、また一方には　この母でさへ二度と再び會ひたくない樣な氣もする。話し家とか、貧乏人とか云ふことは、お常が思つて見ても、ぞッとするほどいやで溜らないのだ。

然し、兎に角、夕飯時だから、御膳を喰べて歸れとお時を引きとめ、母と思ふ樣な、また思はない樣な、ただ曖昧なもて爲して歸してしまつた。その跡で、おふくろはお常に向ひ、

「お常、お前の樣に考へもなく、ぺら〱おしやべりをしてしまうものはない。たとへお前のお母さんであらうが、つき合つてゐなかつたのだから、どんな素性の人間だか分りやアしない。それに、大事な店の用事を賴めたものか、ね？」

『あたいだッて』と、お常も冷淡に、『本氣で云つたんぢやアない。あんなお母さんなら、いやだ、わ。』

『いやでも、好きでも、お母さんはお母さんに違ひないのだから、つき合つて見た上で、段々うちのことをして貰ふ樣にすればいい。』

「それよりやア、もう、いッそ、來て貰はない方がいい、わ――棄て兒なら、その親がどこにゐるだら

うと考へてたことだが、ああ、いやだ、いやだ！分つて見りやア、話し家や貧乏人だ。』

『どうせ自分の兒を呉れるくらゐだもの。』

『呉れたんぢやアないだらう――棄てたんだ！』

『いゝえ、呉れたのです。』

『いいえ、棄てたんに決つてる！』

この時から、お常は全くおふくろの言葉を信用しなくなつた。して、實母だ、實母だと云ひ聽かされてゐたものが案の定さうでなかつたのが分ると同時に、自分の實母は自分を棄て兒にしたのに違ひないと云ふ信念、寧ろ迷信が、家の方角や日の吉凶を判ずると同じ樣に、心の中に於てその威をたくましくする樣になつて來た。

五

お常は、それからと云ふもの、自分の心の持ち方が一變した。それまでの自分の方向は明るい方にばかり向いてゐた。ところが、それからは、自分の周圍が何となく薄暗い樣になつて來た。

晴天にそとへ出ても、太陽の光が僅か茶の間のあかり取りからさして來るほどにしか見えないで、自分の包まれてゐる衣物にも、暗い影がつき添つてゐる樣な氣持ちだ。

お時は時々やつて來るが、どうしても、それが自分のお母さんであるとは思へない。また、思ふことは思つても、お母さんとは呼びたくない。それと同時に、また、大野屋のおふくろをもこれまでお母さ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んと呼んでゐたのは、自分がだまされてゐたのだと思ふと、いよ〳〵以つてうとましくなる。
また、亭主の勝次郎を養子だと思つて、お常は家つき娘の權威を振つてゐた。然し自分も亦拾はれた子であつたのだから、當り前だと思つてゐた權威の沽劵が下つてしまつた樣な氣がして、自分が殆ど支配してゐた大野屋の店なるものが急に他人の物であるかの樣に思はれる。
おふくろと勝次郎とお時とが親しげに話してゐるところなどを見ると、お常は三人が申し合はして自分ばかり疎外してゐるのだと思ひ取つた。して、『あの畜生め！あたいを棄てやがつて』と思ふと、お時が初めて尋ねて來た時、自分が『お前さんがあたいを棄てたの』と聽いたのに對して、『飛んでもない』と白ばッくれた言葉が思ひ出される。
『あの時のお時の樣子をもッとよく氣をつけて見て置けばよかつた。その目つきか顏つきかに、きッと變な胡麻化しがあつたらう。』こんなことを考へる樣になつただけ、かの女は自分自身を返り見る力が出來たのである。云つて見れば、お常の從來の生活は受働的に世間並みの道にぴッたり合つてゐたので、そこにまた一種の性格があらはれてゐた。ところが、今では、自分から自分を反省する自覺力が起つて來たのだ。
然しそれだけ、また、われからじれッたいことも甚しくなつた。子供をしかることが多くなり、勝次郎と衝突する樣になり、またおふくろを泣かすこともある。
急にお常が變つたので、最も心配し出したのはおふくろだ。わが手のうちの玉とも思つてゐたお常に

は疎んぜられ、自分の充分愛してゐる孫にはその母がひどく當るし、勝次郎はお常の氣嫌ばかり取つてゐるに忙しいので、その養母を返り見るひまがない。あれやこれやの氣苦勞で、おふくろは獨りでその身を思ひ痩せに痩せる樣になつた。

おふくろの話し相手はお時ばかりだ。然しお時を嫌つてゐるお常の意を憚つて、成るべくかの女には知らさない樣に遊びに來させるのだ。して、話し合ふのは奥の七疊の二階に決つてゐた。お常はそれを知つても知らない風をしてゐることが多い。

お時には野心があつた。娘を說き落して、多少の資本を出させ、自分も別に何かの店でも出して、樂な生活を送りたいのだ。然しお常が餘り冷淡なので、取りつく島がない。おふくろがそれをにほはされることもあるが、おふくろは初めから警戒してゐたのだから、

「娘の氣性が氣性ですから、ねえ」と云ふ樣な、いい加減の挨拶をして置くのだ。お時はただ御馳走はあづかつたり、多少の小使錢を貰つたりするばかりにとどまつてゐた。

お常の不愉快は常につのるばかりで、それを忘れようとして、外出することが多くなつた。それも、須藤の叔父さんところや、淺草公園ではなか〳〵滿足出來ず、以前よりも多く料理屋や芝居見物に行く樣になつた。して時々は、自分獨りで店の二階に引ッ込んで三味線を彈いてゐる。

商買に不熱心になつた爲め、店の評判が惡くなつた上、物入りがかさんで來たのであるから、勝次郎もなか〳〵うか〳〵してゐられない。一つ、どか儲けをしなければと思つたのが冒險で、いつもより奮發

して張つた相場が失敗した。それからどう云ふものか、その方も儲けよりも損の方が嵩かさなるのだ。渠はお常に對してそれを一々知らせない。それが爲めに、渠とかの女との間には、また、兩方から隔てが出來たのを、兩方でさとる樣になつた。

或日、お常は不愉快の餘り、また芝居にでも行かうと、二階を降りて來た。して、四角に切つた天井のあかり取りを仰ぎ、

「暗い部屋だ、ねえ」と云ふ。

「何も不斷とは違つてやアしない茶の間だよ」と、そこにゐたおふくろが答へる。實際、不斷だけのあかりは通つてゐるのだ。

「暗いから、暗いと云ふんてす」と、お常は慳貪(けんどん)に云つて、そこにゐた子供――白ネルのしめしたのてくびを卷いてゐた――に向ひ、『さア、竹ちやん、お芝居に行かう。』

「竹ちやんは風(かぜ)だよ」と、おふくろがとめる。

「風だッて、芝居に行きやア直らア、ね。」

「大したことぢやアない樣だが、けふは、およしよ。」

「なアに、心配はない、さ。」

「行きたけりやア、お前だけお行き。」

「獨りぢやア、寂しいから。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

勝次郎も店から這入つて來て、お竹だけを引きとめようとしたが、お常は聽かないてつれて行つた。それが原因て、お竹は八歳て死んてしまつた。して、お常は初めて悲しいと云ふことを身にしみて經驗した。

その通夜の時、お時も來てゐて、初めてお常と多少のしんみりした話をかはした。大野屋のおふくろは勞れて寢部屋に行き、勝次郎も酒に醉つて假り寢をしてゐた時だ。眞の親子は、他に氣がねなして、相向つた。父の話しも出た。して、お時が

「向ふに女が出來てゐなけりやア、もう一度一緒になつてもいいが」と云ふ樣なことを語ると、

『ぢやア、お母さんはまだ未練があるの、ね』と、お常は冷かす。

『女獨りの暮しだたら、隨分苦勞をして來たよ』と、少しは補助して吳れてもいいてはないかと云ふことをほのめかすと、

『貧乏くらゐいやな物はない』と答へた切り、然し、助けてやらうとも、何とも受け合はない。

『つウちやん夫婦がどちらも器量がいいから、この子も』と、お時は亡兒の横たはつてゐる方に向き、『なか〳〵いい子てあつた。柳橋あたりて藝者にてもしたら、なか〳〵賣れッ兒になつたらうに、惜しいことをした。』

『本當に藝者にやアよかつた、ねえ』と、お常も答へて、自分の器量に思ひ及んだ。

可愛がつてゐた孫が亡くなつたのに落膽してか、大野屋のお婆も間もなく跡を追つて行つた。

お時は同じ年輩の話し相手がなくなつた上、お常夫婦には何となく遠慮があるので、大野屋の敷居は滅多に跨がない。然し一たび跨いで、お常に會へば、必らず藝者の面白い生活狀態を語つて、かの女の心を動かさうとした。どうせ大野屋へ入り込むことも、またそこから補助を仰ぐ見込みも、共にないとあきらめたので、わが實子の器量に目をつけ、藝者にでもして、一緒に樂な暮しをして見たいと巧み出したのだ。

然し決してそれと明らかに云ふのではない。たとへ大野屋のおふくろも亡くなつたとは云へ、どうもお常が自分の娘である樣に自分をもてなして呉れないから、今度ははツきりと云つて見よう、云つて見ようとは思ひながら、お常の前に出ると、どうもおぢけがつく。さうかと云つて、娘の浮氣ツぽいところがあるのは、いつか物になりさうだと心ではねらつてゐる。

お常もお時の心を感づかないのではない。また、子供の時から、藝者といふものは一度はなつて見たいと云ふ氣が起らないのではない。然しお時が自分を棄てた上に、また自分を喰ひ物にしようとするのを憎いと思ふ。

『あのお時は實に怪しからん女だよ。あたいを藝者にでもしたらと思つてるらしい。』かう云ふ話をお常は勝次郎にしたことがある。すると、勝次郎は寧ろ嬉しさうにして、

『それほどに見込まれる器量なら、お前も仕合せぢやアないか』と、まさか、實際に起ることとは思は

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないから、『なつて見たら、どうか、ね』などとおだてても見る。

『なつて見ようか』と、お常はふとその氣になりかねないこともある。すると、勝次郎が

『さう、さ、ね―して、おれが毎日會ひに行く旦那か？』

『兄さんの様なおぢイさんぢやア、つまらない、わ。』

『へい、そんなことまで考へてゐるんか』と、勝次郎は自分の女房が、如何に無邪氣過ぎ、如何に意氣過ぎるとは云へ、實際に勸めなどさしてはたまるものかと思ふこともある。

『よしんば、あたい、藝者になつても、あんなお時なんかの喰ひ物になつてしまうのはいやだ、わ。』

『おれはなほ更らお前を人の喰ひ物にしてしまうのはいやだ。』

『いやといやと掛けて、なアに』と、お常は死んだお竹がよく云つてゐた掛け算の口調を眞似て、にこ〳〵した顏を勝次郎に向ける。勝次郎は、お竹は死んでも、その母親はお竹と同じ子供だと云ふ様な氣がした。して、

『矢ッ張り大野屋の娘、さ』と云ふ答案を出す。

『では、棄て兒だ、わ、ね。』

『馬鹿ア云ふなと云ふに。』

勝次郎も自分の女房を棄て兒とは思ひたくない、また女房にもさう思はしたくない。然しお常の迷信の根はなか〳〵抜けない。棄て兒――大野屋――貧乏な母親。かう考へて來ると、自分の周圍と今の自

分とがどうしても不滿足になつて仕やうがない。近頃、かねまわりのよくないのは、無論、一つの大原因である。

かの女は『棄て見だッて、さう？』を餘り繰り返さなくなつた代りに、『藝者になつて見よう、』をうるさく云ふ樣になつた。勝次郎は自分の女房が氣の落ち付かない原因はお時の來るのにあると見て、お時を非常に嫌ふ樣になつた。

渠は結婚當時とは違つて、段々年を取り、店も段々自分の思ふままになるに從つて、堅氣になつてゐたのだ。好きなものは女房ばかりで、女房の爲めなら、何でもしてやつた。して、その何でもしてやつた女房の姿を、外にゐても、思ひ浮べて樂しみにしてゐた。

ところが、この頃では、女房を思ひ出すたんびに、お時をも思ひ出すのだ。お時のいやな影は家にゐても、そとを歩いても、また相場に出かけてゐても、自分につき添つてゐる。可愛い女房を見ると、そこに嫌ひなお時がゐる。好きな女房を思ひ出すと、直ぐまたお時のいやな影が見える。それがまた夢にまで襲つて來て、しまひには苦しくなつて來た。

『お時は魔物だ』と、苦しまぎれに考へ出してからは、どうしても、その姿も影も見えないところへ大野屋の店を移してしまひたくなつた。して、近頃相場に損だらけなのも、きツと、この魔物のせいに違ひないと思つた。

お常にはまだ云つてないが、實は、勝次郎に大分借金が出來てゐるのである。それを取り返さうとし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て淺草觀音や聖天さまへは朝夕願をかけに行くし、家へは神主を招き寄せて、いろんな厄拂ひをして貰つてゐる。して、方角や吉凶のことを一層注意する樣になつた。然し、それでも、一向追つ付かないのである。

「どうしても、あの形をそなへた魔物がついてゐるからに違ひない」と見定めをつけ、何ほどかの金を與へて、お時の出入りをさしとめてしまつた。

それでも、なほ、お常の『藝者になつて見ようか』はやまない。して、お時の出入りしてゐた時は、左ほどにも戀しくなかつたのが、出入りしなくなつてからは、お常の實母に對する戀しさが段々出て來たのである。それも、ただ、母としてよりは、寧ろ陽氣で、意氣な話をすることが出來る話し相手が柳橋のそばにゐると思ふからである。

お常は、一度、亡くなつた子供をつれて、お時の家を音づれ、『これが竹ちやんのおばあさんだよ』と紹介してやつたことがある。その歸りに、お竹は母親に向ひ、

『おばアさんて、穢いところにゐるの、ね』と云つた。

「本當だ、ねえ」と、お常は笑つて、子供でもさう思ふのだもの、二度とあんなところへは行かないと決心した。

名ばかりは意氣な柳橋だが、お時の家は細い横丁の長屋住ひで、一間半の間口を、一間は臺どころに取られ、殘り半間が入り口になつてゐる。して、茶の間がすなはち寢屋の一間しかない家だ。而も疊は

古びて破れたまゝだし、壁は張り紙がほぐれて、土が落ちてゐる。便所も穢くして置くのか、臭してゐるお常の鼻について、それが最も氣になつてたまらなかつた。

　お常はそれを思ひ出しても、ぞとするのだ。然しそこへ、不思議にも、また行きたくなつた。勝次郎には須藤さんへ行くと云つて置いて、雷門から電車を反對の方向へ乘つた。して、丁度お時の在宅してゐるところへ行つた。

『お母さん』と、初めてなつかしい呼びかけをして、お常はあがつて行くと、

『珍らしい、ねえ、つうちやん』と、お時も嬉しさうに迎へる。

　いろんな世間話があつた末、お常が

『あたい、一度藝者になつて見たい、わ』と云ひ出す。

『なつてお見よ、賣れッ子になると決つてらア、ね』と、お時は待ち受けてゐたと云はないばかりにほくそゑむ。わが子と思へば、買ひかぶッてゐる點もないではない。『けんざんやなんかしてゐたつて、左ほどの儲けもなから？』

『もとはあつたが、ねえ、今ぢやア、つまらないの。』

『さうだらうよ。それに、勝さんがあんな年寄りぢやア、ねえ。』

『本當よ』と、聲を出して笑ひながら、『あたい、子供の時から、何だか自分の亭主だと思へないんだもの。』

『そりやア、もッともだよ。――藝者になるなら、お母さんが世話してあげてもよろしい、そんなことは近處だからよく知つてるから。』
『けれど、ねえ、今は駄目よ、お中に子がゐるんだもの。』
『おやア、生れてからでもよからう。その子もまたお酌に仕立あげる、さ。』
『それも面白からうが、兄さんが渡すか、どうだか?』
『あんな、人の出入りをとめる樣なものア、とても、碌なことアありやアしないよ。』
『可愛さうに。棄てられたり、恨まれたりすりやアわけアない、ね。』から、お常が云つた時には、自分が『棄て見だッて』は忘れてゐた。然しお時の方が却つて鳥渡胸にこたへた。お常には子を手離したのが棄てたのと同じ意味に思はれてゐると、お時は思つてゐるからである。

七

お常の二度目の子供――女でなく、男だ――が二歳になつた時、いよ〳〵かの女の勤めに出る決心がついた。氣にしてゐたのは乳だが、成るべく呑まさない樣にして乾してしまつたから、その形もさう大きくならないで濟んだ。
『あたい、いよ〳〵藝者になつてよ』と、お常が嬉しさうに勝次郎に告げると、渠は今更らの如くびッくりして、ただ
『どうして』とばかり、暫くお常の顏を見守つてゐる。かの女には、近來屢々見せてゐた曇りのかげも

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ない年中削り落して薄青い痕ばかりてあつた眉も濃く生えて、立派な地眉になつてゐる。して、矢ッ張り顔ひつきたい樣に可愛い様子だ。

「なつて見たいから、なるのよ。」

「お前、本氣てそんなことを云ふのか？」

「ええ、本氣てすとも！」

「ぢやア、赤ん坊はどうする？」

「欲しけりやア、あげます、わ。」

「店はどうだ？」

「勝手におしなさいよ。」

「お前の物ぢやアないか？」

「あたいの物なら、それもあげます。」

「おれをも棄てて行くのか？」

「ええ、棄てて行きます。」

「仕やうのない女だ！拾年も一緒に添つてゐたおれが可愛くないか？」

「あたい、可愛いと思つたことはない、わ。」

「お前、本當に本氣か？」

「本當に本氣だから、云ふんぢやァないか」と、お常は少しじれる氣味だ。「分らない、ねえ。」

勝次郎は當惑してしまつた。これまでは、お常の云ふことを何でも直ぐ通してやつてゐたが、このことだけは然しどうしても通してやられない。

「馬鹿々々しいことは置くがいい」と云つて見たが、お常が餘り素直に、正直に、その云ひ分を通さうとするので、勝次郎は怒ることも出來ず、笑ふことも出來ない。

「おやア、おれが餘り年を取つてゐるのが厭になつたのだ、な？」

「さうよ。」

「それでも、これまで可愛がつてゐたのが不足でもあるまい？」

「けれど、あたいを可愛がるのも、ほかの人を可愛がるのも、違ひはないぢやァないか？」

「そりあア、ないかも知れん、さ。然しお前とかうして一緒にゐたのぢやァないか？」

「これから一緒にゐなけりやアいい、さ。」

「困つた女だ、なア！ぢやア、おれはおれとして、子供が可愛さうぢやァないか？」

「何も生れて來なくツてもいいのに生れて來たんだから、別に可愛さうでもありません、わ」

「何の爲めに藝者なんかになるのだ？」

「何の爲めでもない、なつて見たいからなるのさ。」

餘り冷淡な而も明確な答案に接して、勝次郎はその麗はしい、肌白のお常を棄て兒でもなく、貰ひ兒

てもなく、實は、大理石で出來た彫刻の女神であつたのではないかと思つた。して、その女神をお時と云ふ魔神がとう〳〵奪つて行くのだ、な、と思つた。

して、須藤の叔父さんを呼んで來て、勝次郎はお常を說き伏せて貰はうとした。かの女は吉則の云ふことだけはよく用ゐてゐたことを知つてゐるからである。吉則は自分の小學校の生徒に敎へる樣な口扮で、諄々とお常に說き聽かせた。別に家計が困つてゐると云ふわけでもないのに、そんな下等なものになる必要がないこと。そんな社會へは、それこそお常の嫌ひな貧乏人の娘が這入るのだと云ふこと。よしんば、這入らなければならないにしても、かの女は年が行き過ぎてゐること。二十五歲は、もう、そろ〳〵藝者が泥足を洗ひかける時であること。こんなとを云つて聽かしても、その甲斐はなかつた。

「叔父さん」と、お常は相變らず明らかに、「これまではあなたのお言葉をよく聽いてゐましたが、今度だけは、初めて自分で自分の考へ通りやつて見たいのだから、もう、何も云はないで置いて下さい。」

大野屋を貰つてしまうのだから、勝次郎が赤ん坊も預つて置くことになり、お常はその所夫と子供とに別れた。夫婦別れの夜は、喧嘩をしてゐた間柄でも、必らず二人とも一晩中泣き通すものだと云ふが、お常にはそんなことは少しもなかつた。して、考へ通り藝者になつた。然し年を取り過ぎてゐると云ふわけで、いい場所へは出られなかつた。お時が大車輪で奔走したのだが、柳橋も行けず、赤坂も行けず、芳町も行けず、四谷の鹽町から出た。

藝名は常おを小常と變へてつけた。

八

場所が場所だけに、年増藝者でもよく賣れた。顔立ちのいゝのと、都會育ちで垢拔けがしてゐるのと、氣前がいゝのとが呼び物になつた。

『小常さんは、新米だのに、あたい逹の領分を攻め取つてゐる、わ――あれくらゐはやりやア、死んでも、亡念はない、わ、ね』と、場ずゑ育ちの若い藝者などはうらやんでゐる。すると、また、古株の姉さん逹には、

『ヤッと藝者になれたと思つて、あの澄し込み方を御覽よ。見ッともない！あたいなんぞア見ただけで冷あせが出らア、ね』などと冷笑するものもある。

中には、また、うわべだけかの女の御氣嫌を取るつもりで、誰さんはかう云つた、彼れさんはああ云つたと、云ひつけ口をするものもある。

『何を云つたッて、かまうもんかい』と、小常は聽き流す風ではあるが、同業者間の冷笑や惡口やおべんちやらに接することが多くなれば多くなるほど、かの女の單純な神經が段々過敏になつて行つた。

『大野屋のおかみさん』で通つてゐた時は、かの女をはたから拘束するものはなかつたので、かの女とその生活とはただすら〳〵と延びるばかりであつた。ただ思ひ通りに行なつてゐればよかつたのだ。然し一たび勤めの身となつては、さうは行かない。

雇ひ主に氣がねをしなければならない。胸に針を持つた仲間同志に氣がねをしなければならない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

客にはその好き嫌ひに拘らず、或程度まで氣嫌を取らなければならない。けんざん屋へ買ひ物に來るお客を持て爲す樣な呑氣なことでは、到底間に合はないことが分つて來る。その上に、こちらから好いたらしい客も、向ふからは左ほどでないので、自分が勤めに出さへすれば、どんな男でもあやつッてやることが出來やうと思つてゐた自負心がくぢかれてしまつた。また、實母のお時からは、金のむしんが重外に度かさなるのだ。かの女は、急に、自分の周圍と狀態とが變つた爲めに——實は、それほどには思つてゐなかつた——勢ひ、いら〳〵しないわけには行かなくなつた。

慣れない氣苦勞の爲めに、からだは瘦せ、以前はいい加減に太つてゐた頰の肉も少し落ちる樣になりもとは年よりも三つ四つ若く見えてゐた顏が、鏡に向ふと、自分にも地がねを出して來た樣に思はれる。して、それだけ、爭はれない年齡といふものがうゐ〳〵しい心持ちを蠶食してしまつたのである。それが身を賣つてから、僅かに三四ヶ月のうちにだから、かの女自身も驚いたのだ。

『今晩は』と、化粧姿で裾を引きながら這入つて行くと、多少呼び慣れた客の目には、小常のあだ姿が、然し、一層あだッぽく見える樣になつた。ぱッちりした目に憂ひを帶びて、引き締つた口もとに微笑を漏らす樣子がつぶし島田の髮の後れ毛に靡てられる青白い顏に浮んで、客の心は品よくとろけさせられるのである。

さうなつてから、勝次郎は一度鹽町に行き、或料理屋へ小常を呼んだ、もとの女房が見あげて凄い藝者になつたのには感心したが、もう、もとの樣なうゐ〳〵しい大理石の女神に接することは出來なかつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「お前も變つたものだ、なア？」

「變つたでしよう」とばかり、二人は暫く言葉は出ない。渠には、赤ん坊同樣に物をねだつてゐたお常から、一足飛びにこの凄い女になつたのだと思へるから、どうも、不思議でたまらない。『あの魔物のお時が乘りうつたのに違ひない』と思へば、お時の目がお常のに似てゐるのではなく、お常の目がお時のに似て來た樣だ。つまり、表情の無邪氣がどこかへ行つてしまつて、海の底の樣に沈んだ瞳には、悲しい樣な、恨めしい樣な、而も人ずれのした樣な底光が出てゐる。

勝次郎は、忘れてゐたお時の生き靈がまた目の前に襲つて來た樣に思つて、小常の凄いところに充分打たれた時は、身の毛もよだつほどぞツとした。然し遠慮勝ちに酌をして貰ひながら、小常から、赤ん坊は達者でゐるかとか、須藤の叔父さんはどうしてゐるとか、自分の關係のあるものの話になると、矢ツ張り元の女房としか思はれない。

「瘦せたぢやアないか」と、通り一遍の藝者なら、手でも握つてやるところを、さうはしないで、いたはる樣に云ふと、

「苦勞があるから、ねえ」とよく〳〵こんな勸めはいやになつたと云ふ樣な吐息をつく。

「だから、よせと云つたぢやアないか」と、たしなめると、

「いくら云つたッて、兄さんの言葉ぢやア値うちがないよ。」

「なつて見てから、分つたと云ふのか？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「まア、そんなことてしよう。」
「それて、何か得てもしたことがあるか？」
「そりやア、ありますとも！考へて御覽なさい。あたいが三味線をおぼえたのは、死んだお母さんのお蔭てしよう？あたいが氣隨氣儘にしてゐられたのは、兄さんの働きてしよう？あたいが藝者になつたのは、あの生きてゐるお母さんのさしがねもあつたてしよう？そんなことなんかみな別々にあたいの何の役にも立つてやアしない。」
「立つてないことはない、さ。芝居をみたり、うまい物を喰つたり、いい衣物を着たりしたゞけても結構ぢやアないか？それに、三味線をおぼえてゐなかつたら、藝者も出來るわけぢやアなかつた。」
「そんなことなんか、何てもない、さ。死んだ物に、三味線も衣物も芝居もおいしい物も入らなかつた。」
「然し現在お前は生きてるぢやアないか？」
「生きてるのア生れ變つた人間てす、わ。」
「どうして？」
「それがあたいの得したところ、さ。今度といふ今度、あたいはあたいと云ふものが分つた。苦勞したお蔭てしよう。棄て兒なら、あたいがあたいを棄てたんだ。貰ひッ子なら、あたいがあたいを貰つたんだ。今のあたいが男を持つなら、親や世間から押しつけられたのはいやだ、あたいの心から惚れたのを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

取つてやる。」

「ぢやア、元のよしみて、おれに、惚れてもう一度歸つて來ないか、子供もあることだから？」

「いやなこッた！　あたいを死んだ者として可愛がつたり、死んだ者のお腹から出た子供がゐたりするところへ歸るもんか？」

「何もお前は死人ぢやアなかつた。」

「死人も同様ぢやアないか？　苦勞といふいのちがなかつたから。」

「そりやア、苦勞などしないてもよかつたんだ。」

「よかつたのは、あたいを殺してゐたん、さ。」

「お前、そんなに苦勞がしたいのか？」

「したくはないけれど、したから、この得があつたのだらうぢやアないか？」

「おれだッて、そんなら、苦勞はある、さ。」

「あるなら、自分てするがいい、さ。」

勝次郎は手に持つた猪口の中に涙を二三滴落した。然し小常はそれをみて、

「兄さんはもとからのろい男てあつたよ」とばかり、絶えず微笑は漏らしてゐても、つんとして、勝次郎にそれ以上を云はす餘地を與へない。

「お母さんは達者か？」

「あれにも困るから、もう、よせつけない樣にしようと思つてるの。」

こんなことて相別れてしまつた。

九

お時は娘が藝者になつたので、兎に角、生活狀態が變つて、もとゐた橫丁を出て、近處の通りへ移轉し、そこで鳥渡した小間物屋を開いた。然し急に衣食住に贅澤をし出したので、店のあがり高ては立つて行かない。娘にむしんを云ふことが段々度かさなつて來た。それも、一圓が二圓になり、五圓が十圓になると云ふわけだ。

けふも亦娘の財布をしぼらうとして、その住み込んでゐる吾妻へ出かけた。然し度々のことてあるから、われながら、御神燈の下をくぐるのが氣が引ける樣だ。

「鳥渡つうちやんを呼んて下さい」と云つて、上へはあがらうとしない。

午前のことて、小常は寢卷きに細帶をしめた姿て、玄關わきの小部屋に寢ころんて、小說を讀みながら、うつら／＼してゐたが、お時の聲を聽いて、

『ちよッと』舌うちをして、われ知らず眉根を引きつらした。お白粉の剝げた素顏は、睡眠不足の爲めに靑く見えるほど、その稼業としての本色があらはれてゐる。『まだ眠りが足りないから、けふは會ひたくない。歸つておしまひ！」

「そんなこと云はないて、鳥渡顏を出してお吳れ、な。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「動きたくもないんだ。」

「鳥渡だからよ。」

「いやだよ！」

「鳥渡だからよ。」

「いやだと云つたら、いやだい」と、投げ出してゐる足で疊を蹴る音をさす。姉さんの權幕に恐れて、ほかの子や女中もお時にあがれとは云はない。お時は困つたと云ふ樣子でつッ立つてゐる。餘り相手にされないので、お時が

「それぢやア、お母さんに餘りひどいぢやアないか」と云ふと、

「お母さん、お母さんて、よして貰はう！棄てたんだから、あたいはお時さんの子ぢやアない！」

「ぢやア、誰れの子だい、まさか、木の股から生れやアしまいに？」

「あたいはあたいの子だい！」

「分らないにも程があらう！」

「分つてらい！また金を貰ひに來たんだらう？」

「僅か二三圓でいいのだから。」

「やらない、やらない。もう、一生やらないから、來ないでもいい！」

「お前が藝者になつたのも、わたしが世話したから出來たんぢやアないか？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『そのお轆は遠に濟んでしまつた。可愛さうだと思つて、持て餘してゐりやア、いい氣になつてつけあがつて來るんだ。あたいはあたいの苦勞で儲ける金だよ。あつても、もう、やらない！』

小常はもと自分の懷の現金や身のまわり物をよく人に投げ出して、その心意氣を自分も誇りとし、人も亦讃めてゐた。然しそれは實際自分の物ではなかつた。また、自分の物であつたとしても、死んだも同樣の人間の物であつた。それを投げ出したのを誇つたり、讃めたりしたのが、今では、をかしくッてならないのだ。して、藝者になつても、『お時の喰ひ物にはならない』と云つた言葉を漸くこの頃になつて斷行することが出來る樣になつたのである。

小常は思ひ切つて、お時を會はないで歸してしまつた。

『ああ、せいせいした』と聲に出した。して、小説の開いてあるところを讀み返してゐたが、いつの間にかまた寢入つてしまつた。

一〇

小常は一度須藤の家を音づれたが、吉則に眞面目くさつたへぼ說法を聽かされたのがいやになつたのか、それッ切り顏を見せたことがない。

勝次郎は自分が棄てられた女に會ひに行つた馬鹿者だと人々から冷笑されたので、またとは會ひに行かない代り、燒けを起して放蕩に耽り、とうとう大野屋をつぶしてしまつた。

お時は娘に寄せつけられない樣になつてから、その小間物店を閉ぢてしまひ、世話人があつたのを幸

ひ、今の酒屋の隱居の女房になつたのだ。お常の母だけに、ちやんとしてゐれば、年寄りのかみさんとしては、人品もさう惡く見えない。

聽くところに據ると、小常は、その後、自分がうち込んでゐた男の爲めに、出來た金をみんな自由にされてしまひ、自分も亦棄てられた。して、今では、藝者をやめて、或博奕うちの親分と一緒になつてゐるさうだ。

叔父さんの吉則は、お常が最近に訪ねて來た時の、不斷着に黑縮緬の羽織を着込んだ姿を思ひ出しては、

「あの子もどうしてゐるか、なア」と云ひ暮してゐる。

（完）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

和歌

尾上柴舟選

○　天野謙二郎

黄ばみたる壘の上に疲れたる身をよこたへしひるのしづけさ

別れ來てひるの埃のほのじろく窓の硝子にうつれるを見る

日のながれあかるきひるの木の間をば小鳥のむれのこゝろよくなく

あたゝかう風のながるゝひるの野にうす紫の豆の花咲く

夜の風のつめたく胸に滲みてくる停車場前の青きともしび

潮の香のさびしき海の上てらす燈明臺の青きともしび

暮れのこる夕べの空のあかるみに野はひとしきりいろどられけり

木の花の白く咲きたる林間にまひるの海の音ひゞきくる

○　三浦曉村

歸り來る電車の中にさびしくも夜毎溢るゝわが涙かな

宵闇の巷に白く漂へるうすき明りに身を浸し居り

しづかにも櫻ちりしくやはらかき野邊の芝生の星あかりかな

眼の前に海はひらけぬうす青き林を出てゝ涙ぬぐへば

やはらかに小草萠え出る丘の邊の明るき空に鳴く雲雀かな

すさみゆく心に浮ぶおとろへし母の笑顔のかなしかりけり

走り來てつと身を投げし丘の上匂ひわびしく青葉しきたり

○　關本梁村

更けし夜の醉ざめの眼にうつり來るもの力なく靜かなるかな

春の雨鳥の胸毛のやはらかに水にうかべるほど

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

をおもひぬ

しめりたる土の上這ふやはらかき蔓草の芽をひごとはぐゝむ

わが聲のかぎりに歌をうたはなむなごりの光海にうかべる

こゝろよき夕べとなるにしたがひて晝のつかれをおもひ出てけり

今日のみは歌もうたはずものも云はず巷の人になりにけるかな

〇　指田白縫

君が瞳よ奥に小鳥も鳴きぬべき青き林のあるこゝちして

あなしづにしづに月照る一山の木の葉音なく今かちるらむ

見てあれど落ちし木の葉は落ちしまゝ動かず泣かず夕べとなりぬ

日をあふぎ男の子と生れし幸ひを何と謝せむとおもひし昔

日のまひる直ちに空に放つべき清き愁ひにあらざりしかな

樹より樹へ山雀どもの群をなし飛びもて去るを涙して見る

野の果ての黒き木立と相對し靜かにありぬ月高く澄む

〇　加藤玄裳

あゝひとり靜に沈まむ日を思ひ二見の海を涙して見る

あたゝかき二見の海のふところに幼兒のごとさらば眠らむ

悄然と狂へる波を見てありぬ二見の浦の岩にもたれて

落日は遂に溺れぬあめつちの光を吸ひて二見の海に

胸鳴り出づ二見の海のおほ濤の鼕々として夜空に鳴れば

あゝ遠く明滅すなる海上の青き灯に似る我が命かな

〇　小澤紫紘

歎きつゝ市のどよみをよそにきく刀根の河原の夕なつかし

かにかくにこゝろ歎きのしづまらず樹々に動ける白雲の風きく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いつかまたかなしきことを思ひてぬ夕逍遙の刀根の水際に

黎明の廣野の中を刀根の水白う光れる清々しさよ

たんぽゝの種子そこはかと飛びめぐる夕ぐれの野に風の光れり

○　小島ます子

雲雀鳴く野邊の樣なる御胸に我はと思ひ心あがりぬ

柔き木草のわか葉風吹けばともに亂るゝわがあらひ髮

言葉もていふべからざる歎ひは歎きに通ふよき月夜かな

ほとゝぎす鳴く夜となりぬうばら咲く谷に水汲む家をし思ふ

ほとゝぎす鳴きそめにきと書きてより事少なゝるさみだれの日記

○　岩谷莫哀

櫻島おほきくけぶり鴎なく南さつまの晝の情調

異敎徒の如く人皆われを見る薩摩の國は住むに堪へざり

神とは云はじ吾は人ぞとおほやけに名乘り得るまで生きてあらまし

悲しみを深くつゝみて青葉どもよろこばしげにうちそよぐ哉

みなし兒とわれを憐む人の前いふに云はれぬ強さをおぼゆ

○　正木哲夫

この心わすれむとして雜路の中をなかをとゆけどかひなき

白熱の大野のひるの光だに尙冷やかに見るになれたる

夏の夜や灯ひときは強うして櫻青葉にさしても見たる

春のよひ生れしときに植ゑしてふ櫻仰ぎてあれば悲しも

ひとりゐて風もなごめる春の日はまひるながらに戀など思ふ

おぼろ夜や杉の木立を仰ぎつゝ社の石にたてる寂しさ

○　伊藤孝一郎

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やゝあつきちまたの塵になやみ來てサイダーを飲む公園の宵

白薔薇芝山つゞく公園の南の籬に列なして咲く

ひとりゐて時計の音のたゞひとつきくだに夜はたへがたきかな

この娘等が母となり得む美しき日記をわれに書かしめ給へ

○　江上梁

わが心息ふ間なく新しきものよりものにうつる悲しさ

まばらなる若竹原に白き花つゞけり遠く親しみて入る

しみ〴〵と悲しきことを思ひたるあとの疲れし身ゝ横たへぬ

竹山の裏の日影に寂しくも小き豆の花の咲きたり

○　大場白葉

春の夜はものやはらかし月も樹も樂の調も我等が仲も

白き花いさゝかばかり木の枝に殘れり小さきなげきをば見せ

柔きつかれを見せて妹は眠りぬ汽車は闇に鳴り行く

しみじみとわれてうものを思ひ見ぬもの冷かに眠り行くとき

○　澤野白百合

このまゝに止ることはうら悲し歩むにまかせひとり行かなむ

斷崖(きりぎし)の藤の花など眺めつゝ野にねころべば塵もかなしき

われ多くものを語らずうら若き心荒みて多くかたらず

父母もわれ等の年齡(とし)の昔には若き愁のありぬなるべし

○　廖文仁朝信

ふところに酒のもたひさもつは誰ぞ墓場の青き月光のなか

灰白き墓のあたりをたゞれたる夕日をながめ人の歩める

二上りの三味の音こそかなしけれひなの郭の青きあけぼの

風の日のわたつみのごとたちさわぐ君を見てあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り山のごとくも

○　眞崎白城

たゞ一つはつ夏の野の濃みどりの中に咲くなる花のなつかし

空くもれり下に白けて大海は絶えずかなしき響きをあげぬ

麥の香の甘くしづかにたゞよへる中をさまよふ君を思ひて

花菖蒲少しひらきしむらさきに細き雨ふり五月は來る

○　西井金羽

汽車はてしプラットホームさみしかり黄なるランプの靜にふるへる

あめつちにあふるゝ靜寂なより來るこの夕暮をひとり野に立つ

ほとゝぎすあはれや今も啼きてすぐ山の幾夜をありえずわれは

○　下村淳

染々と悲しきことの思はるゝ練兵場の春のたそがれ

蜜蜂の羽音かすかにたゞよへる眞晝の丘に日をあびて座す

青き空白き雲ありゆるやかにしづかにうかび日をあびてあり

ごみ白き硝子窓より入り來る春の光のうすきがさびし

○　近藤愛香

君人は泣きて涙のあともなし強き性には生くべかりけり

うらさびし悲しくわれの歌へるに默して君はひとり歩めり

暗きに居士龍の如く天日を恐れてひとりわれの歌へる

○　賀茂眞澂

地なる黄とあめなる青にはぐくまれいだかれながら若草はもゆ

すぎこけのまだらに青きみちふみてわがまぼろしは君にあひぬる

なまなかに人世をしりかなしめる三十路の死ほどあはれなるはなし

○　杉山守眞

春の野に君に問はれし草の名をふたゝびみたび

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

思ひ出づる日
つや消の玻璃すきとほす春の日に机の上の花咲かむとす
櫻ちる春の夕のそゞろありきわかき二人の足音のよさ

○　竹田實雄
山の襞谷のあはひの明らけさ今落日は黄の色をなぐ
柔かき線をうかべて街の家根くろう光りぬ春の夜の月

○　小出秀月
天地の廣きを思ひわがわかぬことなど思ひはてなき日なり
來る日の悲しみほのに響くなり夕暮れ白き渚に立てば

○　藤三千緒
わが妻のこの醜さを神に謝す日の來らむを信ぜむとする
頭洗ふ石鹼の白の香にまじりうすら消えゆく朝のかなしみ

○　村田光烈
あゝたのし空を仰げば倦み果てし心の奥におどろく聲す
故わかずたゞ神經のいら／＼とする一日なりうとましきかな

○　菅原迫村
うすくろき怪しきものゝ物かげにひそむ刹那を晝とこそ云へ
我れも人もあやしからざる一筋の道行くうれし晝の世にゐて

○　金田春吉
眼を閉ぢて神を祈れる其の人の男なるゆゑまして悲しき
幼き日醫師にゆくをよろこびし子は病むまゝにかく老いにけり

和歌原稿は東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛中央公論歌稿と表記ありたし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俳句

蠅

高田蝶衣選

らちもなき無聊の筆や蠅の歌　夢筆
蠅帳や河風抜けの若葉窓　同
露地小亭飄々平たり旅衣の蠅　同
束帶にすさまじきものや蠅の糞　同
禪榻を尋ねばやうき蠅の晝　雨圃
魚買へば隣乞ふ魚屋蠅群れて　同
蠅の如く君が戀話の嫌はれて　同
灑掃にも寮規增しけり蠅の頃　同
沐猴の冠に糞して蠅の去る　寒浮
蠅打つて佛心生ず愚も聞けり　同
縞目工夫にうるさしと蠅打ちにけり　同
奇僧語らず蠅多しとて歸りけり　同
地にうねる牛涎蠅をつなぎけり　耳山
忌籠の鏡に來るや夜の蠅　同
漁干場人も乾されて蠅の晝　同

蓬梳く風や岡の家蝨稀に　墨佛
蠅とぶや芭蕉日高き驛口　同
山明りする縫殿や蠅飛べり　同
村塾の草紙いきれを蠅飛べり　多城生
蠅打つや謦咳を想ひ來れば君　同
蠅飛ぶや拂子も寫經一具なり　同
人乘れば渡舟に移る草の蠅　蝗郎
日南雨過ぎてしづまる草の蠅　同
氣草臥睫に蠅の殖ゆるなり　易川
蠅とぶや大飯食へば尻長な　同
蠅叩陋巷に處れば人腐儒といふ　月椅
蠅とぶや養鷄の利に豚を飼ひ增せり　同
青蠅や生き腐りとも云ふ魚に　人生
蠅打ちし悔や淨書に血を印す　同
蠅飛ぶや寐顏ほてりも魚中り　不寐庵
蠅捕りとあさましき此草名かな　同
天井繪の龍の眼を蠅怪めり　狠子
人去りしあとの落首や蠅の居る　同
空せ貝汐さすや蠅ふためきて　如星
草蠅や詣人ある洞佛　同
頭上の蠅も拂はず詭辨かな　翠雲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

默想の紙上を走る蠅もあり　同
豪雨とゝならで憂き日を蠅のとぶ　而鳩
馬蠅や馬を離れて月出たり　同
戯作者の机の上や蠅つるむ　琴星
寺々は翠微の中や蠅少な　同
糊桶の底漏りて蠅たかりけり　白鳩子
柚が家白帆見ゆれど厨の蠅　同
閣の靜舟中に如かず蠅の居ぬ事も　四水
桝形に高積む秣蠅とべる　朔兮
金泥の落雁に蠅のおこなひや　叱咤郎
蠅拂ふ師や眠るに非ず莞爾たり　倨人
蝦網の眞午の濱や蠅の群　艪島
蛇の蛻と知る山道や蠅の群　キ山
蒼蠅の賦に今人を疎みけり　燕閣
大寺の古りし柱や蠅の糞　春雨
滿房の蠅瘴癘の妖と見て　木犀
蠅多し草家〳〵の馬をわぶ　夕影
いかに蠅憎からずやと紫女清女　春草
蠅飛ぶや俗事閑居に傳へ來る　驟雨
馬市に通ふ要衝や蠅の宿　水竹
蟻の引く蚯蚓にも蠅去り兼ねつ　牛頭郎

白眼に見れば蠅多き世上かな　翠雨
雜念を我にそゝりて鳴く蠅か　風水
蠅猛者の蜘蛛條網にふれにけり　梧蒼樓
輕薄の人美味に寄る蠅も哉　摩天郎
兵法の虚實を云ふに蠅飛べり　夢吊
魚市のすむせり臺や蠅の群　美川
爭論の頭交々蠅たかる　寸江

課題

早　七月十日〆切
秋の聲　八月十日〆切

規定

△應募句は淡路國假屋仼高田蝶衣宛
△一人三十句以下△用紙は半紙の事

正誤

木ゝ咲くや村治の忙に家事を見ず　蛙念子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

評論

統監更迭

曾禰統監病を以て去り、寺内陸相之に代り、更に前遞相山縣伊三郎氏副統監に任ぜらる、此の更迭は概して世間に歡迎せらるゝも、韓國に武斷政治を行ふの可否は頗ぶる疑問たらざるを得ず

臺灣に看よ、其の總督が軍政のみに重きを措ける時代は失敗のみにして兒玉總督が軍政を撤して民政を主としたりしより、統治始めて其の緒に就けるとを、韓民必らずしも臺民と同視す可らず、彼に適するもの必らずしも此に適せざると勿論なるも、吾人は尙ほ聊か憂慮を禁ずる能はず、韓民を治むるの要は簡約にあり、法三章にして殆んど足る、文明政治は尙ほ早く、武斷政治は酷に過ぐ

寺内子必らずしも武斷政治を行ふに限らず、去れど文官の統監たると、武官の統監たると、其の施設に變化なくんばあらず、或る人曰く、伊藤公すら尙ほ海軍々人に近き服裝を用ひ、帶劍して以て統監の威嚴を保ちたりき、カーキ服に赤帽長劍の寺内統監は、求めずして韓國を威服するに足らんと、是れ一種の好謔のみ、否、統監服なるものは寧ろ伊藤公の榮譽心に出てしのみ

日露協約説

日露兩國間に協約を締結せんとし、露都に於てイスヴォルスキー、本野間に交涉を重ねしは事實也、其の調印せられて發表を視る亦當さに近きにあらん乎

近時露軍約一師團實地演習の名義を以て蒙古の庫倫に入り、而して張走紊擾を廣れ、右演習見分の名義を以て、若干の將校を同地に派したりと傳ふ、此の間我が帝國が恰かも知らざるが如き態度に出づるに徵すれば、日露新協約なるものゝ精神亦察すべきのみ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

拓殖局新設

政府新たに拓殖局を設け、總理大臣に隷して韓國及び臺灣、樺太並びに外交に關するものを除く關東州を統理するとし、六月廿二日其の官制發表と同時に、桂侯其の總裁を兼ね、後藤男其の副總裁を兼ね、內田氏（管船局長）部長となり、江木氏（法制局參事官）書記官に兼任せらる。統一素より良し、去れど統一の名の下に畫一主義を執らんとするが如きは、深く戒めざる可らず

國務調査と生產調査

國務調査局、生產調査局設けられ、政府の官吏及び貴衆兩院議員其の他の人々委員に任命せらる

國務調査はセンサス、也、吾人は其の實行の速かなるを望む、生產調査會にて第一の問題となれるは、蠶種統一案是れなり、吾人の聞く所によれば、蠶種統一のため、之を官營とするの案は、生糸の製造と貿易とに少からざる關係ある三井筋の策略に出づといへり、統一必らずしも不可ならざるも、官營は少くも疑問也、生產調査會の委員等切に考慮して以て利害を究明するを要す

海軍擴張論

海軍擴張論近時翕然として輿論と爲らんとす、國民黨之を唱へ、政友會之に和し、而して一般國民亦太だ異議有らず、聊か躊躇するは其の財源の有無深淺に掛念あれば也

動もすれば日米開戰論を唱へ、太平洋の平和を威嚇せんとする米國が、鋭意海軍擴張を爲す限り、我れ亦海軍擴張を度外に措く能はず

米國の海軍熱は、主として事業無きに苦める造船業者の煽揚する所、日米開戰說の如きも、多くは彼等の指嗾に出づ、米國の如き金力豐かにして而して軍人たるもの少き國柄に有ては、假令多くの巨艦大艦を造るも、或は戰將鬪士を得がたきの虞あり、彼れ海軍國として必らずしも憚かるに足らざるも、油斷は大敵也、我れ亦萬一に備ふる所莫かる可らず、海軍擴張實に已む可らざる也

海軍擴張のために、非募債主義を破るは非也、斷じ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て非也、是れ我が財政計畫を根本より覆へすものなれば也、但だ土地の法制地價と賣買地價との差額に相當の課稅を爲し、或は石油又は清酒等を官營とせば、海軍擴張未だ必らずしも財源なきを患ざる也、黨人及び識者宜しく思を茲に致すべし

清國々會の速開

清國人の諸團體政府に建議して速かに國會を開かんことを請ふ、蓋し西太后及び先帝の遺詔に由るよりも、期を早めて開會せんことを求むる也

其の言條理あり、熱誠あり、鑿々として聽くに足る、慶親王、那相等は輿論を重んじて其の採否を資政院に附議すべしといひ、或は之を却けて嚴に取締るべしと做す者もあり、然れども概して重きを輿論に措くの意向多數なるに似たり

國會を速開するも、泗川、甘肅、雲南等の僻遠なる地方に在ては、議員の往返に甚だしく不便ありて、實際幾多の支障を免かれざるべし、清國官民深く考慮せざる可らざる也

南清の革命黨

南清に革命黨多く、既に北京に潜入して、攝政王の邸に爆裂彈を投ぜるもあり、又南京博覽會を機として暴發せんとする噂さありしも、六月五日以來博覽會開催されしも幸ひに其の事無し

革命黨の暴行稍々常識あるものに嫌惡せらるゝ傾向なきにあらず、國家多事の時、徒らに現王朝を顚覆するも、得る所知るべきのみ、眞に清國のために計るもの寧ろ之に與するを得んや

清國新公使排斥さる

胡惟德氏本國に轉勤し、其の後任として汪大燮氏日本駐劄公使と爲る、東京在留の清國學生等汪氏を以て徒らに日本に親む賣國奴と爲し、極力其の排斥に努むといふ、清國學生が其の專修學事に懸命ならずして、好んで政治に容喙し、甚だしきは公使排斥をすら企つると、果して是乎非乎、吾人頗ぶる惑はざるを得ざる也、彼等の愛國心に就ては乃ち領すべきも、其の力を用いて大に國に盡すの期は、別に之あるに非ざらんや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日清の厚誼の好機會

近藤、大谷、西村、大橋等の實業團南清に入り、日本の新聞記者團又南京博覽會に至るや、南清官民の歡迎するもの多く、其の意向一變せんとす、曾て排日思想の熾烈なりし此の地方の風氣の轉ぜんとするは、吾人の悦び迎ふる所、此の機會を逸せずして、以て日清兩國の情誼を敦くするに力めよ

伯爵同志會も動搖す

伯爵同志會にも亦土方、東久世、松浦、滋野井、伊達、園の諸伯脫會す、談話會、二七會皆動搖して、比較的に堅固と視られし同志會また斯の如し、明年の貴族院改選期までには、尙ほ幾多の波瀾起伏あるべき乎

會社の整理

一時破綻百出せし日本精製糖會社は整理略々其の緒に就けるが如く、東洋汽船會社も重役の選定に依て前途に曙光を認め來る、但し北海道炭鑛は、混沌として未だ判ず可らず、日本石油に至ては、全く絶望するに似たり

蘇生するものは蘇生し、倒るゝ者は倒れよ、然る後會社界始めて健全なるを得れば也

大角力の失敗

國技館の五月場所、竟に五分以上の入を看る能はざりき、惰者の成功せざる、此の一事好例證たり

（以上ＸＹ生）

南阿聯邦成る

五月三十一日南阿聯邦成る、顧みるに和蘭民族の頭領ボタ將軍が、櫛風沐雨、自由獨立の爲めに戰ふて遂に英軍に克つ能はず、泣ひてトランスヷール、橘河（オレンヂ）兩共和邦の滅亡を承認する文書に調印せるは實に八年前の同月同日なりき、然るに今や南阿の自治全く確立し、當年の降將自ら其首相と成る、今昔の感如何ぞや

試みに新聯邦の制度組織を紹介せんか、同聯邦はトランスヷール、橘河殖民地、喜望峯殖民地、ナタール

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の四州より成る、行政廳はトランスヴァール首府プレトリアに置かれて英帝代表の總督茲に居り、聯邦內閣又茲に在り、立法部は上下兩院より成立し喜望峯殖民地首府ケープ、タウンに置かる聯邦の公用語は和蘭、英吉利兩國語を使用し其間に庭廷を設けず、上院議員は各州より選出せるもの八名と總督の任命に係はる八名とより成り又下院議員は下の如く分配せらる、喜望峯殖民地五十一、ナタール十七、トランスヴァール三十六、橘河殖民地十七、然かも皆歐州人の血統たらざる可からず、而して議會通過の法律は總督之を否認するを得、又英國皇帝（即ち母國政府）は一箇年以內に何時にても之を否認するの權限を保留せり、其他各州に關する規定等、加奈陀憲法に類似せる所頗る多きを覺えしむ、

忌憚なく許せしめば、同憲法は未成品也、其立法部及中央政廳の所在を分離せしめたるが如き、斷じて政務を圓滑にする所以にあらず、又南阿の人口比例を檢するに、橘河殖民地の歐州人は全人口の四分一、トランスヴァールに於ては五分一、喜望峯殖民地に於ては四分一、ナタールに於ては十分一に過ぎず、其他は悉く有色人種なるに、喜望峯を除けば皆有色人種の參政權を拒絕せるが如き、豈亦公明なる規定ならん哉、然かも是等は從來の行掛りに累ひせられたるの罪なるのみ、吾人は寧ろそが憲法修正を容易にし、他日改革の途を開き置けるを美とせざる可からず

唯憂ふ所のもの一あり、何ぞや、曰く英和兩民族が果して能く調和す可き乎是也、蓋し南阿聯邦の成効如何は一に此點に依つて分れざるを得ず、若し和蘭人にして飽く迄舊來の排英的感情を維持するあらば、同邦眞成の繁榮策を講ずること難からむ、而して最近外電に見えたるボタ對フイッツモウリス反目說の如きは斷じて歡迎す可き好報道にあらざる也

不文憲法の罪

英國政爭妥協運動起る、何が故に起りたる乎、吾人は之を見て其同國不文憲法の罪たるを悲む、

抑も不文憲法の缺陷は、人之に背くあるも直接に之を制裁するの方途足らざるに在り、試みに思へ、首相アスキス氏、議會再解散を斷行し、上院改革問題を爭點として新議員を選擧せしめたりとせんか、此下院は上に憲法の本義に依り改革問題の關する限りに於て確かに最終の判定者也、然るにも係らず、上院若し堅白

異同の辯を弄し、此本義を無視せんには、首相アスキス氏は如何なる方途を執る可き乎、貴族新造か、そは先例もあれども數百名の多數に上る可きを奈何、否な新帝は斯る處分に同意させ給ふ可き乎、

茲に至ては最早や妥協こそ良策なれ、而して首相アスキス氏は遂に和を敵軍に求むるに至りし而已

西班牙の宗教改革

西班牙國、宗教改革を斷行し、羅馬敎以外の宗派に許すに、公然傳道し、其旗章、徽號等をも外部に現はすを許す、是文明の趨勢ながら、亦羅馬法王に對する大打擊也、知らず昨年バルセロナ叛亂を起し、一敗刑に就きたる非敎會派の有志團、地下に於て微笑しつゝあるや否や

葡帝遜位說

六月中旬、葡萄牙皇帝遜位說紛々たり、理由を問へば則ち曰く、皇太后の贅澤奢侈、皇室を負債の裡に苦しましめ、今や頻々起訴を見るに至りしを以て也と、蓋し民心漸く皇族の放縱に飽きたる歟、

マヌエル二世即位以來僅かに二年、先帝弑害の後を承けて皇威未だ舊に復せざるに、俄かに此說を見るは、抑も何等の怪事ぞ、吾人は此年少皇帝の境遇を想ふて轉た憮然たり

クリート問題

クリート問題、何ぞ擾々として決せざるの久しきや、英佛露伊（同島保護の任にある）は何事をかなしつゝある、

クリートの地、希臘に合するは寧ろ自然のみ、其人口三十一萬中、基督敎徒二十七萬、回敎徒三萬三千、猶太人及居留外人約七千、而して其所謂基督敎徒は多く希臘人と血統を同うす、合併の外何の策かある、況んや亦一昨秋勃牙利獨立問題勃起の際、列强か「合併承認」の内約を與へ希克兩民を沈默せしめたる責任あるに於てをや、

然らば土耳其に對するの策如何、曰く償金を拂つて名義的主權を購ふ可き也、吁嗟希土兩國の豫備兵召集、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

獨逸新紙の英佛十離間策、クツート議會の回教徒迫害、　いせむ
世人は最早や此小島問題の遷延に飽きたる也

ロオズヱルト氏歡迎

ロオズヱルト氏は幸運兒なるかな、六月十八日一年の阿弗利加、歐州旅行を終へて紐育に入るや、民衆歡呼、殆んど歡迎に狂せるの色ありき、是何故ぞ、米人はタフト氏の花々しからざる執政を欲せざれば也

新政黨組織

外電傳へて曰く、米國セントポール市にロオズヱルト晩餐會あり、席上タフト氏の政治がツラスト征伐、富源保護を充分に實行せざるを憾みとし、新政黨組織決す、領袖たるものは、ロオズヱルト氏、前内相ガーフヰルト氏、前森林局長ピンショット氏と、恐らくは眞態を得たるの報道にあらざらむ、ロオズヱルト氏は共和黨の大立物、一たび起たば群雄雌伏す可し、何を苦んでか別箇の黨派を求むるを敢

新印度總督

六月中旬、英國外務次官サー、チャルス、ハルデンジ印度總督に新任す、彼や冷靜の頭腦、辛辣の手腕、遙かに前任者ミントオ伯の上に在り、加ふるに久しく波斯、露國に使臣として東洋の形勢に精通す、印度外交恐らくは之より振はんか、然かも印度政治今日の難は外交に非ずして寧ろ内政に在り、換言すれば印度人間の革命的思想を打破して、英印調和の途を講ずるに在り、知らず内政に無經驗の新總督は如何にして此間に處せんと欲する乎

芬蘭(フィンランド)の運命決す

久しく世上の問題となりたる芬蘭(フィンランド)憲法廢止は、愈々六月上旬を以て決定したり、此件に對する芬蘭人自身の抗議、伊英佛代議士及有志の陳情書提出は寸毫も露國議會を動かざるのみか、却て之を激昂せしめ、其反感を強くしたるの觀ありき、投票の結果に曰く贊成百

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

六十四、反對二十三、吁嗟是露人の良心のバロメター
に非らざる乎、

然らば則ち今後の芬蘭(フィンランド)は如何、新案に依れば芬蘭は自治の根礎たる課税權を露國議會に奪はれ、又内部行政に關しても根義的性質のもの、決定は一に之を帝國立法に待たざるを得ずとせり、玆に至て吾人は所謂芬蘭議會の權限として何物を餘すかを怪しまざるを得ざる也、

顧みるに一八〇九年、亞歷山一世、公式に芬蘭を合併するや、瑞典隷屬時代以來繼續せる芬蘭人の特權を承認せり、所謂芬蘭憲法則ち是也、此誓約文は歷代の皇帝常に尊重して渝らざりしが、今帝の御宇に於て端なくも空無に歸す、然かも之を擧げて空無に歸せざる可からざる所以に至ては則ち無し、天下後世の清議は長へに之を罰して止まざる可き也

(備考、芬蘭議會の立法に對しては芬蘭總督は多大の權限を有するを以て事實上芬蘭の自治は露帝國の政策を邪魔するものにあらず、近年軍事上の統一問題ありたれども之も軍事問題以外の改革を要求する理由とはならず、是憲法廢止の謂れ無き所以也)

日本關稅攻擊

英國に於ける日本關稅攻擊、一何ぞ盛んなる、然かも翻つて想へば、是毫も怪むに足らざる也、

何を以て之を謂ふ、蓋し此攻擊の裏面には二箇の潮流ある也、一は清國に於ける英人の事業が續々日本人の侵略に遭ひ居る折柄、法庫門、若くは錦愛鐵道問題等あり、爲めに益々排日感情を高め、同盟の破棄を希望するものにして、支那協會幹事ウイルコックスの如き之が代表たり、他は英國の自由貿易主義を厭ひ、關稅改革を必要なりとし、米佛日の孰れたるを問はず、關稅率引上げを行ふものあれば、之を機として英國が報復手段を有せざる爲め不利益を買ひつゝありと主張し、以て國民の心を動かさんとするものにして、タイムスの如き之が代表たり、

事情斯くの如しとせば、何ぞ必らずしも日本關稅攻擊の頻々たるを怪しまむ、而して我國民は宜しく之を無視して可也 (以上懷沙隱客)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新刊批評

▲彰義隊戰史

山崎有信著
隆文館發行

幕末の花ともいふべき彰義隊の史實を傳へんが爲めに著作せられたるものにして、一度「時事」紙上に連載せられたるものを增補訂正して出版したるもの也。著者が彰義隊に向て注ぐ同情の濃やかなると、些細なる事蹟をも正確を期せんとするの熱心とは全篇を通じて何れの箇所にもあらはれたり。彰義隊史の典據として江湖に推奬するに足る。（特製金六圓、並製金三圓六十錢）

▲散文詩集 霧

河井醉茗著
東雲堂發行

所謂口語詩數十篇と美文めいたるもの新篇とを集めたるものにして、新詩形の研究に向ては多少の稗益する所なきにあらざるべきも、讀みて面白しと思ふもの丶極めて尠きを憾む。（定價五十五錢）

▲ツルゲーネフ集

吉江孤雁譯
博文館發行

「幻」「唖」「ファウスト」の三篇を翻譯したるものにして、譯者の優雅にして暢達なる筆は、極めて原作の情趣を傳ふるに適し、全體の翻譯中一頭地を抽きたるものなるを感ぜしむ。（定價四十八錢）

▲法理に關する初學者の疑問

山本留著
三書樓發行

因果關係、意思及び意識、法及び人格、物、推理等に關して著者の抱く疑問及び解釋を述べたるものにして、大體に於て寬博士の法理哲學より得たる所少からざるが如し。博士が卷頭に序して「高遠を達觀するは卑近を洞察する所以、卑近を實行するは遠大を實現する所以なり。故に近きを忘れざるは元より悟にして、爲めに遠きを忘るゝは大なる迷なり。學朋山本留君此時弊を匡正せんとし、其一端として法理に關する疑義を公けにせんとす。蓋し疑は智を待つて生じ、疑起つて智益々明かなり。轉疑即是明智、斷惑即是證智のみ。今君が誠意提出する疑問は自家の智を明かにする順序にして亦少くも現代學界の惑を斷ずる階梯なり。然かも其最後の根據を汎神論に求め、小智に拘束せられずして大智に頼らんとするに至つては、既に斷惑證智に屬するもの丶み、記して序となす」といへるは本書の價値を充分に說き盡せるものといふべし。（定價一圓二十錢）

▲社會と人道

留岡幸助著
警醒社發行

社會事業、教育事業、慈善事業、感化事業等について著者が二十年來懷抱且つ實行し來りたる意見を述べたるものにして、著者が實驗上より得たる新らしき材料も亦尠からず。全篇に亘つて著者の社會改良に熱心にし且つ極めて穩健なる意見を有する人たるを知り得べし。社會を益

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

することは甚だ多き嘗たるを失はず。（定價金貳圓）

▲花袋集

田山花袋著
易風社發行

短篇集中最も實行よき花袋集は今回並製をも發行したり。（定價七十錢）

▲耽溺

岩野泡鳴著
易風社發行

泡鳴氏の小說集にして「耽溺」「篠原先生」「老婆」「日の出前」「戰話」「結婚」「榮吉」の七篇を收めたり。泡鳴氏の小說には修辭並びに文章上より見て非難すべき點極めて多きも、直截に描かんと欲するものを描きたる所は頗る痛快なり。近來の短篇集中最も注目すべきものゝ一なり。（定價八十五錢）

▲東洋教育史

中島半次郎著
早稻田大學出版部

東洋とはいふけれども日本と支那とだけが收められ、他は其中に往々散見する位のものである、日本の方は大別して六期となし、第一期を建國當初の教育とし神武天皇紀元より應神天皇の十四年迄、第二期を大和盛世の教育とし、應神天皇の十五年より文武天皇の四年迄、第三期を奈良朝平安朝時代の教育とし、文武天皇大寶元年から後鳥羽天皇の建久二年迄、第四期を鎌倉室町時代の教育とし、後鳥羽天皇の建久三年より後陽成天皇の慶長七年迄、第五期を德川時代の教育とし、後陽成天皇の慶長八年から今上天皇の慶應三年迄、第六期を王政維新後の教育とし、今上天皇の明治元年より其四十年迄を收めて居る、之によりて先づ我國民性を見、次いで其模倣時代を見、其圓熟時代を見、扨ては武士道教育に一致せる時代、それと宋學その抱合せる時代、戀ては西洋文明を吸收せる時代等明確に見ることが出來、極めて其區劃の妥當を覺える、體系甚だ整然、敍述も頗冗ならず、能く我國教育の自らなる推移の跡を探ることが出來る、支那の部は史實の稍貧索を覺ゆる點はあるけれども、而も支那教育推移の大系は明晰に寫されて居つて、遺憾なく今日の狀に至る迄の往路が觀取される。好著述として歡迎すべきものだ。（定價金壹圓）

▲スピノザの研究

波多野精一著
警醒社出版

波多野博士が今より六年以前に學位論文として提出した、元と獨逸文に成つたものを、此度安倍能成氏の手によつて飜譯され、新に梓に上されたもの、全體が二篇に別れ、第一はスピノザの汎神論に於ける內在の思想、第二がスピノサが性の平行論及び其認識論である、スピノザ哲學の根本たる內在論扨ては其平行論認識論と一糸亂れぬ微細の論法を以て縱横に分拆し、批判し、論評をも加へたるもの、博士の眞面目なる研究の結果が遺憾なく發露されて居る、斯學者の一覽を避くべからざるものである。（定價金七十錢）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

●本號に限り定價金貳拾貳錢郵税金貳錢

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　京橋元數寄屋町	北隆館
仝　本郷本富士町	盛春堂
仝　京橋西紺屋町	良明堂
仝　日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文館
仝　京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金八圓
一頁	一回	金拾五圓
表紙の二、三、一頁	一回	金貳拾圓
表紙の四	一回	金貳拾五圓

廣告一手取扱　神田三河町一丁目　博報堂

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税拾錢但清、韓兩國を除く）

冊數／區別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢

以上郵税共

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割増に送らるべし

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず察まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年六月廿六日印刷
明治四十三年七月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場